奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

平成元年度

1990年

奈良市教育委員会

奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

平成元年度

１９９０年

奈良市教育委員会

発掘区全景（航空写真）　右京三条三坊一坪（第 169 次）

発掘区全景（航空写真）　右京三条三坊一坪（第 173 次）

発掘区全景（航空写真）　右京三条三坊一坪（第182次）

発掘区全景（航空写真）　右京三条三坊一坪（第184次）

ＳＸ 16 出土須恵器杯　右京三条三坊一坪（第 182 次）

ＳＫ 101 出土能面　右京三条三坊一坪（第 169 次）

図　版　目　次

巻首図版 1　発掘区全景（航空写真）　右京三条三坊一坪　169・173次

巻首図版 2　発掘区全景（航空写真）　右京三条三坊一坪　182・184次

巻首図版 3　SX16出土須恵器杯、SK101出土能面　右京三条三坊一坪　182・169次

図版 1　右京三条三坊一坪（1）　航空写真
図版 2　同　（2）　SX01～03
図版 3　同　（3）　SX04・05
図版 4　同　（4）　SB01・02・03
図版 5　同　（5）　SB04・05・07・08
図版 6　同　（6）　SB09・10・14
図版 7　同　（7）　SD12・13、SA01
図版 8　同　（8）　SB50・57、SA11
図版 9　同　（9）　SA12・17、SB48
図版 10　同　（10）　SB21・22、SD28
図版 11　同　（11）　SB58・70・71・72
図版 12　同　（12）　SD16、SB15～17
図版 13　同　（13）　SD35～37
図版 14　同　（14）　SX07・08・09
図版 15　同　（15）　SX25、SE03・05
図版 16　同　（16）　SE06・07・16
図版 17　同　（17）　SE08・11・14
図版 18　同　（18）　SD14、SX16
図版 19　同　（19）　SK61、SE21・23
図版 20　同　（20）　SE24、SK83・101
図版 21　左京二条四坊七坪（1）　調査地全景
図版 22　同　（2）　SF05、SD01・02
図版 23　同　（3）　SB07・11・12
図版 24　同　（4）　SE22・23・24
図版 25　同　（5）　SX28
図版 26　左京三条六坊十二坪　発掘区全景
図版 27　左京四条七坊一坪　発掘区全景　SD01
図版 28　左京六条四坊十三坪　発掘区全景
図版 29　左京二条四坊十一坪（1）　中央発掘区全景
図版 30　左京二条四坊十一坪（2）　北・東発掘区全景
図版 31　同　（3）　SD49、SB08・16
図版 32　同　（4）　SX76、SE53・57
図版 33　同　（5）　SE57出土甲斐形坏
図版 34　左京八条二坊一坪　発掘区全景
図版 35　左京九条四坊二・七坪　発掘区全景
図版 36　右京三条三坊五坪　発掘区全景
図版 37　左京一条三坊十三・十四坪　発掘区全景
図版 38　左京三条二坊十六坪（1）　発掘区全景
図版 39　同　（2）　SD03・07、SB06
図版 40　同　（3）　SB06・09
図版 41　左京二条三坊三坪　発掘区全景
図版 42　左京五条一坊十五坪（1）　北発掘区全景
図版 43　同　（2）　SD01・02
図版 44　古市廃寺跡　（1）　発掘区全景
図版 45　同　（2）　SB01～09、SA10
図版 46　塔の宮廃寺跡　東・西発掘区全景
図版 47　史跡大安寺旧境内38次（1）南大門地区
図版 48　同　38次（2）南面回廊地区
図版 49　同　38次（3）西太房地区
図版 50　同　38次（4）南大門築地地区
図版 51　同　39・41次発掘区全景
図版 52　同　40次発掘区全景
図版 53　元興寺旧境内　18次発掘区全景
図版 54　同　19・20・22次発掘区全景
図版 55　同　21次発掘区全景
図版 56　同　23次発掘区全景
図版 57　西大寺旧境内4次、高円離宮発掘区全景

目　　次

I　平城京の調査

1.	平城京右京三条三坊一坪の調査	第169・173・182・184次調査	1
2.	平城京左京二条四坊七坪の調査	第174次調査	13
3.	平城京左京三条六坊十二坪の調査	第176次調査	20
4.	平城京左京四条七坊一坪の調査	第177次調査	22
5.	平城京左京六条四坊十三坪の調査	第179次調査	23
6.	平城京左京二条四坊十一坪の調査	第180次調査	24
7.	平城京左京八条二坊一坪の調査	第175次調査	41
8.	平城京左京九条四坊二・七坪の調査	第181次調査	42
9.	平城京右京三条三坊五坪の調査	第183次調査	44
10.	平城京左京一条三坊十三・十四坪の調査	第185次調査	45
11.	平城京左京三条二坊十六坪の調査	第187次調査	47
12.	平城京左京二条三坊三坪の調査	第189次調査	51
13.	平城京左京五条一坊十五坪の調査	第190次調査	52

II　寺院とその他の調査

1.	古市廃寺の調査	第1次調査	55
2.	塔ノ宮廃寺の調査	第1次調査	59
3.	史跡大安寺旧境内の調査	第38～41次調査	60
4.	元興寺旧境内の調査	第18～23次調査	67
5.	称徳陵兆域推定地（西大寺旧境内）の調査	第4次調査	75
6.	高円離宮推定地の調査		75
7.	その他の調査		76

付　論　1. 平城京右京三条三坊一坪から出土した古墳時代前期の土師器に残存する脂質について　81

2. 平城京左京二条四坊七坪SX28から出土した須恵器甕に残存する脂質について　86

帯広畜産大学　中野益男　他

例　　言

1. 本書は、平成元年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告を集録したものである。本年度実施した発掘調査は、調査地一覧に示した34件であるが、平城京東市跡推定地、第186次調査については、別に概要報告書を刊行する。また、平城京第178・188・191次調査については来年度に報告する。

2. 発掘調査は、下記の調査体制で実施した。

奈良市教育委員会文化課　　課長　舘野和己

埋蔵文化財調査センター　所長　大原和雄　主任　川崎尚彦

技術吏員　森下恵介、西崎卓哉

中井　公、篠原豊一、三好美穂

立石堅志、森下浩行、鐘方正樹

技術員　秋山成人、安井宣也

各調査の調査担当者は、調査一覧の示すとおりである。

3. 本書の執筆は、それぞれの調査担当者が分担して行ない、その文末に文責を明らかにした。また第173次・第174次調査の土器内の残存脂質分析については、帯広畜産大学、中野益男教授及び株式会社ズコーシャ総合科学研究所に依頼し、その成果を付論として掲載した。

4. 各調査地の調査次数は、平城京及び、各遺跡ごとに、奈良市教育委員会が行なった調査を通算したものである。平面図・土層図に付した座標値は、国土方眼第Ⅵ座標系によるものである。標高はすべて海抜高で示した。遺構及び遺物の分類記号は、奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』に準拠した。遺構番号は各調査ごとの仮番号である。

5. 発掘調査及び、本書の作成にあたっては、奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会など関係機関の指導、協力があった。記して感謝したい。

6. 発掘調査と出土遺物の整理には、下記の方々の御助力を得た。

相原嘉之、原田憲二郎、大西　誠、高橋浩樹、竹原茂幸、五井若葉、津川瑞穂、上原康子、本田奈都子、下岡珠美、河岸美幸、竹原伸仁、松山径子、芹川順子、玉林尚子、保坂香恵、福田明美、中島満寿江、角谷和美、岡本広義、牧　伸行、山村光子、三上牧子、鳥羽泰子、扇谷美鈴、村松京子、埜田伊公子、川北洋子、谷本光代、吉川直子、寺澤京子、杉本和繁、落葉芳宏、山前智敬、友永豊子、森　直子、持留みどり、武田泰子、岩崎しのぶ、出口直美、橋本祥子、藤沢拓也

7. 本書の編集は、篠原豊一と西崎卓哉が共同で行なった。

序

奈良市は、古代日本の都である平城京がおかれていたため、地中には数多くの文化財が眠っています。近年の発掘調査では、平城京跡の下層から旧石器時代の遺構が発見されるなど奈良時代以前の遺跡も数多くあることがわかってきました。まさに、奈良市民はこうした日本の歴史を知ることのできる貴重な埋蔵文化財の上で生活しているのです。このため市民の生活と地下の埋蔵文化財とは常に密接な関係にあります。近年、さかんに行なわれるようになった都市の再開発事業などによってこれらの文化財が破壊されようとする状況におかれています。こうした現状から埋蔵文化財を保存するためには、まず地中の文化財の有無を確認し、その意味する歴史事実を解明した上で、その保存、活用を図っていかなければなりません。そうすることにより奈良市の文化財を破壊から守り、その遺産を市の将来に役立てていくことが、現代の奈良に生活する人々に課せられた責務と考えます。

このため、奈良市では、この十年来、平城京跡の発掘調査を中心に、埋蔵文化財の保護・活用・啓蒙に努めてきました。その結果、古代から近世にかけての、多くの歴史資料を得ることができました。本報告は、その一部として平成元年度に実施した発掘調査で得られた成果をまとめたものです。これを後世への資料として、また、学術研究の資料として御活用していただければ幸いです。

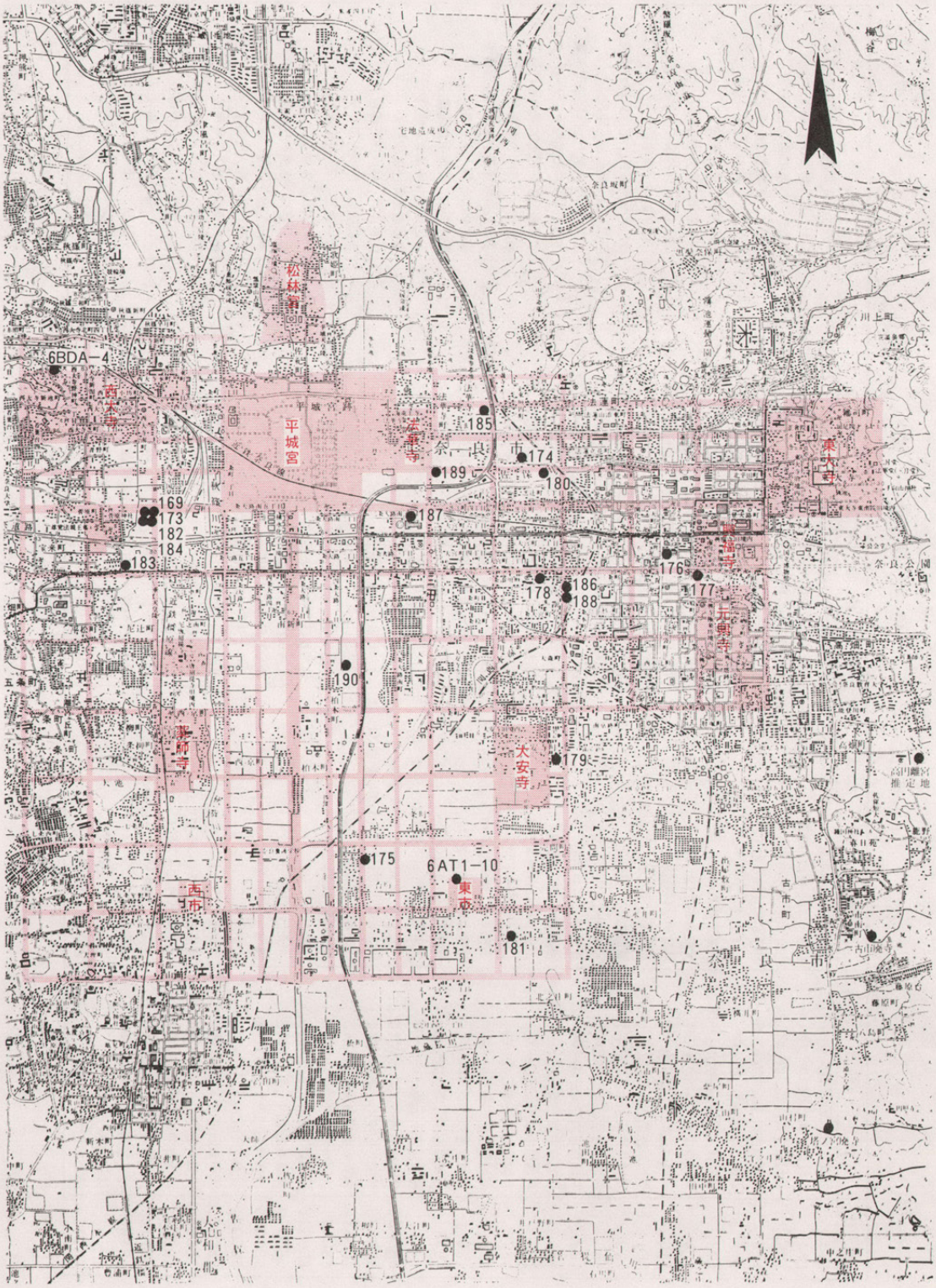
最後になりましたが、調査と本書の作成にあたっては、奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会をはじめとする関係諸機関の方々に御指導、御協力をいただき、また、調査に御尽力していただいた多くの市民の方々に厚く御礼申し上げます。

平成 2 年 3 月

奈良市教育委員会
教育長　久保田　正　一

平成元年度　発掘調査一覧

次数	遺跡名	調査地	調査期間	発掘面積	調査担当者	備考
173	平城京右京三条三坊一坪	菅原町114番地他	4月2日～8月19日	3350㎡	篠原豊一、立石堅志	近鉄西大寺駅南土地区画整理事業
174	平城京左京二条四坊七坪	法蓮町369番地の1他	4月10日～6月29日	1650㎡	中井　公、鐘方正樹	萬国企業　集合住宅建設
175	平城京左京八条二坊一坪	杏町386番地の1	4月12日～4月21日	70㎡	西崎卓哉	奈良市　杏中共同浴場建設
176	平城京左京三条六坊十二坪	林小路町1－6他	5月15日～6月12日	280㎡	森下恵介	ニチイ　商業ビル建設
177	平城京左京四条七坊一坪	橋本町3－1他	6月29日～7月17日	32.3㎡	森下恵介	奈良市　商工センター建設
178	平成京左京四条四坊九・十坪	三条宮前町43－3	7月4日～7月5日	100㎡	森下浩行	吉岡秀吉　住宅建設
179	平城京左京六条四坊十三坪	大安寺町1121番地	7月15日～8月1日	252㎡	森下恵介	今西幸栄　集合住宅建設
180	平城京左京二条四坊十一坪	法蓮町212番地の1	7月24日～11月14日	2500㎡	西崎卓哉、森下浩行	奈良市　仮称第42小学校建設
181	平城京左京九条四坊二・七坪	東九条町字大永井331番地の1他	8月11日～8月25日	300㎡	三好美穂	三津不動産　寮建設
182	平城京右京三条三坊一坪	菅原町114番地他	8月21日～10月17日	1650㎡	篠原豊一、立石堅志	近鉄西大寺駅南土地区画整理事業
183	平城京右京三条三坊五坪	宝来町93番地の1他	9月22日～10月4日	160㎡	森下恵介	阪口　宏　集合住宅建設
184	平城京右京三条三坊一坪	菅原町114番地他	10月18日～1月28日	1900㎡	篠原豊一、立石堅志	近鉄西大寺駅南土地区画整理事業
185	平城京左京一条三坊十三・十四坪	法華寺町1351番地	10月17日～11月14日	250㎡	立石堅志	奈良市　一条高校セミナーハウス
186	平城京左京四条五坊一坪	三条本町13番地の1他	10月18日～11月24日	370㎡	三好美穂	ＪＲ奈良駅周辺土地区画整理事業
187	平城京左京三条二坊十六坪	二条大路南一丁目1－1	10月25日～2月9日	1020㎡	森下浩行	奈良市　市庁舎増築
188	平城京左京四条五坊一坪	三条本町13番地の1他	12月1日～3月19日	1500㎡	三好美穂、森下恵介、秋山成人	ＪＲ奈良駅周辺土地区画整理事業
189	平城京左京二条三坊三坪	法華寺町208番地の2	2月5日～2月9日	20㎡	篠原豊一、立石堅志	福井新次　個人住宅建設
190	平城京左京五条一坊十五坪	柏木町545番地の1他	2月21日～3月8日	170㎡	篠原豊一	岡本圭市　農業用倉庫建設
191	平城京左京三条三坊十一坪	大宮町4丁目295番地の1・6	2月22日～3月15日	200㎡	森下浩行	安田生命　商業ビル建設
6BDA38	大安寺旧境内　第38次調査	大安寺町1299番地1297番地の1・2他	7月17日～10月4日	270㎡	中井　公	重要遺跡範囲確認調査
6BDA39	大安寺旧境内　第39次調査	大安寺町1003番地・1004番地の1	9月6日～9月8日	4.5㎡	森下恵介	佐野良行　個人住宅建設
6BDA40	大安寺旧境内　第40次調査	大安寺町988番地の5	12月5日～12月7日	10.5㎡	三好美穂	服部蔵典　店舗付事務所
6BDA41	大安寺旧境内　第41次調査	東九条町1373番地の5	1月9日～1月12日	7㎡	森下恵介、秋山成人	大　敬三　個人住宅建設
6BGG18	元興寺旧境内　第18次調査	中新屋町27－1	5月8日～5月19日	21㎡	西崎卓哉	野崎太三　倉庫建設
6BGG19	元興寺旧境内　第19次調査	中新屋町17－1・2	8月10日～8月16日	28㎡	森下恵介	五野春枝　店舗付住宅建設
6BGG20	元興寺旧境内　第20次調査	鵲町6－11	8月21日～8月29日	14.4㎡	森下恵介	本庄　稔　店舗付住宅建設
6BGG21	元興寺旧境内　第21次調査	西新屋町15・16番地	9月7日～10月13日	37㎡	三好美穂	加藤立久　個人住宅建設
6BGG22	元興寺旧境内　第22次調査	薬師堂町29－1	9月13日～9月18日	7.5㎡	森下恵介	細川章次　個人住宅建設
6BGG23	元興寺旧境内　第23次調査	勝南院町25番地の2他	12月12日～12月25日	35㎡	森下恵介	奈良市　都計道路建設
6BSD4	西大寺旧境内　第4次調査	西大寺野神町一丁目6－1	5月22日～5月29日	30㎡	西崎卓哉	奈良市　伏見中学校増築
6BFI01	古市廃寺　第1次調査	古市町字高井戸2269番地の1・3	10月17日～12月22日	465㎡	中井　公	上田　清　個人住宅建設
6BTH01	塔ノ宮廃寺　第1次調査	山町	12月20日～12月22日	43㎡	鐘方正樹	奈良市　市道改良工事
	高円離宮推定地	白毫寺町500番地の3	9月4日	13㎡	鐘方正樹	川口シズエ　個人住宅建設
6AII10	東市推定地	杏町580番地の1	1月16日～3月20日	410㎡	中井　公、安井宣也	重要遺跡範囲確認調査



平成元年度　発掘調査位置図

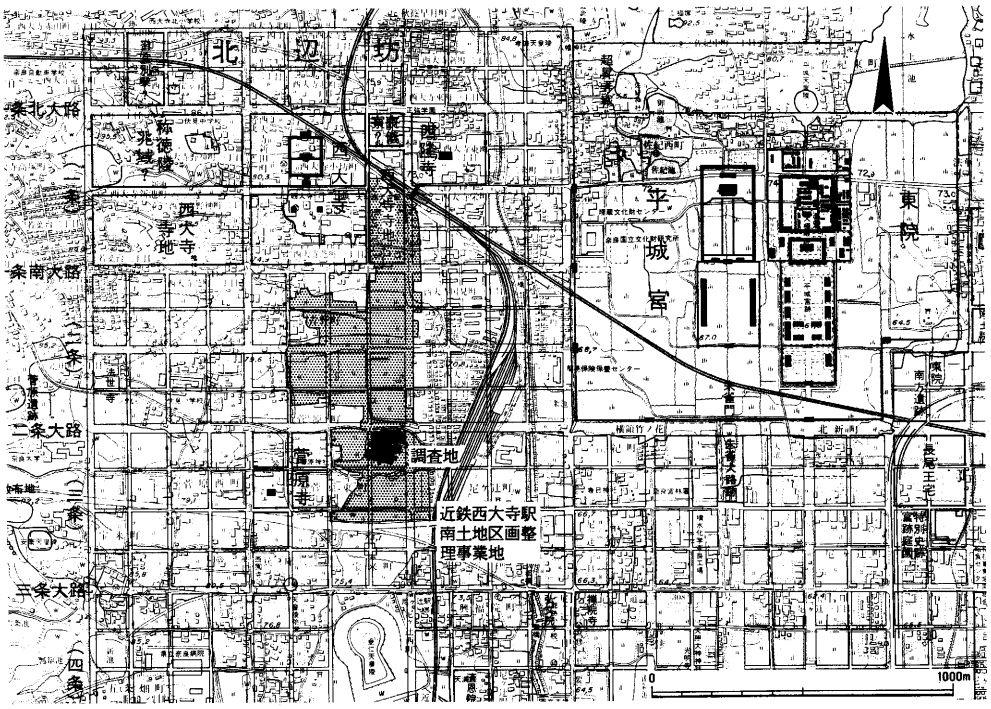
Ⅰ. 平 城 京 の 調 査

1. 平城京右京三条三坊一坪の調査　第169. 173. 182. 184 次調査

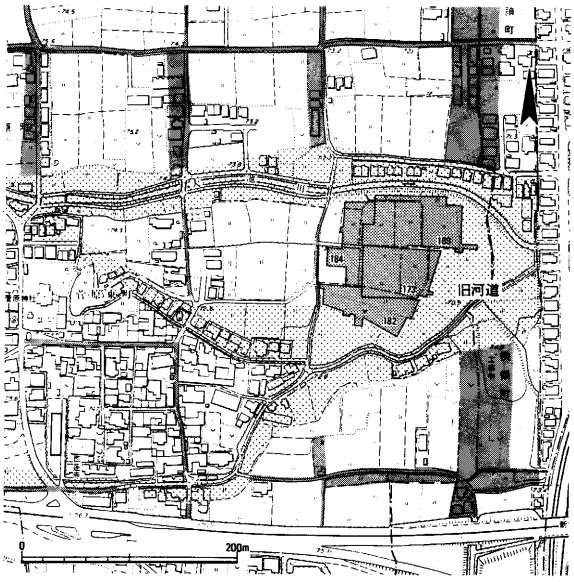
I　はじめに

奈良市は近鉄西大寺駅周辺で都市再開発事業を行うため、近鉄西大寺駅北都市再開発事業と近鉄西大寺駅南土地区画整理事業を計画した。本調査はこのうちの近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に伴う事前の発掘調査である。この区画事業は阪奈道路と近鉄西大寺駅の間にある水田と宅地を区画整理し、阪奈道路から駅に南北へ延びる都市計画道路をつくり、駅前広場を整備し、事業地を宅地・商業地化するものである。この事業は平城京条坊復元による右京一条三坊から三条三坊にかけての総面積32万㎡に及ぶ広大な再開発事業である。この事業は阪奈道路沿いの南側から工事が計画されている。昭和63年度事業計画の都市計

調査次数	調査期間	調査面積
第 169 次調査	昭和63年12月10日～平成元年３月31日	3,490㎡
第 173 次調査	平成元年４月２日～平成元年８月21日	3,230㎡
第 182 次調査	平成元年８月22日～平成元年10月17日	1,900㎡
第 184 次調査	平成元年10月18日～平成２年１月30日	2,030㎡



発掘調査位置図



調査次数と復元地割　1/7000

画道路予定地に第169・173次調査区を設定し調査を開始した。調査を進めて行くと173次調査の道路予定地で大規模な建物跡が検出された。

この建物を中心とした一坪内の様相を知る必要があったため、南辺に182次調査区を、西辺に184次調査区を設定した。約一年間の調査でほぼ一坪の全域にあたる約10,650㎡を発掘した。

地　形　調査地は奈良盆地の北西にある西の京丘陵が東にのびる尾根地形の先端部にある。標高は調査地の北西隅が最も高く、東・南に向かって緩やかに低くなる。調査地の北辺には大池川が東西に流れ、東で秋篠川と合流する。また、調査地の東辺と西辺には、北東方向に斜行する形で水田畔の乱れがあり、耕作面が一段低くなっていることからこの部分に旧河道が流れていたことがうかがえる。発掘調査したところ河道の堆積を確認した。埋土から17世紀以降の土器が出土した。発掘区の北辺は大池川、東・南辺はこの河道の削平をうけたためか遺構は検出されなかった。

Ⅱ　検出遺構

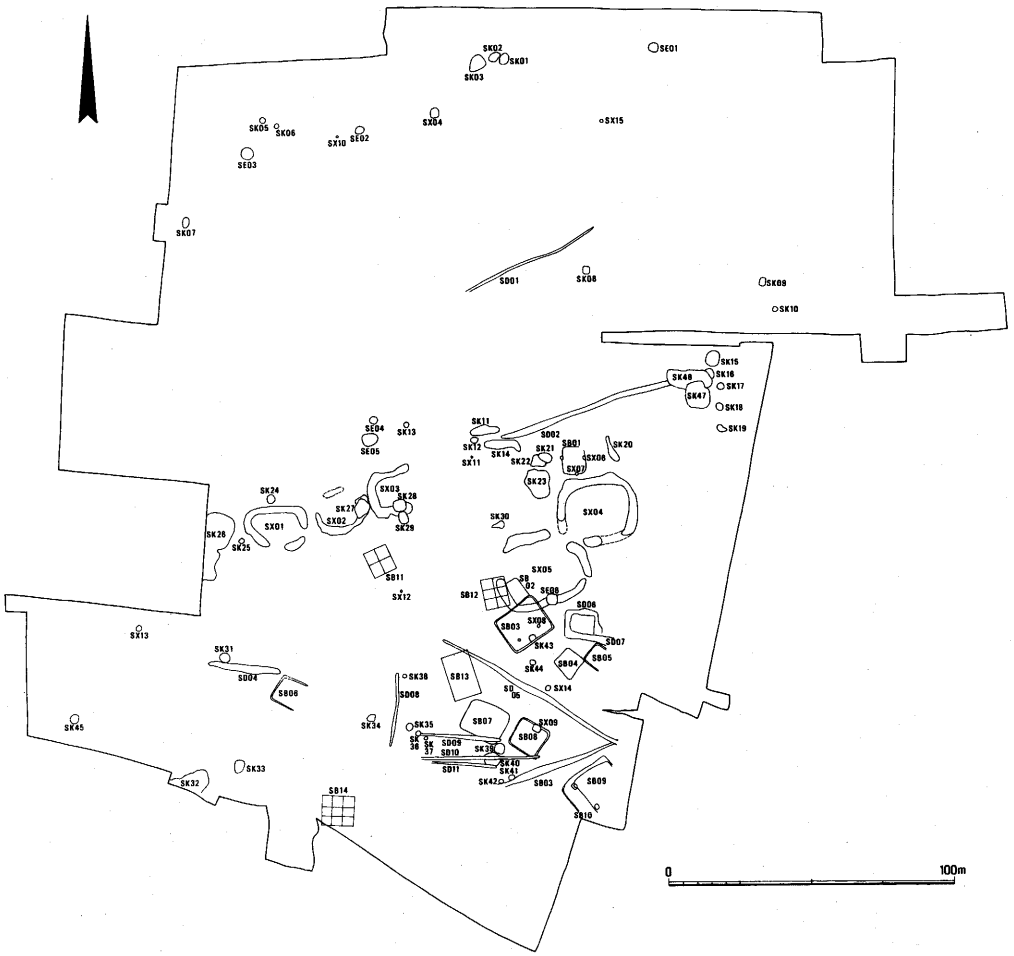
検出した遺構には、弥生時代から室町時代にかけての土坑、溝、竪穴住居、掘立柱建物、塀、井戸、堀、道路、土器埋納遺構（胞衣壷）などがある。現在、遺物整理途中であるため、これまでに知り得た資料をもとに遺構の概略を説明する。

土　層　調査地の基本土層は、上層から水田の耕作土（黒灰色土、灰色砂質土）、床土（赤褐色粘土）で、その下層が黄褐色粘土か灰色砂の地山となる。調査地の水田は丘陵上に造られているため、各水田の東、南の一部に中近世の客土（黄灰色砂質土、茶灰色砂質土）がある。奈良時代までの遺構は地山上面、中世の遺構は地山上面と茶灰色砂質土上面で検出した。検出した遺構面の標高は71.1～72.8ｍである。

弥生・古墳時代の遺構は発掘区のほぼ全域に分布するが、特に発掘区の南半部分に密集している。この時期の遺構は丘陵の裾部分ほど残りがよく、頂部付近は平城京造営の際に削平をうけたためか残りはよくない。奈良時代の遺構は発掘区の全域に良く遺存していた。鎌倉・室町時代の遺構は、発掘区の北半と西辺で検出した。発掘区の西辺には鎌倉時代の遺構が、北半には室町時代の遺構が密集していた。以下、遺構の概略を時期別に記する。

弥生時代の遺構　発掘区中央に、不整形な方形に溝が断続的にめぐる方形周溝遺構ＳＸ01～05がある。溝は幅1.2ｍ前後、深さ0.1～0.7ｍあり、方形周溝墓の周溝と考えられる。主体部は完全に削平されている。溝の底から、畿内第三様式の弥生土器が少量出土した。大きさにより2群に分けられる。ＳＸ01～03は一辺が5～6ｍあるもので、溝の辺を接しながら3基東西に並ぶ。ＳＸ04・05は一辺が9～12ｍあるもので、溝の隅を接しながら2基に並ぶ。このほかＳＫ31の周辺からも弥生土器片が出土した。

古墳時代前期の遺構　土坑44基、竪穴住居10棟、溝6条を検出した。土坑ＳＫ01～44はいずれも掘形が不整形な円形で、深さは0.3～0.5ｍと浅いものである。井戸ＳＥ01～05は井戸枠を持たない円形の素掘り井戸で、径1.2～1.8ｍ、深さ1.0～1.5ｍある。竪穴住居ＳＢ01～10は平面が方形の住居址で、いずれも周壁溝をもつが、柱痕跡はない。一辺が3ｍ前後と6ｍ前後の住居址があり、共に深さは0.15ｍ前後と浅い。ＳＢ04と09の床面に



奈良時代以前の遺構

は焼土の痕跡が残る。ＳＸ06～14は土器埋納遺構である。いずれも円形もしくは方形の小土坑の中に土師器を埋納したものである。ＳＸ06・07はＳＢ01の東・南壁際中央で検出した。いずれも小土坑の中に、ＳＸ06には器台、ＳＸ07には小型丸底壷と壷が据えられていた。ＳＸ08はＳＢ03内で検出した。小土坑の中に土師器小型丸底壷・甕が埋められていた。ＳＸ09はＳＢ08の北壁中央で検出した方形の土坑の中に、朱塗りの土師器高杯・鉢・台付小型丸底壷が埋められていた。ＳＸ10～13は径0.3ｍの小土坑の中に小型丸底壷を、ＳＸ14は方形の土坑の中に甕を埋置していた。これらの土器埋納遺構の内、竪穴住居に伴うＳＸ07・08の土師器について、器内底の土壌を脂質分析した。分析の結果、平城京出土胞衣壷の分析結果[1)]とよく似た資料を得た。その結果は本編の付論に掲載した。溝ＳＤ01～04は丘陵斜面にそって西から東へ斜行するものである。ＳＤ01～03の３条は、ほぼ並行することから同時期の溝と考えられよう。これらの井戸、土坑、住居址から古墳時代前期（４世紀）の土師器が多量に出土した。

古墳時代後期の遺構　溝ＳＤ05、掘立柱建物ＳＢ14、土坑ＳＫ45～47がある。建物ＳＢ14は３間×３間の総柱建物である。溝ＳＤ05は東南方向に斜行する東西溝で幅0.6ｍ、深さ0.4ｍある。埋土から須恵器杯身・𤭯、土師器甕、円筒埴輪片などが６世紀中頃の遺物が出土した。包含層からはこの時期の円筒埴輪片や形象埴輪片が多く出土しており、これらの遺構との関連が注目される。

この他に、古墳時代の遺構に含まれるが、時期の不明な掘立柱建物ＳＢ11～13と溝ＳＤ06～11がある。ＳＤ06は幅0.8ｍ、深さ0.1ｍの浅い溝で、一辺３ｍの方形に巡る。その南辺は東西溝のＳＤ07がある。ＳＤ06は古墳の周濠かとも考えられるが遺物が少なく不明である。いずれの遺構も出土遺物が少なくその時期を決定できない。

飛鳥時代の遺構　井戸１基を確認したのみで、建物等はわからない。井戸は一辺1.2ｍ、深さ1.0ｍの掘形の中に、横板組隅柱横桟どめの井戸枠がある。７世紀後半頃の土器が少量出土した。

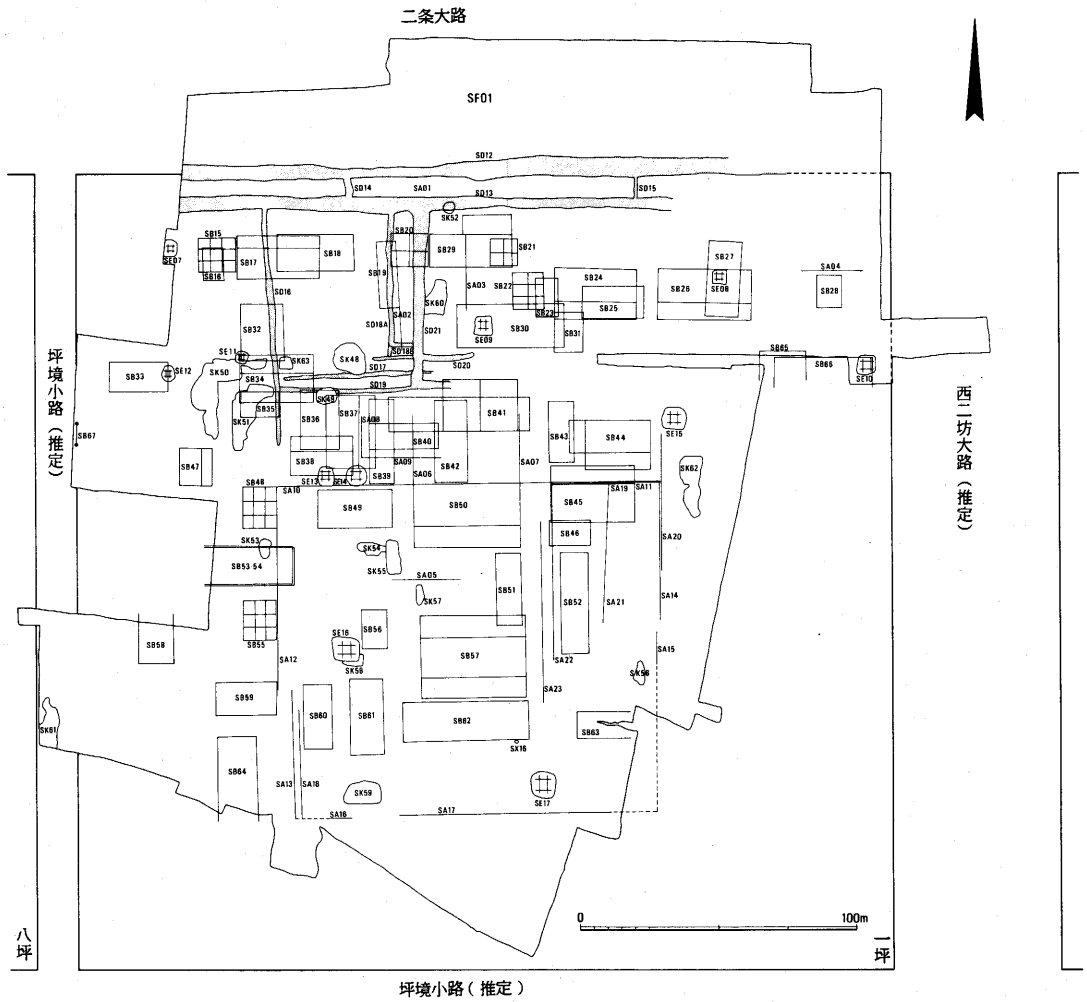
奈良時代の遺構　二条大路、二条大路南側溝、築地、築地雨落溝、掘立柱建物56棟、掘立柱塀22条、溝９条、井戸９基、土坑15基、土器埋納遺構（胞衣壷）などがある。今回の調査で、右京三条三坊一坪のほぼ全容が明らかとなった。

条坊関係遺構　調査区の北辺で並行する二条の東西溝ＳＤ12・13を検出した。北溝ＳＤ12が二条大路南側溝、その北側が二条大路路面ＳＦ01と考えられる。両溝間は約３ｍ幅の空間地となっており、この部分に築地ＳＡ01が想定できる。溝ＳＤ13は幅４ｍ前後、深さ0.3ｍの溝状遺構内にある、築地の西辺に沿う幅1.5～2.0ｍ、深さ0.1ｍの溝である。一坪内の南北排水溝がＳＤ13に取付くことから、この溝が雨落溝と考えられる。溝状遺構は築地に沿ってあることから、築地を造る際の土取り坑で、そのためにできた溝の一部を雨

落溝として利用したと考えられよう。築地の２か所には暗渠と考えられる溝ＳＤ14・15がある。発掘区東辺には西二坊大路が推定されるが、近世の河道によって削平されている。発掘区西辺には、一・八坪坪境小路が推定されるが、今回の調査では検出されなかった。

位　　置	X	Y	備　　考
ＳＤ12（東端心）	－146,046.22	－19,681.32	二条大路南側溝
（西端心）	－146,046.00	－19,767.44	
ＳＡ01（東端心）	－146,048.06	－19,695.72	築地
（西端心）	－146,048.22	－19,767.64	
ＳＤ13（東端心）	－146,050.82	－19,699.00	雨落溝
（西端心）	－146,050.58	－19,676.58	

条坊計測表



奈良時代の遺構

坪内の遺構は、遺構の重複関係から大きく４期に区分できる。

Ａ　期　この時期には、建物10棟、井戸３基、溝２条、塀１条がある。坪内の南北中央に塀ＳＡ05があり、宅地を大きく南北に二分割して利用する。一坪の北半と南半の中央にやや大きめの東西棟建物ＳＢ30・62があり、その周辺に井戸、東西棟建物、総柱建物を配している。北半には宅地内排水路ＳＤ16・17あり雨落溝ＳＤ13に流れる。

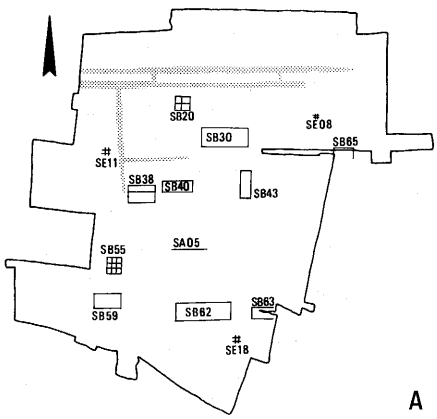
Ｂ　期　一坪のほぼ中央に大規模な東西棟建物ＳＢ50・57があり、その周囲を掘立柱塀で囲む時期である。建物ＳＢ50・57が一坪の東西中央に位置することから、一坪全域を宅地として利用していたと考えられる。塀で囲まれた区画と建物配置により、さらにＢ－１、Ｂ－２期に分けられる。

Ｂ－１期　この時期の遺構には、建物15棟、井戸３基、溝１条、塀11条、門がある。この時期から一坪全体を計画的に利用するようになる。坪の東西中心軸上に２棟の大規模な東西棟建物ＳＢ50・57がある。ＳＢ50は５間×３間の南庇付東西棟建物、ＳＢ57は５間×４間の南北庇付東西棟建物である。ＳＢ50が坪内のほぼ中央に位置する。坪内で最も大きい建物ＳＢ57を中心として、東西55ｍ、南北48ｍの地域を掘立柱塀ＳＡ11～17が巡る。北塀はＳＢ50の北側柱列に取付く。東・西・南塀には出入口か開口部がある。この塀で囲まれた部分を主殿地域と呼ぶ。ＳＢ50・57と東塀の間には目隠し塀ＳＡ22がある。主殿地域の北西隅には総柱建物ＳＢ48がある。坪の北半には総柱建物ＳＢ15、東西棟建物ＳＢ18・29・24・26、南北棟建物ＳＢ28、井戸ＳＥ09がほぼ東西一列に並ぶ。この区画と主殿地域との間には細長い北庇付東西棟建物ＳＢ41がある。この建物には東から２間ごとに間仕切りがある。遺構の配置から、坪の北半は家政関係の施設として利用されたと考えられる。このＢ期は、坪内が南北に大きく使い分けられていたことがわかる。

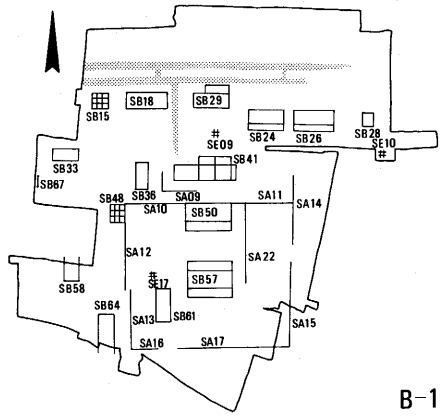
Ｂ－２期　この時期の遺構には、建物14棟、井戸４基、溝２条、塀10条、門がある。Ｂ－１期の遺構配置をほぼ踏襲するものの、坪内の北西部分が大きく改修される。北半は中央に南北塀ＳＡ03がつくられ、東西に分割利用される。北半にあった家政施設が北東へ移る。北東には井戸ＳＥ09、総柱建物ＳＤ21、建物ＳＢ24・26・28が、北西には東西棟建物ＳＢ17・34が２棟南北に並ぶ。主殿地域は塀の一部が改修され、北塀ＳＡ10がなくなり、その場所にＳＢ50と身舎北側柱筋を合せる形で東西棟建物ＳＢ49がつくられる。東塀とＳＢ57の間には、目隠し塀ＳＡ23と南北棟建物ＳＢ52がある。

Ｃ　期　この時期の遺構には、建物10棟、井戸２基、溝２条、塀１条、門がある。坪内全体が大きく変容する時期である。主殿地域を囲む塀がなくなり、主殿地域の中心建物はＳＢ57だけになる。宅地内に中規模の建物が散在する。南北棟建物が多くなり、北半の東西区画塀はなくなり、家政施設も規模が小さくなる。

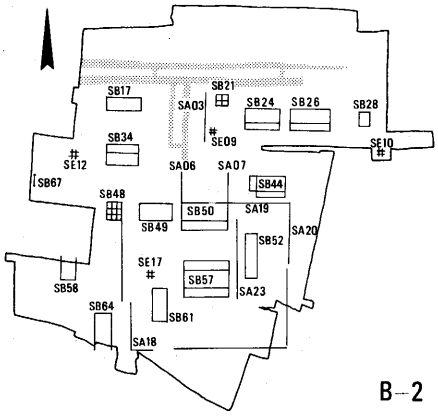
Ｄ　期　この時期の遺構には、建物12棟、井戸３基、塀２条がある。宅地内の建物配置



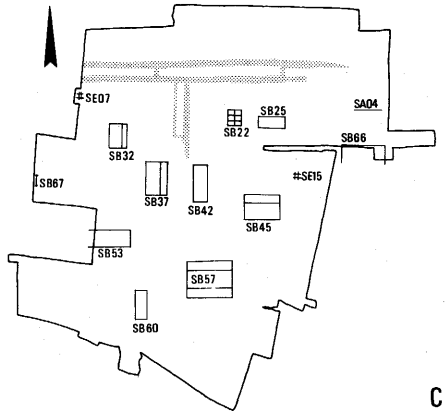
A



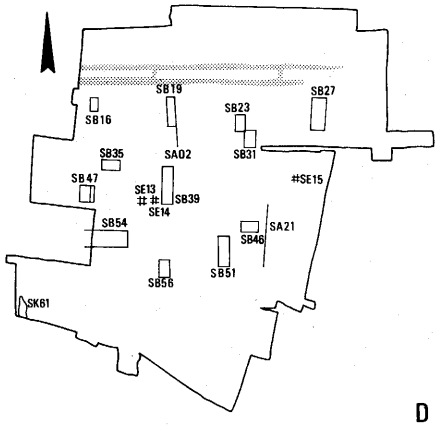
B-1



B-2



C



D

0 100m

遺構変遷図

建　物

遺構番号	規模（柱間　柱間寸法）			時期
SB15	総柱建物	3×3	東西6尺南北5.5尺	B－1
SB16	南北棟	2×2	桁行5尺梁間6.5尺3.5尺	D
SB17	東西棟	5×2	桁行8尺梁間7尺	B－2
SB18	東西棟	6×2	桁行7尺梁間9尺	B－1
SB19	南北棟	5×2	桁行6.5尺梁間5尺	D
SB20	総柱建物	2×2	東西9尺南北8尺	A
SB21	総柱建物	2×2	東西6.5尺南北7尺	B－2
SB22	総柱建物	3×2	桁行6尺梁間7尺	C
SB23	南北棟	3×2	桁行6尺梁間6尺	D
SB24	東西棟(南庇)	5×2(5×3)	桁行8尺梁間8尺庇8尺	B-1·2
SB25	東西棟	4×2	桁行7尺梁間8尺	C
SB26	東西棟(南庇)	5×2(5×3)	桁行9尺梁間8尺庇8尺	B-1·2
SB27	南北棟	4×2	桁行9尺梁間8尺	D
SB28	南北棟	3×2	桁行5尺梁間6尺	B-1·2
SB29	東西棟(北庇)	5×2(5×3)	桁行8尺梁間8尺庇9.5尺	B－1
SB30	東西棟	5×2	桁行10尺（中央11尺）梁間10尺	A
SB31	南北棟	3×2	桁行7尺梁間6.5尺	D
SB32	南北棟(東庇)	4×2(4×3)	桁行7尺梁間7尺庇8尺	C
SB33	東西棟	4×2	桁行7尺梁間7尺	B－1
SB34	東西棟(北庇)	5×2(5×3)	桁行7尺梁間7尺庇9尺	B－2
SB35	東西棟	3×2	桁行7尺梁間5.5尺	D
SB36	南北棟	4×2	桁行7.5尺梁間9尺	B－1
SB37	南北棟(東庇)	4×2(4×3)	桁行9尺梁間8尺	C
SB38	東西棟(北庇)	5×2(5×3)	桁行6尺梁間6尺庇7尺	A
SB39	南北棟	6×2	桁行7尺梁間6尺	D
SB40	東北棟	5×2	桁行7尺梁間6尺	A
SB41	東西棟(北庇)	7×2(8×3)	桁行9尺梁間9尺庇9尺	B－1
SB42	南北棟	5×2	桁行8尺梁間8尺	C
SB43	南北棟	5×2	桁行6尺梁間6尺	A
SB44	東西棟(南·西庇)	4×2(5×3)	桁行8尺梁間8尺南庇8尺西庇7尺	B－2
SB45	東西棟(北庇)	5×2(5×3)	桁行8尺梁間8尺庇8尺	C
SB46	東西棟	3×2	桁行6尺梁間6尺	D
SB47	南北棟	3×2	桁行6尺梁間6尺	D
SB48	総柱建物	3×3	東西7尺南北5尺	B-1·2
SB49	東西棟	5×2	桁行7尺梁間9尺	B－2
SB50	東西棟(南庇)	5×2(5×3)	桁行10尺（中央12尺）梁間10尺庇10尺	B-1·2
SB51	南北棟	4×2	桁行8.5尺梁間6尺	D
SB52	南北棟	6×2	桁行8尺梁間7尺	B－2
SB53	東西棟	5以上×2	桁行8尺梁間9尺	C
SB54	東西棟	4以上×2	桁行9尺梁間9尺	D
SB55	総柱建物	3×3	東西5尺南北6尺	A
SB56	南北棟	2×2	桁行6尺梁間6尺	D
SB57	東西棟(北·南庇)	5×2(5×4)	桁行10尺梁間10尺庇10尺	B・C
SB58	南北棟	2以上×2	桁行8尺梁間8尺	B-1·2
SB59	東西棟	5×2	桁行6尺梁間8尺	A
SB60	南北棟	4×2	桁行7尺梁間7尺	C
SB61	南北棟	4×2	桁行9尺梁間8尺	B-1·2
SB62	東西棟	6×2	桁行10尺梁間9尺	A
SB63	東西棟	3以上×2	桁行6尺梁間6尺	A
SB64	南北棟	5?×2?	桁行7尺梁間7尺？	B-1·2
SB65	南北棟	?×2	梁間10尺	A
SB66	東西棟	6×?	桁行8尺	C
SB67	門	一間	10尺	B・C

塀

遺構番号	規模（柱間　柱間寸法）			時期
SA01	北面築地	幅3m×76m以上		A～D
SA02	南北塀	3間	柱間7尺	D
SA03	南北塀	7間	柱間6・7・8尺	B－2
SA04	東西塀	5間以上	柱間6・7尺	C
SA05	東西塀	4間	柱間8尺	A
SA06	南北塀	5間	柱間6尺・7尺	B－2
SA07	南北塀	5間	柱間6尺・7尺・8尺	B－2
SA08	南北塀	3間	柱間5尺・8尺	B－1
SA09	東西塀	5間	柱間7尺・8尺	B－1
SA10	東西塀	9間	柱間7尺・8尺	B－1
SA11	東西塀	10間	柱間7尺	B－1
SA12	南北塀	10間	柱間7尺・8尺	B-1·2
SA13	南北塀	6間以上	柱間8尺・10尺	B－1
SA14	南北塀	9間	柱間7尺	B－1
SA15	南北塀	2間以上	柱間8尺	B－1
SA16	東西塀	2間以上	柱間6尺	B-1·2
SA17	東西塀	13間以上	柱間8尺	B-1·2
SA18	東西塀	6間以上	柱間7尺・8尺	B－2
SA19	東西塀	8間	柱間7尺・8尺	B－2
SA20	南北塀	9間	柱間6尺・7尺	B－2
SA21	南北塀	9間	柱間7尺・9尺	D
SA22	南北塀	11間	柱間6尺・7尺	B－1
SA23	南北塀	11間	柱間7尺・8尺	B－2

奈良時代建物・塀の規模と時期

に計画性なくなり、坪内の建物が小規模となる。出土遺物から一坪内の遺構は9世紀前半には廃絶されたと考えらる。

井　戸　奈良時代の井戸9基を検出した。井戸ＳＥ08・09・11～15・18は既に井戸枠が抜取られ、その痕跡と掘形が残る。ＳＥ07・10・17は平面方形の掘形の中央に横板組隅柱横桟どめの井戸枠が残る。ＳＥ10からは平城宮土器Ⅲ、ＳＥ17からは平城宮土器Ⅲ・Ⅳ、ＳＥ07からは平城宮土器Ⅳ・Ⅴが出土した。ＳＥ14の抜取り痕跡からは平城宮土器Ⅵが出土した。これ以外の井戸は出土遺物が少なく時期を決定する資料に乏しい。

土器埋納遺構　建物ＳＢ62の南西隅でＳＸ16を検出した。一辺が40㎝、深さ12㎝の方形小土坑の中に須恵器杯Ｂが蓋をした状態で据え置れていた。蓋は割れ杯内に落ち込んでいたがほぼ原形をとどめていた。杯の底から銅銭が5枚出土した。杯内の土壌については残存脂質分析をおこなっていないが、これまでに平城京内で検出されたこのような土器埋納遺構[2]は出産に伴う胎盤を納めた胞衣壷と考えられている。

中世の遺構　平城京以後の遺構として、12世紀後半から15世紀後半にかけての掘立柱建物、井戸、溝、土坑などを検出した。発掘区西辺では、12世紀後半から13世紀後半の鎌倉時代の遺構を、北半では、14・15世紀の室町時代の遺構を検出した。中世の建物時期については、建物の周囲にある土坑、溝、井戸の時期によって求めた。

鎌倉時代の遺構　井戸ＳＥ18～20、掘立柱建物ＳＢ69～74、土坑ＳＫ64～75、溝ＳＤ22～28、河道ＳＤ28がある。鎌倉時代の遺構は発掘区西辺にある。建物ＳＢ72は南西隅で検出した建物で、建物の西・北辺には溝ＳＤ23～25が巡る。宅地内排水路であろう。建物ＳＢ68～71は西辺の中央で検出した。2時期の重複がある。建物ＳＢ73・74は北西隅で検出した。共に東西棟建物で、建物の主軸の方向が揃うため、同時期の建物と考えられる。この2棟と井戸ＳＥ20が組み合う。井戸ＳＥ18・20は素掘りの井戸である。井戸からは12世紀末から13世紀前半にかけての土器が出土した。河道ＳＤ28は発掘区東辺で検出した旧河道である。埋土から12世紀末の土器が出土した。この時期には発掘区の東端が、河川による浸蝕をうけていたことがわかる。

室町時代の遺構　井戸ＳＥ20～25、掘立柱建物ＳＢ75～86、柵ＳＡ24・25、土坑76～109、溝ＳＤ29～34、堀ＳＤ35～37がある。遺構の配置によって東西に大きく分れる。西半には建物ＳＢ75～79、井戸ＳＥ21・22がある。この一群の建物の主軸は共に北で西に振れる。振れが同方向であることから同時期の建物と考えられる。井戸ＳＥ21は掘形が円形で、縦板組横桟どめの井戸枠をもつ。枠内から14世紀後半の土器が出土した。井戸ＳＥ22は素掘りの円形井戸で14世紀前半の土器が出土した。東半には建物ＳＢ80～86、井戸ＳＥ23～25がある。建物の振れは西半の建物に比べて小さく不揃いで、それぞれ2・3時期の重複がある。井戸ＳＥ23は円形の掘形の中に2段の井戸枠をもつ。下段は曲物二段積み、上段は遺

存状態が悪く不明である。井戸ＳＥ24・25は重複する井戸である。ＳＥ24の井戸枠はなく、円形の掘形が残る。ＳＥ25は掘形が円形で、木組の井戸枠が残るが、枠上半が崩壊しているため完掘できなかった。ＳＥ23～25の埋土から15世紀後半の土器が出土した。建物の周辺で多くの溝・土坑を検出した。溝は宅地内の排水、土坑は塵芥処理に使用されたと考えられる。土坑ＳＫ88・90からは多量の土師器皿が出土した。土坑ＳＫ101の埋土から15世紀前半の土器とともに能面が出土した。室町時代の遺構を囲む形で、東堀ＳＤ35、南堀ＳＤ36・37がある。東堀の北端は近世の河道によって削平される。堀の堆積からみて流水の痕跡はなく、堀底からの出土遺物もほとんどないことから堀の長期間使用は考えがたい。また、南堀ＳＤ37は西へ延びず途切れるため、南堀は未完成の可能性もある。埋土から15世紀後半の土器が出土した。堀を周囲に巡らせた居館の存在が考えられるが、その時期の建物等は検出されなかった。

鎌倉・室町時代の遺構

Ⅲ　出土遺物

出土遺物には弥生時代から近世に及ぶものがみられる。現在、遺物整理中のためその概略を簡単に述べる。

弥生時代の遺物　弥生土器、石器がある。方形周溝遺構ＳＸ01・02・05の溝底から畿内第三様式の弥生土器が少量出土した。ＳＸ05の周溝からは櫛がき直線文のある長頸壷と壷が、ＳＸ02の周溝からは長頸壷が出土した。また、包含層からサヌカイト製の石器、剥片、石核が出土した。石器には石鏃、削器などがある。

古墳時代前期の遺物　土師器、碧玉製管玉などがある。土師器は竪穴住居、土坑、井戸から古墳時代前期（４世紀）の甕、壷、高杯、器台などが多く出土した。壷には大型の二重口縁壷や小型丸底壷などが多く含まれている。また、ＳＫ32、ＳＢ09と包含層から碧玉製管玉が出土した。包含層出土の管玉はほぼ完形の大形品で、径0.5～0.6㎝、長さ6.3㎝、孔径0.3㎝ある。他の管玉は径0.3㎝、孔径0.1㎝の小型もので、破片のため長さは不明である。

古墳時代後期の遺物　土師器、須恵器、埴輪があるが、土器の出土量は少ない。ＳＤ07の溝から須恵器杯・蓋、土師器甕、円筒埴輪など６世紀中頃の遺物が出土した。発掘区南半の包含層からは、多くの埴輪片が出土した。埴輪には円筒埴輪片と形象埴輪片がある。形象埴輪には、人物の顔、動物の脚がある。

奈良時代の遺物　軒瓦、平瓦、丸瓦、土師器、須恵器、硯、土馬、銅銭、鉄製品、石製品、胞衣壷などがある。いずれも出土量は少ない。また、木簡、墨書土器等の文字資料もほとんどなく、墨書土器１点だけである。瓦類、土器、銅銭について簡単に述べる。

瓦　類　瓦類は発掘区北半のＳＤ12・13・19・21の周辺から少量出土した。瓦類の内、軒瓦について記す。軒瓦には軒丸瓦17点、軒平瓦13点、鬼瓦１点がある。軒丸瓦には平城宮6225－不明、6225－新、6275－Ａ、6011－新、6282－Ａ、6291－Ａ、6134－Ａ、6318－Ａ、6313－不明などがある。軒平瓦には平城宮6641－不明、6711－Ａａ、6711－Ｂ、6691－Ａ、6721－Ａ、6791－Ａ、6719－Ａ、6727－Ａ、6719－新、6727－Ａ、新型式がある。鬼瓦は外区珠文帯が残る小片である。

土器・土製品　土師器、須恵器、緑釉陶器、土馬、円面硯、ミニチュワ土器などがある。溝・土坑から出土した土器は平城宮土器Ⅲ～Ⅴにかけてのものが大部分を占める。ＳＥ14の井戸枠抜取り痕跡から緑釉陶器羽釜が出土した。ＳＥ07の井戸枠内から墨書土器が１点出土した。土師器Ⅲの底部外面に１文字あるが判読できない。

銅　銭　ＳＸ16から５枚、ＳＢ42東側柱列の南から第３柱穴の柱痕跡から14枚出土した。ＳＸ16の銅銭は４枚が和銅開珎、柱穴の銅銭は１枚が神功開宝である。他の銅銭は銭文が銹化して判読できない。

鎌倉時代の遺物　瓦器椀・皿、土師器皿・羽釜、須恵器鉢（東播系）、輸入陶磁器、下駄など12世紀末から13世紀後半の遺物が出土した。

室町時代の遺物　軒平瓦、土師器皿・羽釜、瓦器摺鉢、瓦器大型製品の火舎・火鉢、国産陶器甕（備前、常滑、瀬戸、信楽）、能面、砥石、石鍋、硯など14世紀から15世紀にかけての遺物が出土した。軒平瓦は瓦当面に「菅」の銘があるものである。土坑ＳＫ101の埋土から15世紀前半の土器とともに木製の能面が出土した。面は左側の額から下顎にかけてと鼻を欠くが、縦13.7㎝、横9.3㎝分が残存する。面は火を受けたためが左半分が、炭化している。材質はケヤキである。面は一木造りで、表面を黒漆塗り、白下地としたのち、彩色したものと考えられるが、下地・彩色ともほとんど残らない。裏面は、素地のままである。左のこめかみ部分には紐を通すための小孔がある。額とみけんに皺を刻み、目は細い長く切り込む。目と額の間はやや高まり、眉を表す。頬は膨らみやや高くなっている。上唇はやや幅広く、唇端部に窪みをもたせている。髭・眉に植毛の痕跡はない。面としてはやや小振りで、抑揚の小さいものである。形態から「尉」の面と考えられる。

Ⅳ　まとめ

今回の調査で得られた知見について簡単にまとめてみる。

1.　弥生時代中期から古墳時代にかけての集落遺構が良く遺存していたことから、この周辺にこの時期の集落が広がっていることが考えられる。なお、７世紀の井戸も検出されており、平城京遷都以前の様子を知る上で重要な資料である。

2.　平城京の遺構は、建物配置の状況から一坪以上の利用がわかる。こうした宅地は通例五位以上の貴族に与えられたものである。隣接する右京三条二坊では四坪を占める右大臣大中臣清麻呂の邸宅跡の存在が地名から推定されるなど、平城宮にほど近いこの地域には貴族の邸宅跡が多くあったことが窺える。

3.　遷都以後さびれたこの地も、鎌倉時代（12世紀末）頃から再び人々が居住するようになった。南北朝から室町時代前半の大和では、荘園を基盤とした国人、地侍層が勢力を持つようになり、今回の遺構がその一勢力である宝来氏傘下の菅原氏の住まいであるとも考えられる。

これまで調査例の少なかった右京地域でも、今回のように弥生時代から室町時代かけての遺構が良く残っていることがわかった。今後、この周辺については再開発事業による大期模な発掘調査を実施していくことになるであろうが、これまで以上の発掘成果が期待される一方で遺跡保存への対応が大きな問題となっていこう。　（篠原豊一）

1）奈良市教育委員会「奈良市埋蔵文化財発掘調査概要報告書」昭和63年度
中野益雄他　「付論　平城京左京（外京）五条五坊十坪から出土し胞衣壷の残存脂質について」
2）奈良国立文化財研究所「昭和60年度　平城宮発掘調査部発掘調査概報」
Ⅱ　平城京の調査　　7.　右京八条一坊十三・十四坪の調査　第168次

2. 平城京左京二条四坊七坪の調査　第174次

Ⅰ　はじめに

本調査は、萬国企業㈱届出の共同住宅建設に伴なう事前の発掘調査である。調査地は、奈良市法蓮町369－1、200－4で、平城京条坊復元では平城京左京二条四坊七坪にあたる。昭和63年度に実施した左京二条四坊二坪の発掘調査成果から、一・二・七・八坪の4坪にまたがる規模の邸宅跡が想定されており、本調査ではその一端を解明できるものと期待された。調査は、平成元年4月10日から6月29日にかけて実施した。

Ⅱ　検出遺構

発掘区の土層堆積は、耕土の下に、灰色砂土、黄褐色土、灰褐色土（遺物包含層）と続き、黄褐色粘土の地山となる。遺構面は地山上面で、水田面からの深さ0.45m、その標高は概ね65.75mである。

主要な検出遺構は、掘立柱建物15棟、井戸6基、七・八坪々境小路南側溝と築地雨落溝、坪内道路とその南北両側溝、土坑である。奈良時代と12世紀頃の遺構が存在する。

SD01　幅2.0m以上、深さ0.5mの東西溝。七・八坪々境小路南側溝に相当する。

SD02　幅2.7m、深さ0.3mの東西溝。築地の雨落溝に相当するものと思われる。溝内埋土から馬の骨が点々と出土しており、馬を部位ごとに切断して遺棄したと考えられる。

SD03・04　ＳＤ03は幅3.0m、深さ0.4m、ＳＤ04は幅1.8m、深さ0.35mの東西溝で、西へ向って浅く途切れる。ＳＤ03は坪内道路ＳＦ05の北側溝、ＳＤ04はその南側溝と考えられる。

SF05　坪内道路で、北から南北⅓坪の位置にある。ＳＦ05心は、X＝－145,657.120m、Y＝－16,748.000mである。

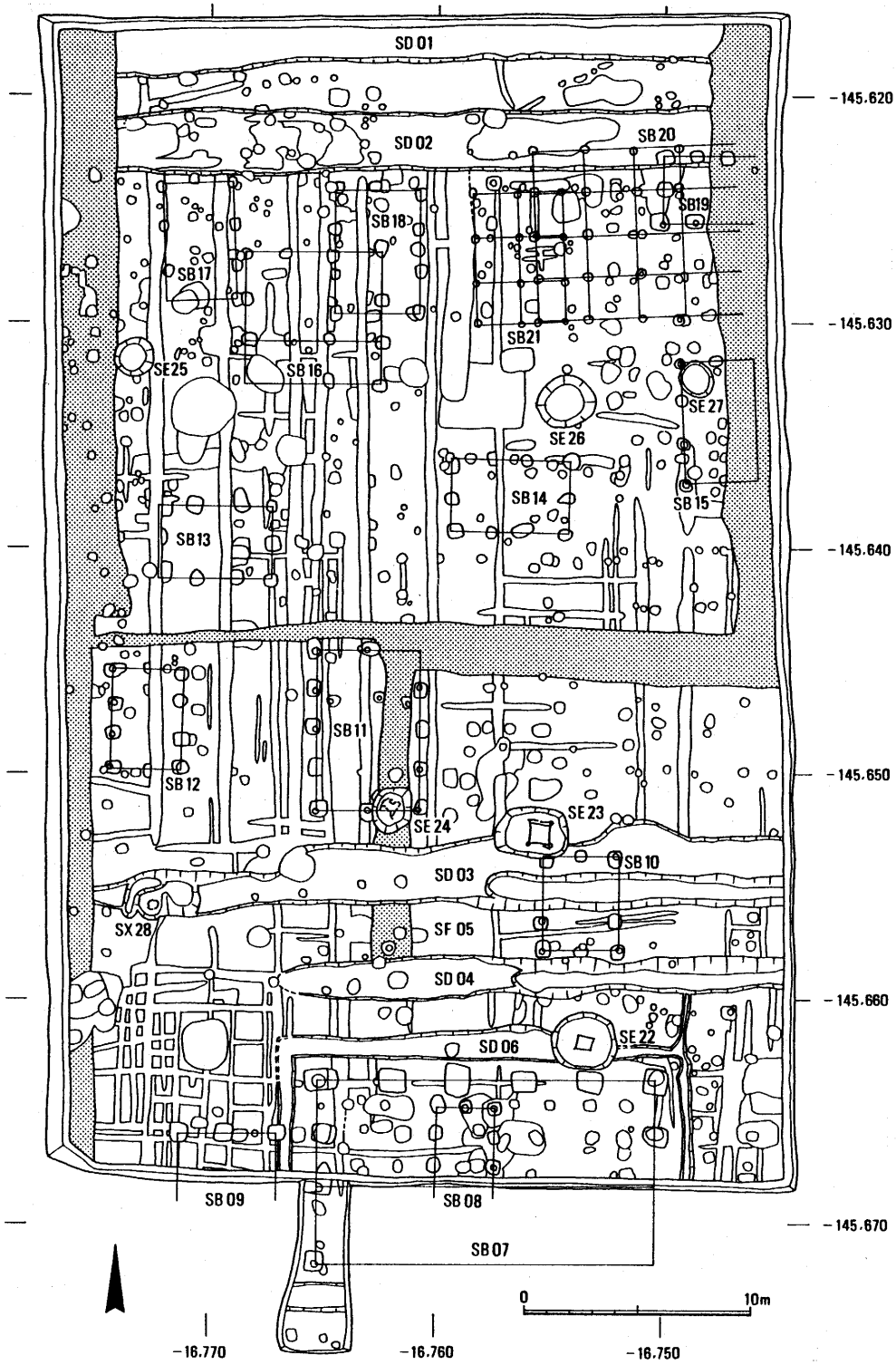
SD06　ＳＢ07を取り囲んで方形にめぐる溝。北と南で幅広く（1.3～1.0m）、西と東で幅が狭い（0.5m）。深さ0.2m。SB07の雨落溝に相当するものと考えられる。

SB07　桁行5間（15.0m）、梁間2間（4.8m）の掘立柱東西棟建物で、柱間3.4mの南面する広庇をもつ。桁行の柱間3.0m等間、梁間の柱間2.4m等間である。

SB08　桁行2間（2.6m）以上、梁間2間（2.6m）の掘立柱南北棟建物。柱間は桁行1.3m等間、梁間1.3m等間である。

SB09　梁行2間（4.2m）の掘立柱南北棟建物になるものと考えられる。桁行は不明。梁間の柱間は2.1m等間である。

SB10　桁行3間（4.2m）、梁間2間（3.4m）の掘立柱南北棟建物。柱間は、梁間1.7m等間、桁行は1.4m等間になるものと思われる。


SD 01
SD 02
SB 20
SB 19
SB 18
SB 17
SB 21
SE 25
SB 16
SE 27
SE 26
SB 14
SB 15
SB 13
SB 11
SB 12
SE 24
SE 23
SB 10
SD 03
SX 28
SF 05
SD 04
SD 06
SE 22
SB 09
SB 08
SB 07
-145.620
-145.630
-145.640
-145.650
-145.660
-145.670
-16.770
-16.760
-16.750
0
10m

発掘区平面図　1/300

SB11　桁行4間（7.2ｍ）、梁間2間（4.6ｍ）の掘立柱南北棟建物。柱間は、桁行1.8ｍ等間、梁間2.3ｍ等間である。

SB12　桁行3間（4.5ｍ）、梁間2間（3.0ｍ）の掘立柱南北棟建物。柱間は、桁行1.5ｍ等間、梁間1.5ｍ等間である。

SB13　桁行3間（5.1ｍ）、梁間2間（3.2ｍ）の掘立柱東西棟建物。柱間は、桁行1.7ｍ等間、梁間1.6ｍ等間である。

SB14　桁行3間（5.1ｍ）、梁間2間（3.0ｍ）の掘立柱東西棟建物。柱間は、桁行1.7ｍ等間、梁間1.5ｍ等間である。

SB15　桁行3間（5.4ｍ）、梁間1間（1.7ｍ）以上の掘立柱南北棟建物になると思われる。柱間は、桁行1.8ｍ等間である。

SB16　桁行3間（6.0ｍ）、梁間2間（4.0ｍ）の掘立柱東西棟建物で、柱間1.8ｍの南面庇をもつ。桁行の柱間2.0ｍ等間、梁間の柱間2.0ｍ等間である。

SB17　桁行3間（5.1ｍ）、梁間2間（3.0ｍ）の掘立柱南北棟建物。柱間は、桁行1.7ｍ等間、梁間1.5ｍ等間である。

SB18　桁行3間（5.4ｍ）、梁間2間（3.6ｍ）の掘立柱南北棟建物。柱間は、桁行1.8ｍ等間、梁間1.8ｍ等間である。

SB19　桁行2間（3.0ｍ）以上、梁間2間（3.0ｍ）の掘立柱東西棟建物。柱間は、桁行1.5ｍ等間、梁間1.5ｍ等間である。

SB20　桁行3間（6.6ｍ）以上、梁間4間（7.4ｍ）の総柱の掘立柱建物。柱間は、桁行が西から2.3ｍ、2.3ｍ、2.0ｍ、梁間が北から1.8ｍ、1.9ｍ、1.8ｍ、1.9ｍである。時期は12世紀頃と思われる。

SB21　桁行3間（5.7ｍ）、梁間2間（3.8ｍ）の総柱の掘立柱南北棟建物。柱間は、桁行1.9ｍ等間、梁間1.9ｍ等間である。時期は12世紀頃と思われる。

SE22　南北2.4ｍ、東西2.75ｍの隅丸方形掘形内に、南北0.5ｍ、東西0.7ｍの方形井戸枠を組むもの。深さ2.35ｍ。北辺が2枚、他辺は1枚の縦板を用い、東西辺を南北辺にはさみ込んで横桟で支持している。枠内から奈良時代中頃の土器が出土。遺構の重複関係からSD06よりも古いことがわかる。

SE23　南北2.2ｍ、東西2.9ｍの隅丸方形掘形内に、一辺0.78ｍの方形井戸枠を組むもの。深さ2.2ｍ。構造は縦板組横桟留で、枠内から奈良時代後半の土器が出土。

SE24　南北1.9ｍ、東西1.8ｍの隅丸方形掘形内に、一辺0.69ｍの方形井戸枠を組むもの。深さ2.3ｍ。構造は縦板組横桟留で、枠内から奈良時代後半の土器と土製品が出土。

SE25　直径1.7ｍの円形掘形を有し、深さ0.8ｍの井戸。枠は残存しない。埋土から12世紀の土器が出土している。

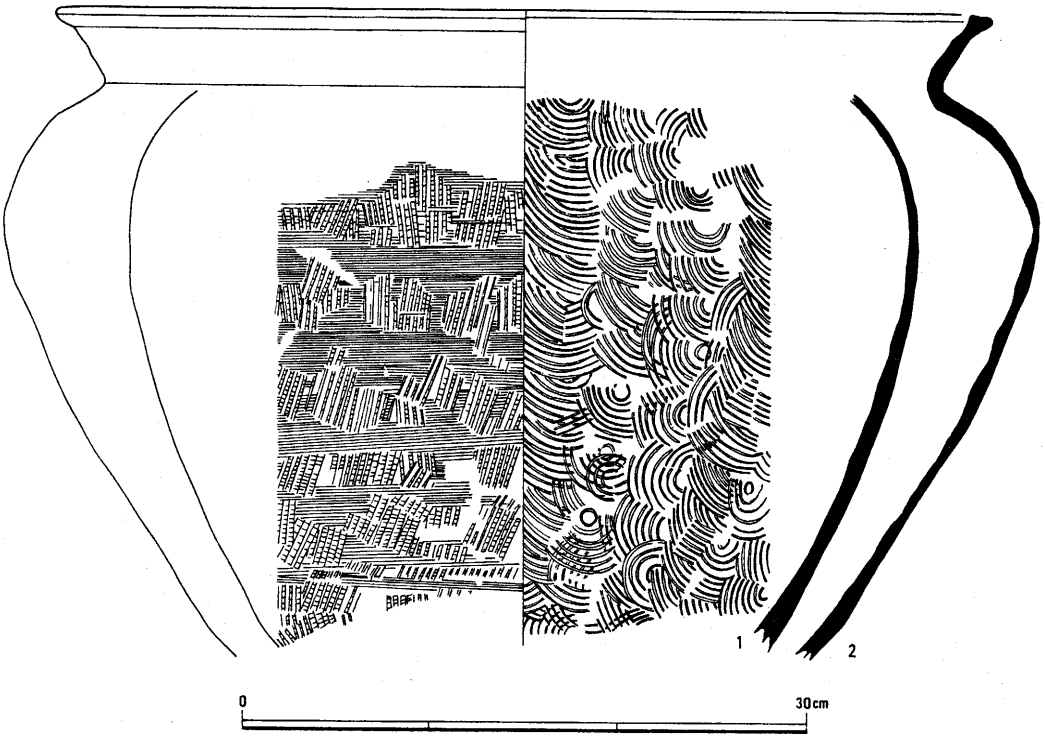
SE26　南北2.4ｍ、東西2.6ｍの円形掘形を有し、深さ0.6ｍの井戸。枠は残存しない。埋土から奈良時代中頃の土器が出土している。

SE27　直径1.6ｍの円形掘形を有し、深さ0.5ｍの井戸。枠は残存しない。埋土から12世紀後半の土器が出土している。

SX28　径0.9ｍの掘形内に、須恵器甕を2重にして埋置したもの。甕は再利用したものらしく、側面の欠失部分を縦板をめぐらせて補なう。底部は故意に打ち欠いている。北西側にL字形に溝がめぐる。埋土の状況からSD03と同時期のものと考えられる。遺構の性格を解明するため、甕内埋土の残存脂質を分析し、その結果を本編の付論に掲載した。

Ⅲ　出土遺物　以下に主要な出土遺物について記す。

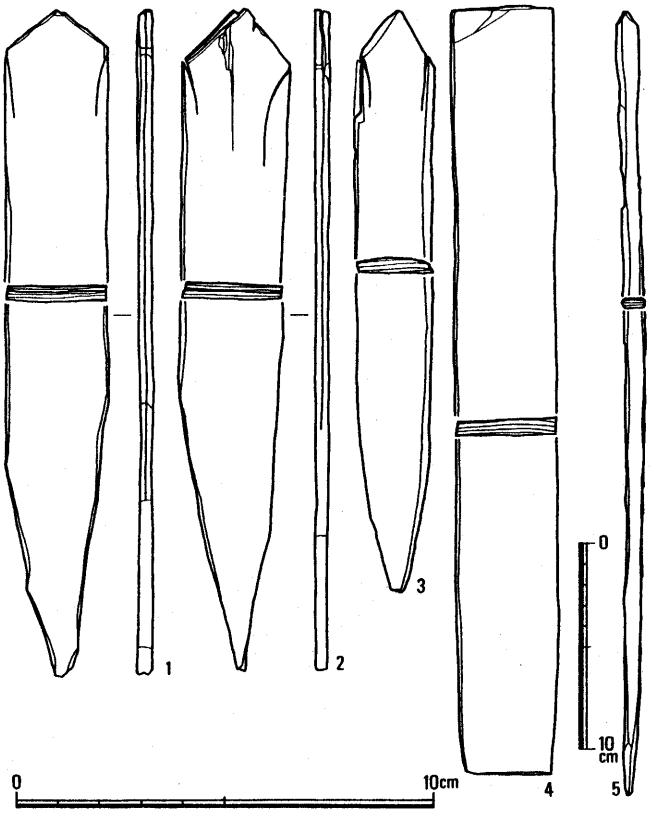
SX28出土土器　須恵器甕（1）、甕C（2）がそれぞれ1点づつある。1は胴部上半は欠損しており、下半部だけが残存する。胴部外面は、カキ目で調整したのちに縦位方向の叩きが施される。内面には当板の同心円文が残る。口縁部が残存しないため器種の判別が難しいが、胴部の形状からみて甕Aか甕Bになると考えられる。2は肩の張った広口短頸の甕。口縁部から胴部上半までが残存し、底部を欠く。口径48.5㎝。最大径が肩部にあり、55.0㎝を側る。調整は、口縁部内外面をロクロナデ調整し、肩部から胴部下半にかけて斜位方向の叩きを施している。体部内面には当面には、当板の同心円文が残る。（鐘方正樹）



SX28出土土器　1/4

SE24出土遺物

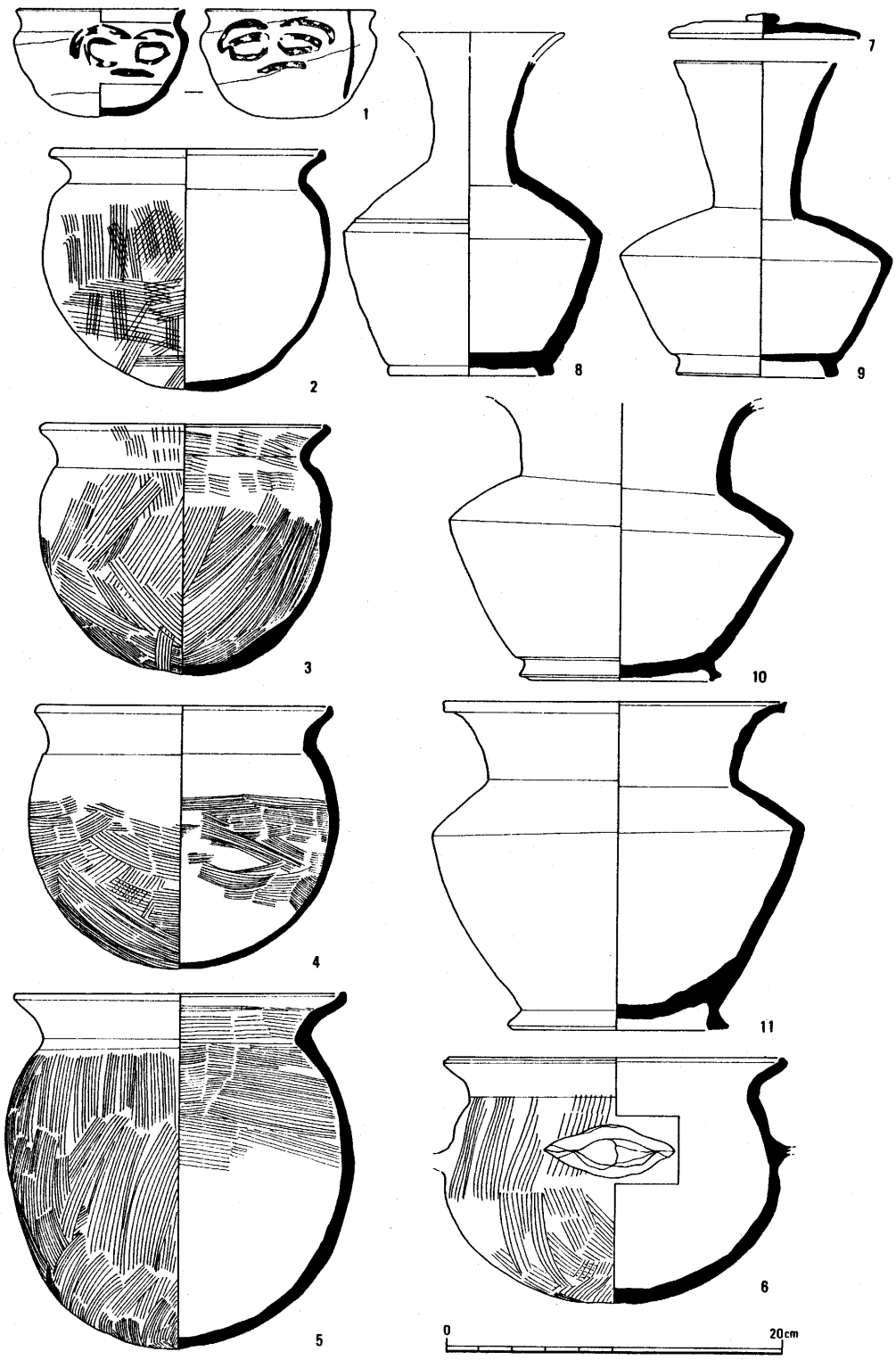
木製品　井戸枠内から3種4点（1〜3・5）の斎串と少量の桧皮が、井戸掘形から不明品（4）が出土した。1・2は上端を圭頭状に下端を剣先状に削り、側辺上端に左右一対の切込みを入れる斎串。両面とも割り面が残り、側辺は粗く削り整えられている。上端木口からほぼ全長の3分の2まで割れ目が入れられているのが特徴的である。こうした例は比較的少なく、例えば、当市教育委員会が実施した発掘調査で出土した斎串95点のうちでは、第180次調査出土の4点（本書37頁）を含め6点（6.3％）しかない。1は長さ17㎝、幅2.6㎝、厚さ4㎜、2は長さ17.1㎝、幅2.5㎝、厚さ4㎜とほぼ同寸である。3は小型の斎串。上端斜辺に左右一対の切込みがある。長さ14㎝、幅1.8㎝、厚さ4㎜。5は棒状の材の上端を圭頭状に下端を粗く削ってとがらせる斎串。一側辺には下向きに3個所、上向きに5個所、他側辺には下向きに5個所、上向きに4個所の切込みがある。切込みは浅く、各1回ずつである。長さ37.6㎝、幅1.0㎝、厚さ5.5㎜。4は用途不用品。一面は粗く削られ、他面は割り裂いたまま、両端と側辺は削って整形されている。長さ18.5㎝、幅2.5㎝、一端の厚さ4㎜、他端の厚さ1㎜と一方を薄く削って仕上げている。　（西崎卓哉）



SE24出土木製品

土師器		個体数		比率
杯	A	4	7	21.9％
皿	A	1		
椀	A	2		
小形壺		1	11	34.3％
甕	A	4		
	B	5		
	C	1		
小計		18	18	56.2％
須恵器		**個体数**		**比率**
杯	A	4	7	21.9％
	B	1		
	（B蓋）	（6）		
皿	A	2		
	（B蓋）	（3）		
壺	K	2	7	21.9％
	Q	2		
横瓶		1		
甕	B	1		
		1		
小計		14	14	43.8％
総計		**32**	**32**	**100％**

SE24出土土器器種構成表



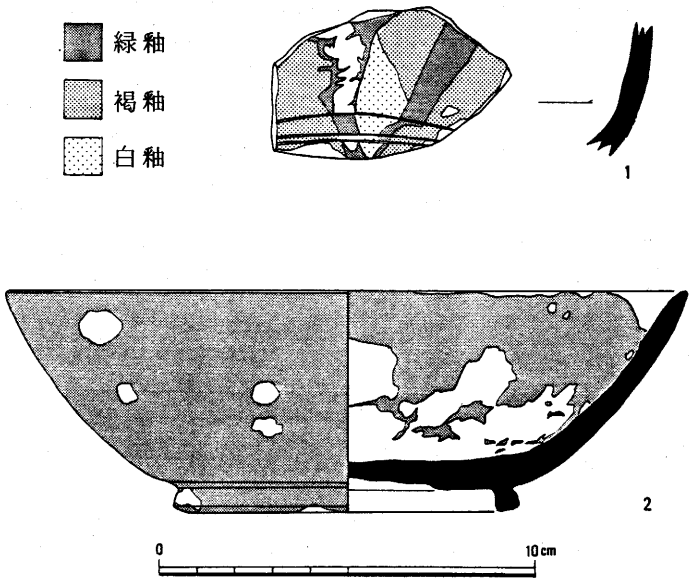
SE24出土土器　1/4

土器　土師器には、杯A、皿A、椀A、壷A、甕A・B・Cがある。供膳形態のものは残存状態が悪く、図示し得なかった。壷B(1)は球形の体部と外反する短い口縁部からなる小型の器。口径9.5㎝、器高6.5㎝を測る。胴部外面の二面に眉、目、口が墨で線描されている。甕A(2〜4)は、半球に近い胴部と外反する口縁部からなる。胴部外面は、いずれもはけ目調整をする。内面は、2が不定方向のなで、3・4ははけ目を施す。口径16.0〜17.2㎝、器高14.3〜15.7㎝。甕B(6)は、甕Aに把手を付けたもの。胴部外面には粗い縦方向のはけ目を施す。口径20.0㎝、器高14.7㎝。甕C(5)は、長い胴部と外反する口縁部からなる。肩部から底部にかけて縦位方向のはけ目を施す。内面は、口縁部から胴部上半までを横位方向のはけ目を施す。胴部下半は、無調整のままである。口径19.7㎝、器高21.3㎝。

須恵器には杯A・B、杯B蓋、皿A、皿B蓋、壷K・Q、横瓶、甕がある。杯B蓋(7)は、頂部外面をロクロナデ、縁部をヘラ削りしたのちナデで仕上げている。口径11.2㎝、器高1.6㎝。壷K(8・9)は、肩が張り稜角を呈する体部と細長い頸部からなる。いずれもロクロナデ調整で仕上げる。口径9.6㎝、器高17.8〜20.5㎝。壷Q(10・11)は、稜角をなす肩部をもつ胴長の体部と広口の口頸部をもつ。ロクロナデで仕上げている。口径20.3㎝、器高19.6㎝。壷K・Qともに、内面には漆の付着が見られる。

これらの土器は平城宮土器V〜Ⅵにかけての特徴をもつものである。

包含層出土土器　ほとんどが奈良時代の土師器、須恵器である。この他には、奈良三彩椀、緑釉椀がそれぞれ1点づつある。



包含層出土施釉陶器　1/4

奈良三彩椀(1)は、口縁部下半に3重の圏線がめぐらされている。小片のため全体を復元するまでには至らない。

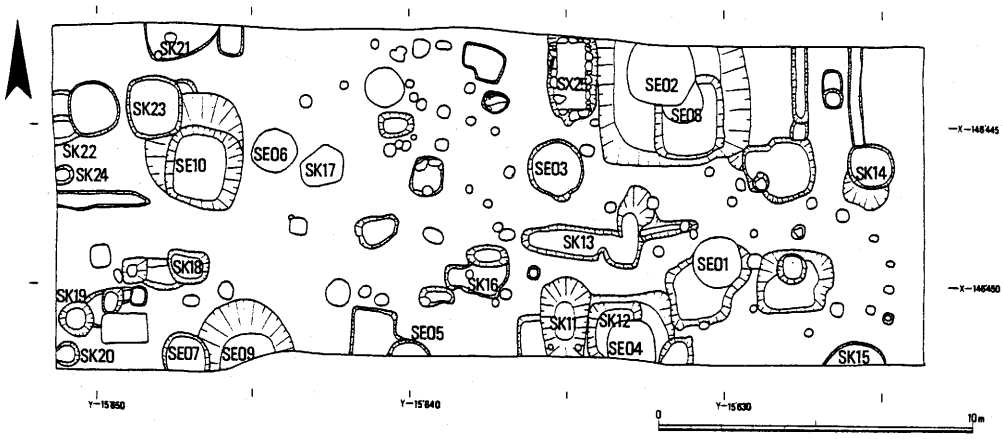
緑釉椀(2)は器面全体に淡緑色の釉をかけているが、2次的な焼成を受けたらしく、剥落が著しい。口径18.0㎝、器高5.9㎝を測る。8世紀末頃のものであろう。

(三好美穂)

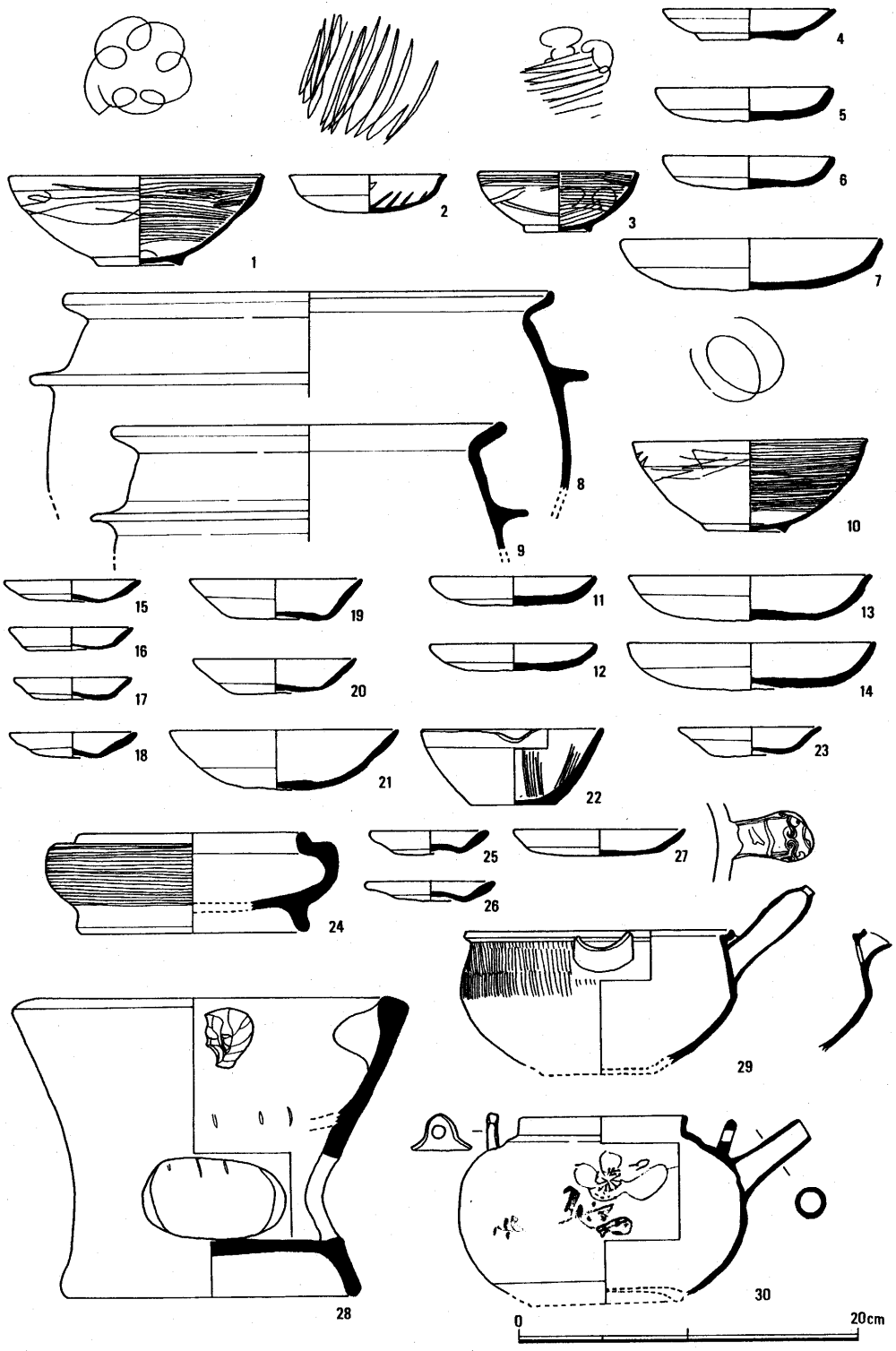
3. 平城京左京三条六坊十二坪の調査　第176次

奈良市林小路町1－6他における店舗建設に伴う事前調査である。調査地は、十二坪の西辺で、昭和60年の第89次調査地とは、南へ7.5m隔る。発掘区は、東西28m、南北10mで、調査期間は、平成元年5月15日から6月12日までである。発掘区の基本的な層序は、現地表から、造成土、暗茶褐色土、黒褐色土の順で、地表下約1mで地山の淡黄色砂礫層に達する。遺構はこの淡黄色砂礫層上面で検出した。検出した遺構は、奈良時代から江戸時代の井戸、土坑などである。井戸SE08は、唯一、奈良時代の遺構と考えられるもので西北が江戸時代の井戸SE02によって破壊されているが、径約1.4m、検出面からの深さ約2mを測る円形素掘りの井戸である。奈良時代の土師器、須恵器が若干量出土した。井戸SE10は、井戸側を抜きとったとみられるもので、掘り方の一辺が2.5m、検出面からの深さ約2mを測る。12世紀後半の瓦器椀（1、3）、瓦器皿（2）、土師器皿（4～7）などが多量に出土した。土坑SK12は、これよりやや時期が下り、12世紀末の瓦器椀（10）土師器羽釜（8、9）、土師器皿（11～14）が出土した。12世紀後半～末の遺構は、他に井戸SE06・09、土坑SK18・19・21・24がある。井戸SE01・05、土坑SK11・17・20は14世紀のもので、土師器皿（15～21）はSE01から出土。石組遺構SX25からは、瓦灯（24）、土師器皿（25～27）が出土し、16世紀後半のものと考えられる。土坑SK13・16・22・23などもほぼ同時期のものである。江戸時代の遺構は、井戸SE02・03・07、土坑SK14・15などで、瓦質七輪（28）、陶器行平（29）、陶器土瓶（30）などは、土坑SK14から出土した。

（森下恵介）



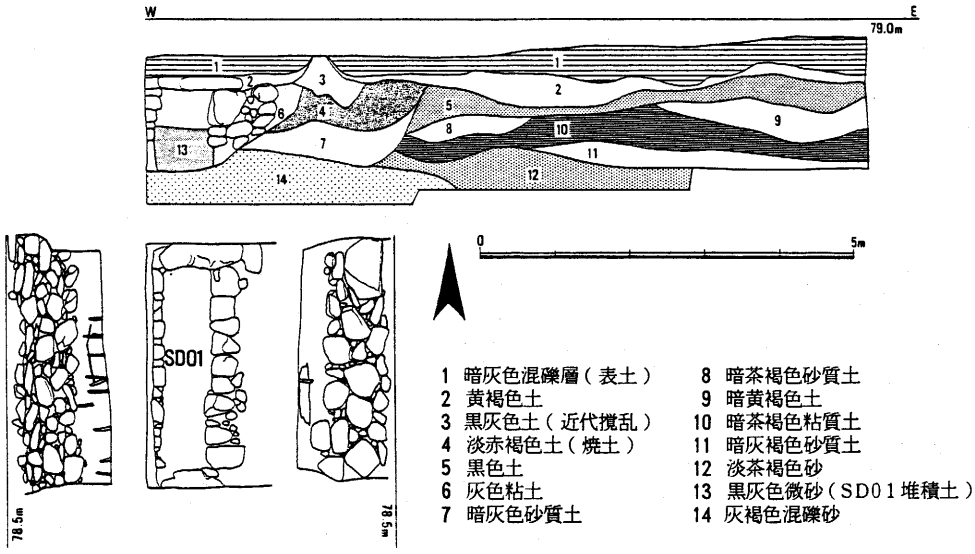
検出遺構平面図　　1/250


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
0
20cm

出土土器　1／4

4. 平城京左京四条七坊一坪の調査　第177次

奈良市橋本町3－1における仮称奈良市商工センター建設に伴う事前調査である。調査地の左京四条七坊一坪は興福寺南花園であり、その西辺を限る東六坊大路が、今回の調査地内に推定された。発掘区は、南北3.4m、東西9.5mの規模で、調査期間は、平成元年6月29日から7月17日までである。発掘区内の基本的な層序は、現地表から暗灰色混礫土（表土）、黄褐色土、黒色土、暗黄褐色土、暗茶褐色粘質土、暗灰褐色砂質土の順であり、地表下約1.6mで、遺物を含まない淡茶褐色砂層に達する。淡茶褐色砂層からは、湧水が著しくこれ以下の掘り下げを断念したが、堆積土層のうち、暗茶褐色粘質土、暗灰褐色砂質土層からは、瓦器椀、土師器皿、土師器羽釜など12世紀後半～13世紀の土器類が出土した。検出した顕著な遺構は、表土下の黄褐色土層上面で検出した石組暗渠SD01だけで、東六坊大路に関る遺構は、検出できなかった。石組暗渠SD01は、発掘区西端で検出した南北方向の暗渠で、3.4m分検出したが北方は、隣接地へつづく。幅約60cm、深さ1.2mを測り、溝底部を横板を杭止めして護岸し、その上部80cmの高さに石積みする。溝は、板石で蓋されており、北端の一枚は原位置を保っている。石積みは、東側の石材がやや大きく、3段程度に積み上げるのに対して、西側は、石材が小さく4～5段に積み上げる。溝内には、50cm程度、灰色細砂が堆積しており、19世紀までの陶磁器片が出土した。石積み裏込めからは、16世紀～17世紀の土器類が出土しており、築造は近世初頭に遡る可能性がある。南方の率川までの町の排水路と考えたい。　（森下恵介）



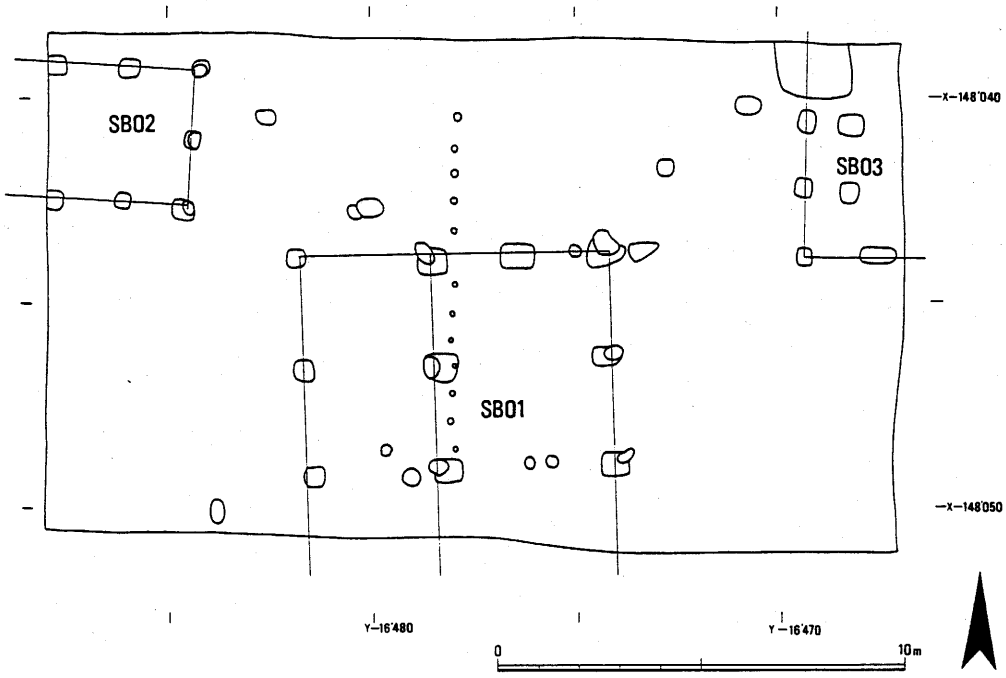
北壁土層図　SD01平面立面図　1/100

5. 平城京左京六条四坊十三坪の調査　第179次

奈良市大安寺町1121番地における共同住宅建設に伴う事前調査である。調査地は、大安寺旧境内の東方、左京六条四坊十三坪の北辺東寄りにあたる。発掘調査は、東西21m、南北12mの発掘区を設定し、平成元年7月15日から8月1日にかけて実施した。

発掘区の基本的な層序は、現地表から、造成土、黒色土（旧耕土）、灰色微砂、灰色砂質土、茶灰色砂質土の順で、地表下1.1mで地山の黄褐色粘土層に達する。遺構は、この黄褐色粘土層上面で検出した。

検出した主な遺構は、奈良時代の掘立柱建物3棟である。掘立柱建物SB01は、桁行3間（7.2m）以上、梁間2間（4.2m）の南北棟で、西側に庇（3m）がつく。柱間寸法は、桁行が2.7m等間、梁間が2.1m等間である。身舎の柱穴6か所に柱の抜き取り痕跡がある。SB02は、桁行2間（3.3m）以上、梁間2間（3.3m）の東西棟建物で、柱間寸法は、桁行、梁間とも1.65m等間とみられる。SB03は、桁行3間（3.3m）以上、梁間2間の南北棟建物と考えられ、柱間は、桁行が1.65mの等間、梁間が1.8mを測る。遺構に伴う出土遺物は、ほとんどない。また、発掘区中央で検出した南北方向の杭列は、旧水田の区画に関るものである。　（森下恵介）



検出遺構平面図

6. 平城京左京二条四坊十一坪の調査　第180次

Ⅰ　はじめに

この調査は、仮称奈良市立第42小学校建設予定地で実施した事前発掘調査である。建設予定地は奈良市法蓮町212番1他23筆、面積は18,172㎡である。当該地は京の条坊では左京二条四坊の六坪と十一坪に相当すると思われ、遺存地割からみて敷地北辺に二条々間路の一部が、東辺に十一坪の東を画する小路がかかる可能性もあった。また、敷地南半は地割りが乱れていることから奈良時代以降、一時河川となっていたことが予測された。こうした中で校舎建設予定位置を勘案し、十一坪のうち東北の一画の様相を究明し、二条々間路と十一、十四坪境小路の位置を確認すべく発掘区を設定した。調査期間は平成元年7月24日から11月14日まで、校舎建設予定面積3,396㎡に対して発掘面積は計2,500㎡である。

Ⅱ　検出遺構

北・東・中の発掘区を設定して調査を進めた。以下、基本的な層序にふれた後、発掘区ごとに遺構の概要を記す。

1. 層　序

北発掘区西壁の土層を示そう。基本的には敷地全体が水田であるが、一部に薄く土砂が入れられ造成されており、その際の土砂、淡茶色砂質土が20㎝ほどある。その下に旧水田耕土である黒色粘土、黄灰砂質土、灰色砂質土、暗灰色粘質土と続き旧水田面下70㎝ほどで地山である黄灰色粘質土層に達する。地山面は北に向かって下り勾配で、地山面の標高は北発掘区北端で66.7m、中央発掘区のうち遺構が検出できた地区の南端で66.4mである。遺構は地山面で検出した。

2. 北発掘区

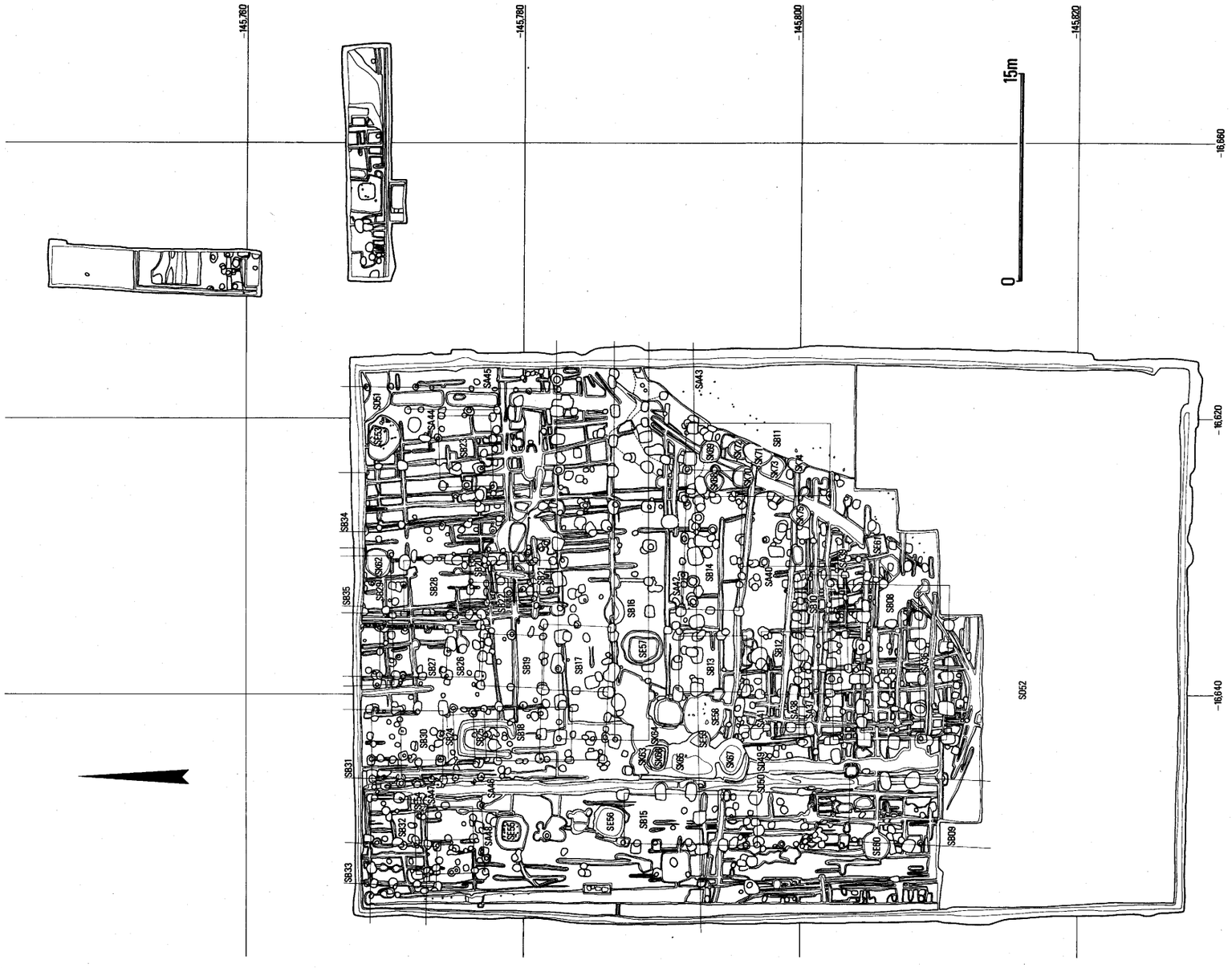
道路1条、溝1条、柱穴などを検出した。

SF01　発掘区北半で検出した東西道路。二条々間路である。路面の南半7.5m分を検出したのみで幅員は不明。路面を整地したような痕跡はないが、路面が北へ向かい下の勾配になっており路面上に暗灰色粘土が堆積している。

SD02　素掘りの東西溝で2.4m分を検出した。二条々間路の南側溝である。幅4.15m、深さ60㎝。中央部が幅85㎝、深さ36㎝にわたって一段掘り下げられている。溝内の堆積土は上下二層に分かれ、いずれの層からも若干の奈良時代の土器片が出土した。溝心の座標はX＝－145,755.16　Y＝－16,610.30である。

3. 東発掘区

道路1条、溝2条、自然流路1条、井戸1基、柱穴を検出した。



検出遺構平面図　1／400

SF03　発掘区中央で検出した南北道路。十一坪と十四坪を画する小路である。東、西の側辺に側溝が掘られており、側溝心々の幅員は7.12m、路面幅は4.9mほどである。道路心はX＝－145,767.37　Y＝－16,600.56にある。

SD04　素掘りの南北溝で南北2.4m分を検出した。後述のSD06が埋った後、掘削されている。十一、十四坪境小路の東側溝である。幅3.02m、深さ62cmで。氾濫のためにか幅広になっている。溝内の堆積土は4層に分れるが、滞水していたのか第2層以下はいずれもシルト層である。溝心はX＝－145,767.37　Y＝－16,597.00にある。

SD05　素掘りの南北溝である。後述のSE07に破壊されているのでわずか1.0m分を検出したのみである。十一、十四坪境小路の西側溝にあたる。幅2.05m、深さ30cmと浅く、遺物もほとんどない。溝心はX＝145,771.30　Y＝－16,604.12にある。

SD06　発掘区東端を斜行する流路。SD04と重複して検出した。幅2.6m以上、深さ65cm。流路内には砂とシルトが互層になって堆積している。遺物が出土しなかったので時期は不明。

SE07　SD05と重複して検出した井戸。SD05を破壊している。掘形は東西2.96m、南北2.1m以上、深さ2.26m。井戸枠は内法一辺75cmの方形横板井籠組で、深さ1.9m、5段分が残っていた。各段の寸法にはばらつきがあり底から54－50－30－28－28cmの単位で横板を組み上げるが、それぞれの段の単位寸法に足りない辺の横板は2枚をあわせて一段としている。各段は雇枘で固定している。

4.　中央発掘区

建物35棟、塀13条、井戸9基、溝3条、土坑6基、粘土採集坑、不明遺構などを検出。

A　建　物　すべて掘立柱建物である。瓦がほとんど出土していないことから、いずれも瓦葺建物であったとは考えられないが、他の出土遺物からみて奈良時代の遺構である。以下、遺構ごとに概要を記す。規模などは表に示した。

SB08　5間×4間の南北二面庇付東西棟建物。柱間は桁行が7.5尺等間、梁間は7尺等間、庇の出は7尺である。柱掘形は一辺0.7～1.2m、深さ0.4～0.7mと大型だが、不整形で大きさもまちまちである。SA34より古い。

SB09　3間以上×2間の南北棟建物。建物南半は流路に破壊され全体の規模は不明。柱間は桁行が7.5尺等間、梁間は8尺等間。SD49・50より新しくSE60より古い。

SB10　3間×2間の東西棟建物。桁行の柱間が8.5－8.5－6尺と不揃い、梁間は5.5尺等間。SA35・36より古い。

SB11　5間×2間の南北棟建物。建物の南東部を流路に破壊される。柱間は桁行が7尺等間、梁間は9尺等間。南妻柱筋がSD08の北側柱筋と揃っている。SA43より古く、SB14より新しい。

SB12　3間×2間の南北棟建物。柱間は桁行が17尺の三ツ割、梁間は7.5尺等間。

SB13　3間×2間の南北棟建物。柱間は桁行5.5尺等間、梁間は7尺等間。重複していないので前後関係は不明だが、規模と位置からみてSB12と建替の関係にあるのではないかと思われる。

SB14　4間×2間の東西棟建物。柱間は桁行が10尺等間、梁間は7尺等間。SA40より新しく、SB11より古い。

SB15　4間×2間の東西棟建物。柱間は桁行が8尺等間、梁間は6尺等間。柱穴が不揃いである。SA43・SD50より新しく、SE56より古い。

SB16　11間以上×3間の南庇付東西棟建物。東は発掘区外へのび全体の規模は不明。桁行の柱間は西から7間目が10尺と広く、そこから西へ7.5尺等間で4間、さらに8.5尺等間で2間、東へ8.5尺で1間、7.5尺等間で3間と不揃いである。西から7間目の柱間を桁行中央間とみれば全体で13間、総長104尺に復元できる。梁間は7尺等間、庇の出は8.5尺である。SB17・SE57より古い。

SB17　5間×2間の東西棟建物。桁行の柱間は西から3間が5.5尺等間、2間が8尺等間。西から3間目に間仕切りの柱穴がある。梁間は8尺等間。SB16・18より新しく、SB19より古い。

SB18　3間×2間の南北棟建物。柱間は桁行が6尺等間、梁間は7尺等間。SB17より古い。

SB19　2間×2間の掘立柱建物。柱間は東西が6.5尺等間、南北が7.5尺等間と南北方向の柱間が広い。SB17より新しい。

SB20・21・22　同位置で建て替えられた小型の掘立柱建物。SB20・21は3間×1間の南北棟建物。SB22は3間×2間の東西棟建物。SB20・21は桁行が7尺等間、梁間は7.5尺。SB22は桁行が5尺等間、梁間は12尺。SB22は21より新しい。

SB23　3間×2間の東西棟建物。柱間は桁行が5.5尺等間、梁間は6.5尺等間。

SB24・25　同位置で建て替えられた小型の掘立柱建物。いずれも3間×1間で、桁行の柱間は6尺等間。梁間はSB24が6尺、25が7.5尺である。

SB26　4間以上×2間の南北棟建物。桁行の柱間は南1間目のみ8尺、他は6尺等間。桁行の南から1間目に間仕切りの柱穴がある。梁間は7尺等間。SB29より新しく、SB27・28より古い。

SB27　3間×2間の南北棟建物。柱間は桁行が5.5尺等間、梁間は6尺等間。SB26・29より新しい。

SB28　3間×2間の南北棟建物。柱間は桁行が5.5尺等間、梁間は6.5尺等間。SB26より新しい。

SB29　5間×1間以上の東西棟建物。桁行の柱間は5－7－7－7尺と不揃い。梁間は4尺と狭い。SB26・27より古い。

SB30　3間×3間の西庇は南北棟建物。柱間は桁行が5.5尺等間、梁間は6尺等間。庇の出は5尺。SB31より新しく、SA47より古い。

SB31　1間以上×2間の南北棟建物。柱間は桁行、梁間ともに5.5尺。

SB32　3間以上×2間の東西棟建物。桁行の柱間は東から1間目のみ10尺、他は7尺等間。桁行の東から1間目に間仕切りの柱穴がある。梁間は7尺等間。SB33より古い。

SB33　3間以上×2間の東西棟建物。柱間は桁行、梁間ともに5尺等間。

SB34・35　ともに発掘区の北端で検出した不明×2間の南北棟建物。柱間はいずれも7尺等間。

遺構番号	棟方向	ふれ	規模	庇	桁行 m（尺）	梁間 m（尺）
SB08	東西	\	5×4	南・北	11.14（37.5）	8.32（28）
SB09	南北	/	3以上×2		6.78（22.5）	4.86（16）
SB10	東西	|	3×2		6.92（23）	3.3（11）
SB11	南北	\	5×2		10.50（35）	5.38（18）
SB12	南北	/	3×2		5.04（17）	4.48（15）
SB13	南北	|	3×2		4.95（16.5）	4.17（14）
SB14	東西	/	4×2		11.9（40）	4.19（14）
SB15	南北	/	4×2		9.65（32）	3.6（12）
SB16	東西	\	11以上×3	南	26.12（88）	6.79（22.5）
SB17	東西	/	5×3		9.74（32.5）	4.74（16）
SB18	南北	/	3×2		5.36（18）	3.98（13）
SB19		/	2×2		4.43（15）	3.84（13）
SB20	南北	|	2×1		4.25（14）	2.22（7.5）
SB21	南北	\	2×1		4.21（14）	2.24（7.5）
SB22	東西	\	2×1		2.96（10）	3.55（12）
SB23	東西	|	3×2		5.05（16.5）	3.9（13）
SB24	東西	\	2×1		3.62（12）	1.89（6）
SB25	東西	\	2×1		3.68（12）	2.28（7.5）
SB26	南北	|	4以上×2		7.72（26）	4.2（14）
SB27	南北	|	3×2		4.84（16.5）	3.5（12）
SB28	南北	|	3×2		4.84（16.5）	3.9（13）
SB29	東西	\	5×1以上		9.38（31.5）	1.18（14）
SB30	南北	\	3×3	西	5.07（16.5）	5.18（17）
SB31	南北	\	1以上×2		1.65（5.5）	3.32（11）
SB32	東西	/	3以上×2		7.12（24）	4.10（14）
SB33	南北	/	3以上×2		4.46（15）	2.94（10）
SB34			不明×2			4.2（14）
SB35			不明×2			4.15（14）

※　建物寸法は庇を含めた総長。ふれは国土方眼方位北に対する棟方向のふれを示す。東西棟建物は棟に直交するラインのふれを示した。なお、ふれの度合いは示してはいない。

検出建物一覧表

B　塀　ここでは3間以上の掘立柱列で建物としてはまとまらないものをすべて塀として報告しておく。

SA36　4間（9.0 m）以上の東西塀。柱間は7.5尺等間。SB08より新しい。

SA37　5間（11.3 m）の東西塀。柱間は西から3間が7尺等間、2間が8.5尺等間。SB08の東7尺にあり、SB08の目隠し塀かと思われる。

SA38　5間（11.9m）の東西塀。柱間は西から4間が7.5尺等間、1間が10尺。SB08の東8尺にある。SA37の改作かと思われる。

SA39　6間（12.96 m）の東西塀。柱間は西から8尺が3間、7尺、6尺が2間と不揃い。東端がSA40にとりつく。SB08より新しい。

SA40　4間（6.8 m）の南北塀。柱間は5.5尺等間。南端はSA39にとりつく。

SA41　3間（4.76m）の南北塀。柱間は北から5－6－5尺。柱掘形は一辺60～90㎝と大きい。

SA42　4間（7.05m）の南北塀。柱間は西から6.5－6－5.5－5.5尺と不揃い。SB13より新しい。

SA43　13間（33.20m）以上の東西塀。柱間は8尺等間だが、西から9間目のみ16尺と広く、これを三つ割にするやや小型の柱穴2個がある。門遺構の可能性がある。SB11より新しく、SB15・SD50より古い。

SA44　3間（6.54 m）の南北塀。柱間は北から8－7－7尺と不揃い。

SA45　8間（13.82m）の南北塀。柱間は3～9尺と不揃いであるが、SX77～79に添ってあることから、これと関わるものかもしれない。北端の1間はSD51をまたぐように溝の両肩に柱掘形を穿っている。

SA46　3間（4.98 m）の南北塀。柱間は5.5尺等間。

SA47　3間（3.6 m）の南北塀。柱間は4尺等間。SB30より新しい。

SA48　3間（4.95 m）の東西塀。柱間は5.5尺等間。

C　溝　溝2条と流路2条を検出した。

SD49　発掘区西半を南北に貫通する溝。一部が途切れたり、土坑に破壊されている。幅0.35～1.2 m、深さ10～20㎝、のべ44m分を検出した。護岸の痕跡はなく、埋土は茶褐色粘質土。ごく少量の奈良時代の土器片が出土した。SD50・SK63～67より古い。

SD50　SD49に平行する南北素掘溝。幅0.6～1.5 m、深さ20～30㎝、北端は発掘区外へ続き、南端はSD52に破壊されている。44m分を検出した。護岸の痕跡はない。埋土は暗茶褐色粘土と灰色粘土で、常時水が流れた痕跡はなく、ごく少量の奈良時代の土器片を含んでいる。全体に北で西へ1°30′ほどふれており、ややふれが大きすぎるきらいはあるが、坪内の区画溝かと思われる。SA43・SD49より新しく、SB15・SK67より古い。

SD49の掘り直しであろう。

SD51　発掘区北東隅で検出した流路。ごく一部を検出したのみであるが、幅1.3～1.9m、深さ40cm。埋土は茶灰色系の砂である。SE53より新しく、SA44より古い。

SD52　発掘区南半を大きく蛇行する河川跡。調査地の南を西流する佐保川が、流路を変えていたものと思われ、大量の砂と礫が堆積している。土層の観察をすべく、一部を重機で掘り下げたが、湧水が激しく壁面が崩壊し、2mほどを確認したのみで以下は掘削不可能であった。堆積土の状態から少なくとも3時期の流路の変遷が伺える。調査地の東北方から南半にかけて見られる地割りの乱れにそって、奈良時代以降、一時佐保川が流路を変えていたらしく、現在の佐保川の南で確認されている河川跡に続くものと思われる。

D　井　戸　奈良時代の井戸が7基（SE53～59）と江戸時代のものが2基ある。

SE53　径3.2m、深さ1.8mの円形掘形の井戸。内法一辺85cmの方形縦板組み隅柱横桟どめの井戸枠を組む。横桟は2段分が残る。枠内から平城宮Ⅵの土器といわゆる甲斐型の土師器3点が出土した。SD51より古い。

SE54　東西1.47m、南北1.26m、深さ1.85mの隅丸方形掘形の井戸。掘形は底に向かい徐々に小さくなり、下半は径0.8mほどの円形である。井戸枠の痕跡はない。平城京Ⅲの土器が出土した。SB32より古い。

SE55　東西2.55m、南北2.4m、深さ2.0mの隅丸方形掘形の井戸。掘形の底に内径48cm、高さ43cmの曲物を据え、周囲を砂利で埋めた上に内法一辺92cmの方形縦板組み隅柱横桟どめの井戸枠を組む。隅柱は縦板の上端まで通るものと、下端から50cmほどしかないものがある。柱が通らない部分は、縦板に直接横桟をあてている。横桟は2段分が残っている。枠内から平城宮Ⅵの土器と木簡が出土した。

SE56　東西2.35m、南北2.9m、深さ2.17mの隅丸方形掘形の井戸。井戸枠は抜き取られている。平城宮Ⅳの土器が出土した。SB15より新しい。

SE57　東西2.45m、南北2.9m、深さ2.55mの長円形掘形に内法一辺1.15mの方形縦板組み隅柱横桟どめの井戸枠を組む。横桟は3段分が残る。枠内から平城宮Ⅵの土器といわゆる甲斐型の土師器5点、木簡が出土した。SB16より新しい。

SE58　東西2.5m以上、南北3.13m、深さ1.9mの隅丸方形掘形の井戸。掘形の底に幅12cm、厚さ7cmの板材を内法一辺100cmの井桁に組み、その交差部に内角を切り欠いた隅柱を枘で立てた後に、切り欠き部に横板の小口をおい回しであて込み井戸枠としている。横板の内法は107cm、四隅には断面直角三角形の棒状の補助材をあてている。横板は2段53cm分のみが残り、隅柱も横板の上段にあわせて切り取られている。

SE59　SE58と重複して検出した井戸。東西1.36m以上、南北1.9m、深さ1m以上の不整形な掘形の底に内径57cm、高さ13cmの曲物1段が残る。SE58より新しい。

SE60　径 1.95 m の円形掘形の井戸。掘形の断面は深さ 1.26 m の擂鉢状で、さらに中央部を径 0.2 m、深さ 0.45 m の円筒形に掘りくぼめている。井戸枠の痕跡はない。江戸時代の土器が少量出土した。

SE61　東西 1.7 m、南北 1.88 m、深さ 1.4 m の長方形掘形の井戸。掘形の底は擂鉢状であり、径 10 cm ほどの竹筒が打ち込まれている。内径 23 cm、高さ 4 cm の曲物と江戸時代の土器が少量出土した。

E　土　坑　いくつかの土坑を検出している。ここでは粘土採集坑もあわせて報告する。

SK62　東西 2.05 m、南北 1.8 m、深さ 20 cm、皿型の浅い土坑。平城宮Ⅲの土器が出土した。SB29 より古い。

SK63～67　SD50 にそって検出した土坑群。いずれも塵芥処理用の土坑らしく、埋土は黒灰色の軟弱な粘土。SK63～65 からは平城宮Ⅲ からⅣにかけての頃の土器が、SK67 からは平城宮Ⅲの土器が、SK66 からは平城宮Ⅳの土器が出土した。SA43・SD49・50 より新しく、SE59 より古い。

SK68～75　発掘区中央東よりで検出した土坑群。いずれもよく似た掘形で、径 1.5～2.2 m、深さ 0.9 m ほど、壁はわずかに袋状で底は平である。黄灰色粘土のブロックがまじる軟弱な暗灰色粘土で均一に埋っている。埋土にごく少量の土器片がまじるのみであるが、中に 12～13 世紀前半の瓦器椀片が数片あり、この時期の粘土採集用土坑かと考えられる。なお、SK71・74 が河川跡 SD52 に破壊されていることから、SD52 は 13 世紀後半以降の河川跡であることがわかる。

F　不明遺構　用途不明の遺構がある。

SX76　幅 40～65 cm、深さ 15 cm ほどの溝が長方形に巡るもの。溝の心々で東西 2.2 m、南北 3.8 m、溝に区画された部分は東西 1.8 m、南北 3.2 m ある。溝は南辺で 70 cm ほど途切れている。重複していくつかの小柱穴を検出しているが、確実に直接この遺構と組み合うと思われるものはない。また、溝内および溝に区画された部分から平城宮Ⅴ頃の土器が出土しているが、いずれも細片でもとの位置を保つものはない。

SX77～79　幅 0.95～1.3 m、深さ 10 cm ほどの溝状の浅い窪み。2 ケ所で途切れ 1 ケ所で後世の溝に破壊されるが全体では長さ 19.7 m 分を検出した。埋土は少量の炭のまざった黒灰色粘土で、平城宮Ⅴ頃の土器若干を含んでいる。SB16・SA44 より新しく、SD51 より古い。

（西崎卓哉）

二条々間路南側溝心	X＝－145,755.16	Y＝－16,610.30
十一・十四坪境小路心	X＝－145,767.37	Y＝－16,600.56
同　西側溝心	X＝－145,771.30	Y＝－16,604.12
同　東側溝心	X＝－145,767.37	Y＝－16,597.00

方位計測座標表

Ⅲ　出土遺物

出土した遺物の大半は土器で、他に木簡、少量の瓦、木製品、金属製品がある。以下、項目ごとに概要を記す。

1. 木　簡　ＳＥ57の掘形から２点（１）、ＳＥ55の枠内から１点（２）と削屑少々が出土した。いずれも破片で、井戸掘形や枠内に投棄されたものと考えられる。

(1)

・□〔宇カ〕□〔宇カ〕□　宇宇宇宇

・〔ホカ〕□〔ホカ〕□□　宇宇

(2)

・□□　勲一等

・　昇昇□

2. 瓦　類

５型式５種５点の軒丸瓦と、５型式６種８点９軒平瓦が出土した。型種と点数の内訳は、軒丸瓦では6225型式種別不明（１点）、6229型式Ｂ種（１点）、6235型式種別不明（１点）、6285型式Ｂ種（１点）、6301型式種別不明（１点）、軒平瓦では6667型式Ａ種（１点）、6671型式Ｂ種（１点）、6671型式Ｃ種（３点）、6681型式Ｄ種（１点）、6712型式新種（１点）、6760型式Ｂ種（１点）である。

これらのうち遺構との関係をもつものが４点あり、建物ＳＢ17柱穴掘形から軒平瓦6671型式Ｃ種が、井戸ＳＥ55枠内から軒平瓦6667型式Ａ種が、井戸ＳＥ57掘形から軒丸瓦6301型式種別不明が、土坑ＳＫ65から軒丸瓦6225型式種別不明が出土している。（中井　公）

3. 土器類

土器類は、遺物包含層、井戸、土坑、柱穴、素掘り溝から、遺物整理箱で63箱分が出土した。ここでは、ＳＥ53・57から出土した土器の器種構成と年代について触れた後、近畿地方では初例である「甲斐型坏」と判読可能な墨書土器について記述する。

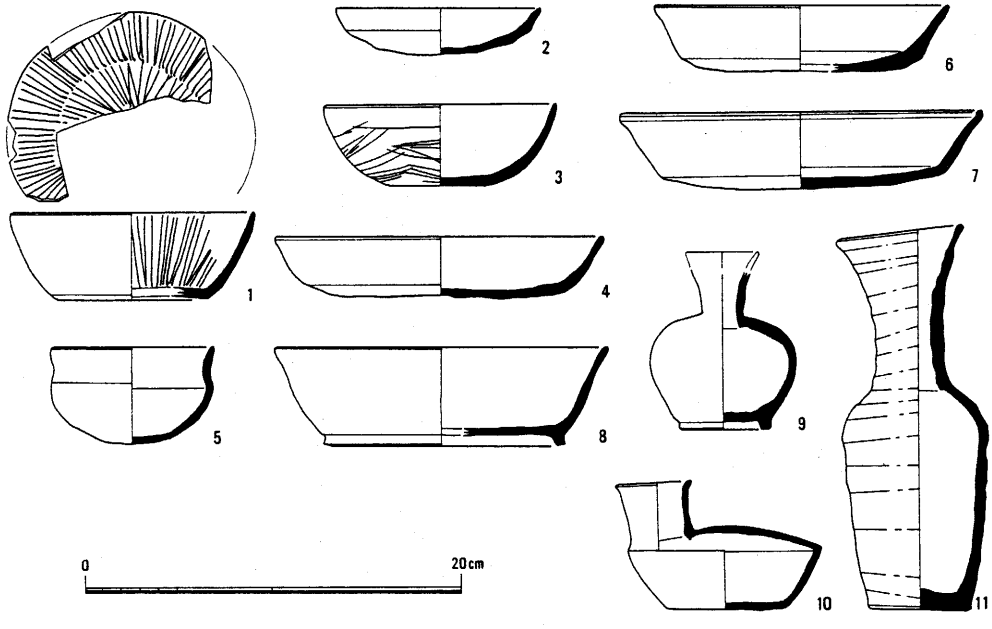
ＳＥ53出土土器　土師器には杯Ａ・Ｂ、皿Ａ・Ｃ、椀Ａ・Ｄ、壷Ｂ・Ｅ、甑、甕、「甲斐型坏」がある。須恵器には、杯Ａ・Ｂ・Ｃ、杯Ｂ蓋、杯Ｅ蓋、皿Ａ、壷Ｇ・Ｋ・Ｍ、平瓶、甕がある。土器の形態及び調整手法からみて、平城宮土器Ⅵに属する一群であろう。

ＳＥ57出土土器　土師器には、杯Ａ・Ｂ、皿Ａ、椀Ａ・Ｃ、壷Ａ、高杯、甕、「甲斐型坏」がある。須恵器杯Ａ・Ｂ、杯Ｂ蓋、皿Ｃ、壷Ａ・Ｇ、壷Ａ蓋、甕がある。ＳＥ53同様、平城宮土器Ⅵに属するものである。

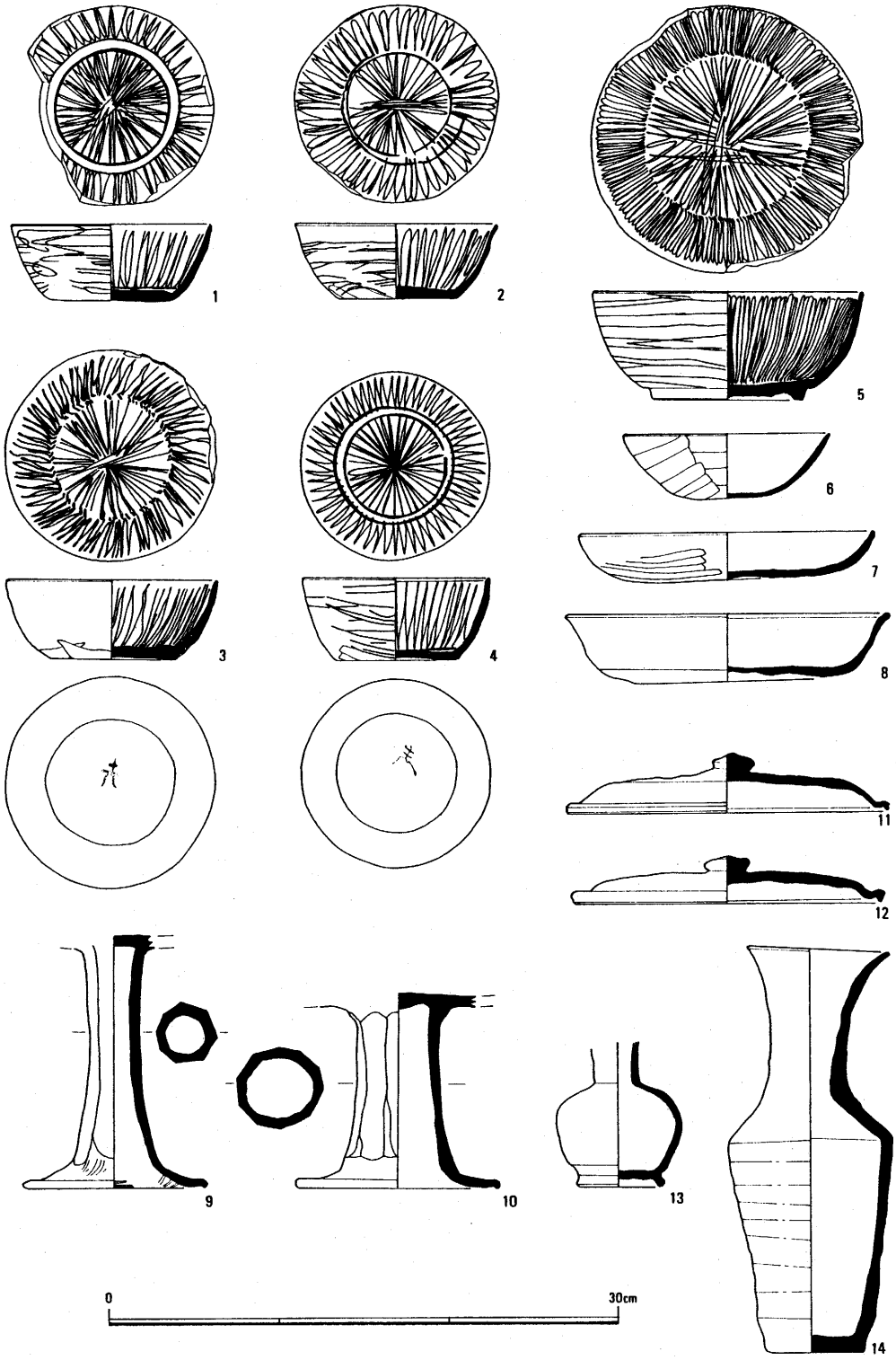
「甲斐型坏」　ＳＥ53・57から、いわゆる「甲斐型坏」と呼称されている土師器が合計８点（「甲斐型高台坏」１点を含む。）が出土した。

ＳＥ53からのものは３点あるが、磨滅が著しく図示し得たのは１点だけである。１は、底部外面から口縁部下半までをへら削りし、あとは横なでをしたのちへら磨きで仕上げている。内面は、底部と口縁部に放射状暗文を施す。口径13.0、器高4.6㎝、底径8.0㎝。

ＳＥ57出土のものは、口縁部を丸くおさめるもの（１、２、３）と端部を丸くおさめながらやや外方にひきだすもの（２）とがある。調整は、１が底部を糸切りで切り放したのちへら削りし、底部から口縁部外面にかけてへら磨きを施している。２・４は、底部外面をへら削りしている。２は底部から口縁部にかけて、４は口縁部外面のみに磨きを施している。３は底部を糸切りで切り放したのち底部から口縁部下半までをへら削りしている。外面には磨きはみられない。内面の暗文はいずれも底部と口縁部に放射状暗文を施す。１・２・４は底部から口縁部に移行する箇所に二条の横位暗文をめぐらしている。口径11.0～12.3㎝、器高4.4～4.8㎝、底部7.0～7.4㎝を測る。３・４は底部外面に「ま」と読める文字が墨書きされている。「甲斐型高台坏」（５）は、ロクロ削りにより引き出された短い高台とやや内湾ぎみにたちがある口縁部からなる。口縁部外面下半までをロクロ削り、それ以外はロクロナデ調整。口縁部外面には横方向の粗い磨きを施している。内面は先に暗文を施したのちに口縁部に放射状暗文を加える。口径16.0㎝、器高6.5㎝、底部8.8㎝を測る。



ＳＥ53出土土器　1/4



ＳＥ57出土土器　1/4

年　代　「甲斐型坏」は、甲斐地域の編年によるⅤ期から出現し、その後形態や法量変化をみせながらⅫ期まで続く器形と考えられている。[1] 年代については、意見の分かれるところであるが、8世紀第四半期からはじまり11世紀第1四半期までとされている。

今回出土した「甲斐型坏」は、Ⅴ期（8世紀第4四半期～9世紀第1四半期前半）からⅥ期（9世紀第1四半期後半）にかけての特徴をもつ一群であり、[2] 初現期のものよりも若干新しい要素をもつものとして位置づけられている。ところが、「甲斐型坏」が出土したＳＥ53・57からは平城宮土器編年によるところのⅥに相当する一括遺物が伴出している。平城宮土器Ⅵは、長岡京期に相当する一群の土器をさすもので、784～794年位の年代をあたえることができ、9世紀まで下る可能性はないと考えられる。従って今回出土のものは、8世紀第4四半期の年代を与えることができる。

山梨県内では「甲斐型坏」の初現期の年代については資料が少ないため苦慮されているが、今回平城宮から出土した一群のものが1つのメルクマールとなり、年代決定をする際に貴重な資料となるだろう。

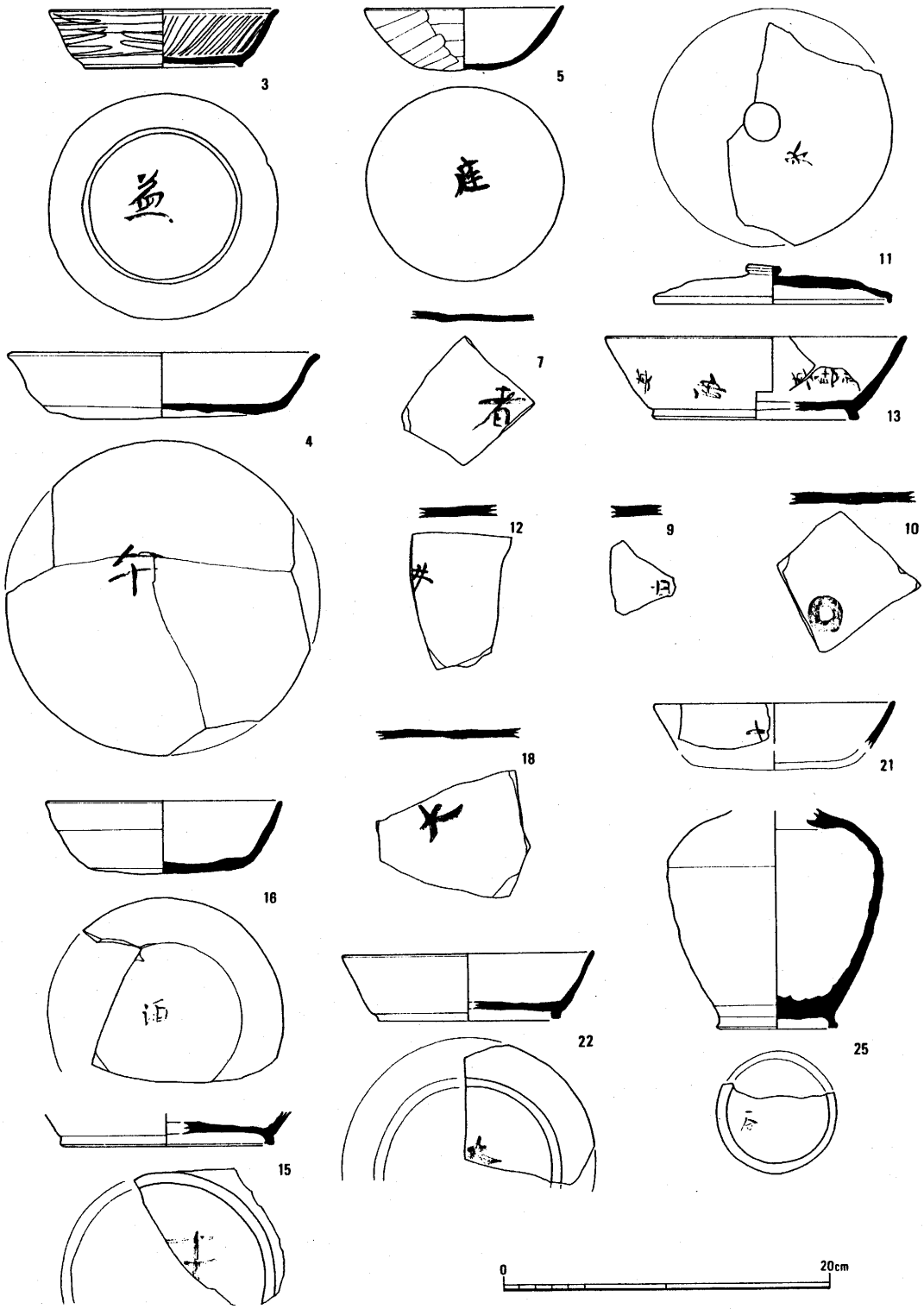
墨書土器　遺物包含層、井戸から総数25点が出土した。出土遺構、記載内容は別表に示すとおりである。　（三好美穂）

1)坂本美夫、末木健、堀内貞「シンポジウム奈良、平安時代土器の諸問題－甲斐地域」
「神奈川考古」第14号、1983

2)山梨県教育庁坂本美夫、同埋蔵文化財センター末木健両氏により御教示を賜った。

	記載内容	器種		記載位置	出土遺構		記載内容	器種		記載位置	出土遺構
1		土師器	甲斐型坏	底部外面	ＳＥ57	14	口	土師器	杯or皿	底部外面	ＳＥ55
2		〃	〃	〃	〃	15	井	須恵器	杯Ｂ	〃	ＳＫ65
3	益	〃	杯Ｂ	〃	〃	16	酒	〃	杯Ａ	〃	〃
4	午	〃	杯Ａ	〃	〃	17	口	〃	杯or蓋	〃	〃
5	庭	〃	椀Ａ	〃	〃	18	大	土師器	杯or皿	〃	〃
6	口	〃	杯or皿	〃	〃	19	大	〃	〃	〃	〃
7	者	〃	〃	〃	〃	20	口	須恵器	杯Ｂ蓋	頂部内面	〃
8	口	須恵器	杯Ａ	〃	〃	21	＋	〃	杯	口縁部外面	ＳＫ64
9	日	〃	杯or皿	〃	ＳＥ53	22	大	〃	杯Ｂ	底部外面	〃
10	○	〃	〃	〃	〃	23	口	土師器	椀Ｄ	〃	〃
11	氷	〃	杯Ｂ蓋	〃	〃	24	口	須恵器	杯or皿	底部外面	素掘り溝遺物包含層
12	井	〃	杯or皿	〃	〃	25	口合	〃	壷Ｌ	〃	
13	真口 真口口	〃	杯Ｂ	〃	〃						

墨書土器一覧



墨書土器　1/4

4. 木製品

井戸、土坑から木質遺物が出土した。整形されていない木片と、整形はされているが破片になっているものが大半であるが、なかに木器がある。

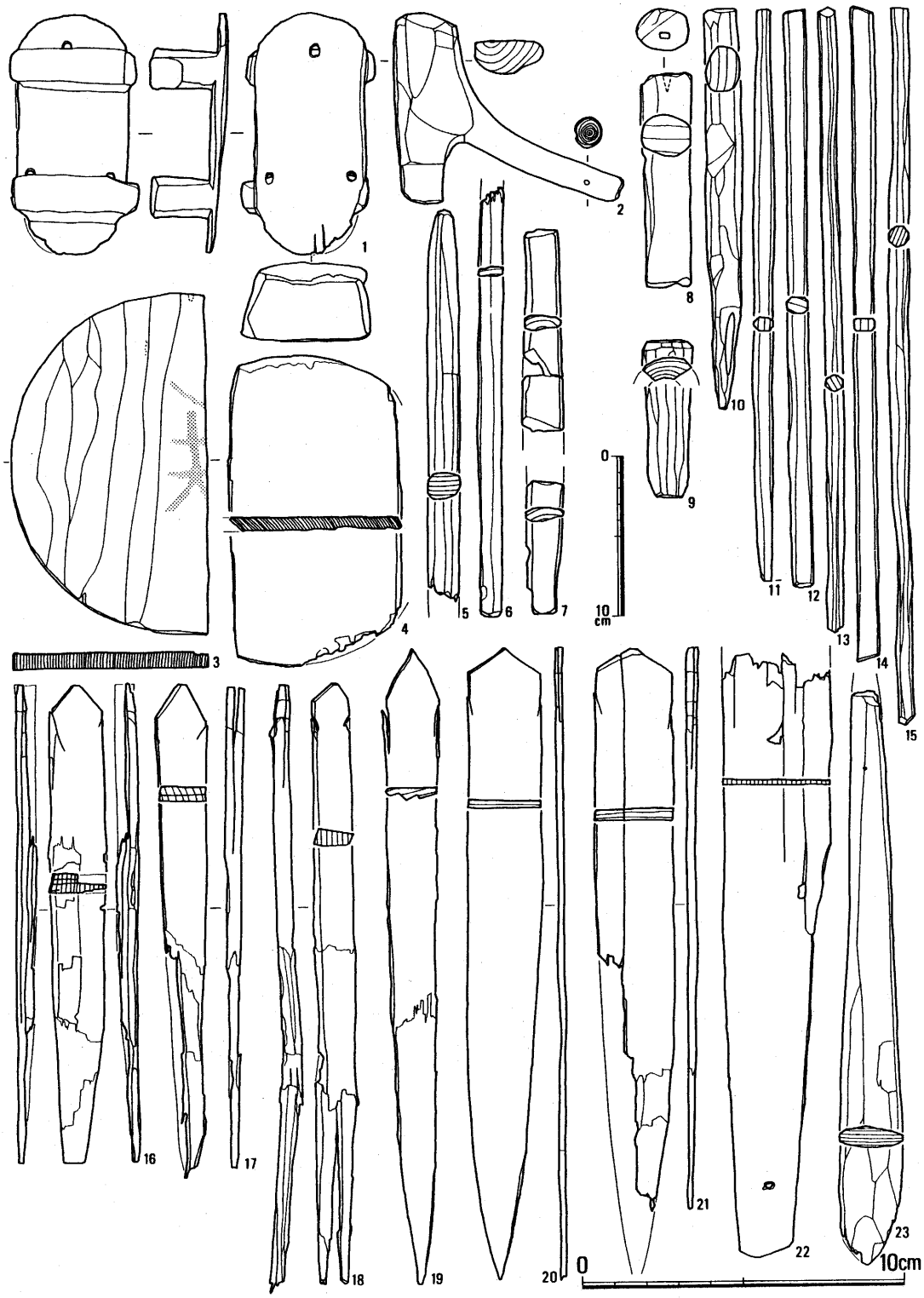
A　SE 53 出土木製品　井戸枠内から斧柄、刀子柄、匙形木器、斎串、不明品が出土した。2は木の幹と枝の股を利用した縦斧の柄。斧台は両側面があらく削られ扁平、握りは樹皮をはぐのみである。8は断面隅丸長方形の刀子柄。柄元は切断され残っていないが、切断面にわずかに茎孔が残る。23は匙形木器。身と柄の区別が明瞭でなく、身にあたる部分がわずかに片刃ぎみに削られている。17・18は斎串。17は幅1.6㎝、厚さ0.5㎝、18は幅1.2㎝、厚さ0.6㎝と両例とも厚手で、上端木口に割目がある。いずれも側面の上端近く左右各一個所に切り込みがある。8は不明品。細板を扁平な丸棒状に削ったもので、両端を欠く。

B　SE 54 出土木製品　斎串1点が出土した。18は両面とも割りさき面のままで、ことに片面にはさきそこねた部分が残っている。上端木口と片側面にさらに薄く割りさくために入れたと思われる筋状の浅い切り込みがある。下端は剣先状に削られるが、先端は尖っておらず直截されている。側面の上端近く左右各一個所に切り込みがある。製作途中の未完成品か、製作に失敗し投棄されたのではないかと思われる。

C　SE 55 出土木製品　井戸枠内から下駄が出土した。連歯下駄で台の長さ15.2㎝、幅7㎝と小型である。台は前後端とも孤形にするが、後端がわずかに狭い。前壷は中央に後壷は歯の中央にあける。足痕はない。歯は鋸で挽き出され台形で、後歯後端がわずかにつぶれている。

D　SE 56 出土木製品　この井戸は枠が抜き取られており、枠内にあった遺物と掘形のものとの区別がつかない。曲物底板、斎串、不明品が出土した。12は円形曲物の底板。側縁に一個所釘穴がある。左右の側辺を欠いている。19は斎串。片面は割りさいたままである。10は不明品。棒状の材の一端をやや尖りぎみに削る。他端は欠損。

E　SE 57 出土木製品　井戸枠内から曲物底板、箸、斎串、不明品が、掘形から桧扇が出土した。3は円形曲物の底板。側縁の三個所に釘穴がある。一面は漆を薄くハクか柿渋を塗ったような黒色を呈し、中央が記号状にわずかにくぼみ黒変する。文字かとも思われるが判読はできない。焼印か焼火箸のようなもので刻された可能性がある。11～15は箸。長さ17.8～22.4㎝。削りはあらく、とくに使用の痕跡はない。完形品のみを示したが、他に破片が何点かある。20・21は斎串。17・18と同じように、上端木口に割目がある。9は不明品。縦方向に割れており、三分の一を残すのみ。短い棒状の材の表面と木口をていねいに削り、一端は木口周辺の面をとっている。心には縦方向の円孔をあけるが、貫通していたかどうかは確認できない。22は桧扇。上半を欠く破片1点のみが出土した。本は方頭形を呈し、骨の中程から本にかけて一側辺を削り幅を狭める。



出土木製品 1～7　1/4　8～23　1/2

F　SE59 出土木製品　井戸枠内から刀子柄が出土した。10は断面楕円形にていねいに削られ、茎孔が残る。柄元の部分は、後に刀身を抜き取るためにか、あらく削りとらえてしまっている。

（西崎卓哉）

5.　金属製品

鉄刀子、鉄斧、鉄釘、不明鉄製品、銅製帯金具のほか鉄滓が出土した。

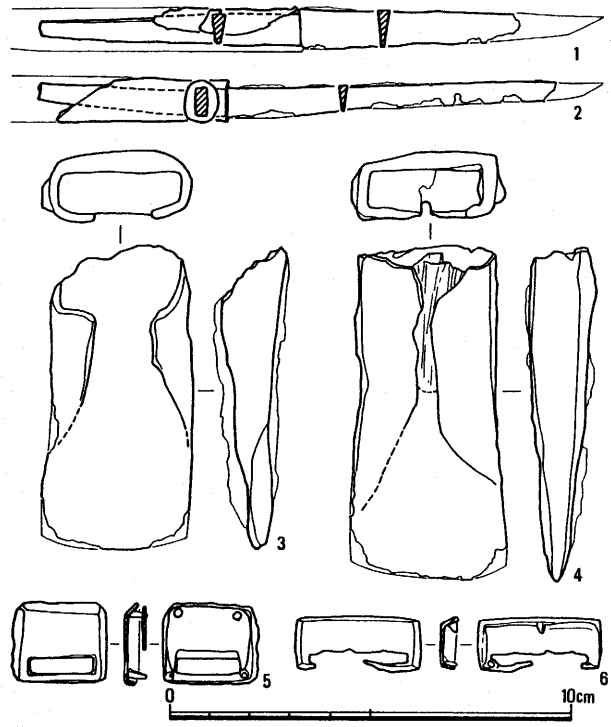
鉄刀子（1・2）　いずれも両面平造り。刃元の身幅は1が1.0㎝、2が0.8㎝である。ともに銹化が進み、鋒部、把尻が欠失しているが、茎に木質を残しており、木把の刀子であることがわかる。2の木把表面には黒漆の痕跡がある。1・2ともSE53から出土した。

鉄　斧（3・4）　いずれも小型品で、手斧かと思われる。斧頭のみ残存。ともに銹化が進んではいるが、鉄板を折り曲げて袋部をつくった鍛造品かと思われる。3は長さ7.6㎝、刃幅3.7㎝、袋部の内寸は3.1×0.7㎝。SX78から出土した。4は長さ8.3㎝、刃幅3.8㎝、袋部の内寸は2.8×0.9㎝。袋部には着装した木柄の一部が残っている。土坑から出土した。

銅製帯金具（5・6）　ともに巡方であり、長方形孔がある。5は表金具と裏金具がある。表金具裏面の四隅には鋳出した鋲足があり、裏金具にも長方形孔がある。縦幅2.0㎝、横幅2.3㎝、SA43がとりつく門遺構かと考えた柱穴から出土した。6は表金具のみ残存しており、裏面の下辺二隅と上辺中央の3箇所に鋳出した鋲足がある。縦幅1.3㎝、横幅3.1㎝と細長い。通常の巡方より縦幅が狭く帯幅に満たないと思われることと、三方に鋲足があることは、むしろ丸鞆との類似点である。SX76から出土した。

そのほか鉄釘4点が遺物包含層と素掘溝から出土し、不明鉄製品と鉄滓は遺物包含層から出土した。いずれも銹化が著しい。

（森下浩行）



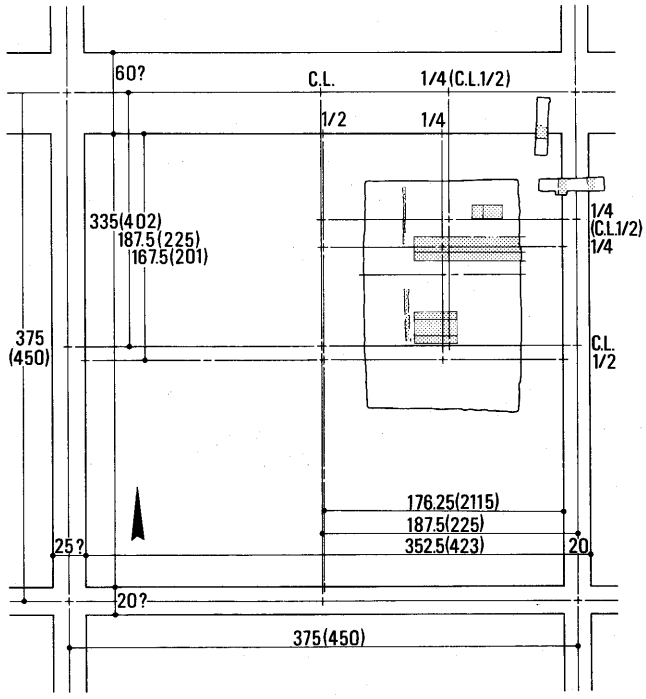
出土金属製品　1/2

Ⅳ まとめ

1. 占 地

平城京の条坊の中で調査区が占める位置を検討しておこう。調査地が左京二条四坊十一坪跡に相当することは遺存地割などから明らかであった。この坪の周囲を画する条坊道路のうち十一・十四坪境小路は今回の調査で位置と幅員を確認し、路心が確定した。ところが二条々間路は南側溝を検出したのみで、幅員の確認までには至らなかった。左京二条々間路の調査例は平城宮東院の南面2個所にあるが[1]、この例も2個所の発掘区で検出されている溝が正確な対応関係にないことと、幾条かの溝が重複して検出されていることから現状では道路幅員は決し難い。さらに他の二辺を画する道路については全く調査例がない。

そこで、ここでは二条々間路の幅員は右京二条三坊での調査例[2]をもとに仮りに60大尺とし、六・十一坪間の四坊々間路の幅員を左京四条四坊での調査例[3]と同じく25大尺（30小尺）と推定した。また十一・十二坪境小路は、今回検出した十一・十四坪境小路同様幅員20大尺であると考えた。以上の道路を、十一・十四坪境小路心と二条々間路南側溝心を基準に道路心々375大尺（450小尺）に配したのが右下図である。この図により、今回の調査区が十一坪の西半部中央やや北寄りにあることがわかる。なお、復元にあたっては1大尺＝35.52㎝、1小尺＝29.6㎝を基準尺とし、道路はすべて北で西へ15′41″ふれていると仮定した。C.L.は道路心々間（条坊計画線間）の中央線を、1/2は坪に面する道路側溝の心々間の中央線を示し、建物は第Ⅱ期のものを配した。



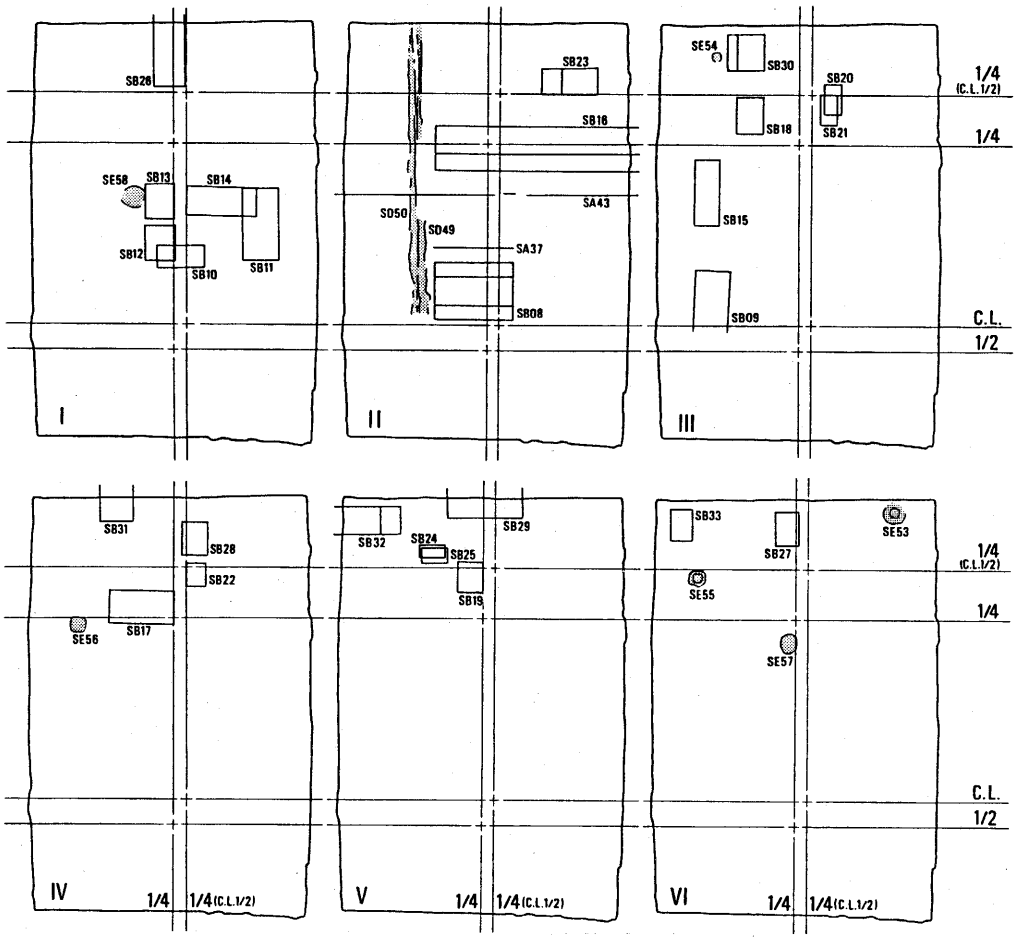
十一坪占地概念図

2. 建物の配置と変遷

出土遺物により時期がわかる遺構を基本に、重複関係と位置関係を勘案し6期に区分した。

Ⅰ期 SB12・14がSB10・11・13に建てかえられる。発掘区中央部の利用がめだつ。

Ⅱ期 最も大規模な建物群が配される。位置関係と規模からみれば、SB08は中心建物、S



遺構変遷図

A43に画された以北の地区は付属的な施設を配しているとも考えられる。重複関係からSD49とSA43が併存する期間と、SA43が取り除かれSD50のみの期間があることがわかる。SB08と16は西妻柱筋をそろえている。SB16の棟柱筋は二条々間路南側溝心からほぼ100尺あるいは側溝心々間距離の四等分（100.5尺）線上に、SA43は同溝心から125尺、SD49は小路西側溝心から140尺、ほぼ東西の側溝心と間距離の3分の1（141尺）の位置にある。また、SB16の桁行西から7間目は柱間10尺とやや広く、これを桁行中央間とみれば、その心は小路西側溝から80尺にある。しかし、SB08の配置計画が明らかでないなど全体の建物配置にはきわだった計画性はみられない。大型建物であるにもかかわらず柱掘形がルーズであることともあわせて、この建物群の性格の一端を示しているのかもしれない。南半の状況が未確認ではあるが、この時期は坪の東半分2分の1町で、南に主屋、北には付属屋を置く南面する建物配置が完結する可能性が高いと思われる。

Ⅲ期　坪内の様相が一変、建物が小型になり発掘区北半と西辺に利用の中心が移る。こ

の時期の柱穴や井戸から平城宮土器Ⅲに属する土器が出土したことから、奈良時代中頃の遺構群かと考えられる。とすれば、重複関係からⅠ・Ⅱ期はそれ以前の遺構群かと考えられるが、発掘区全体に奈良時代前半の遺物がほとんど出土していないことに疑問が残る。

Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ期　引き続き小型の建物群が発掘区北半に集中して建てられる。それぞれ平城宮土器Ⅳ・Ⅴ・Ⅵが出土することから、奈良時代後半から平安時代初頭にかけての遺構と考えられる。建物は発掘区北半地区に集中する。SD 52 の上限は確認できないが、奈良時代まで遡り、この時期坪の南半が使用できない状態であった可能性も考えにいれておかねばならない。

以上の結果、時期区分Ⅱ期とその他の時期では坪内の建物規模やその配置に大きな差があり、また、Ⅱ期以前と以後では建物が集中的に営まれる地区がちがうこともわかった。瓦がほとんど出土しないことや、他の出土遺物の内容からみても、この坪は奈良時代をつうじて通常の宅地として利用されたと考えられるが、こうした建物配置の変遷が具体的にどのような事実を反映しているのかを明らかにするまでには至らなかった。（西崎卓哉）

1）奈良国立文化財研究所「第39次調査　東面南門推定地東側」『奈良国立文化財研究所年報 1967』1968
　　同　「第44次調査」『奈良国立文化財研究年報 1968』1969
2）　同　「Ⅴ・7右京二条三坊十一・十五坪の調査（第123－17次）」『昭和55年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1981
3）　同　『平城京左京四条四坊九坪発掘調査報告』1983

7. 平城京左京八条二坊一坪の調査　第175次

この調査は奈良市が計画した杏中共同浴場建設に関わる事前発掘調査である。調査地は奈良市杏町 386－1、京の条坊では左京八条二坊一坪の西南角にあたる。本調査地の南に隣接する杏中隣保館建設前の昭和56年に実施した発掘調査[1)]（第13次調査）では、調査地が水田化以前には滞水した低湿地であったとの結果を得ており、本調査地での状況が注目された。調査期間は平成元年4月12日～4月21日、敷地面積 643 ㎡のうち建物予定位置（建物面積 140.4 ㎡）で東西7 m、南北10 m、面積70 ㎡の範囲を発掘した。

発掘区内の層序は第13次調査時と同様で、厚さ50 cmほどの造成土の下に旧水田耕土、灰色系の粘土層と砂層があり、旧水田面下約60 cmで灰色粘土層に達する。第13次調査では、この灰色粘土層上面で若干の遺構を検出しているが、今回は何らの遺構も検出することができなかった。灰色粘土層は軟弱で、灰色砂がまざる部分があり、旧水田面下1 mまで続くことを確認した。以上の結果、本調査地も水田化以前は軟弱な低湿地であったことが推測できる。（西崎卓哉）

1）奈良市教育委員会『昭和56年度　奈良市埋蔵文化財調査報告書』1982年

8. 平城京左京九条四坊二・七坪の調査　第181次

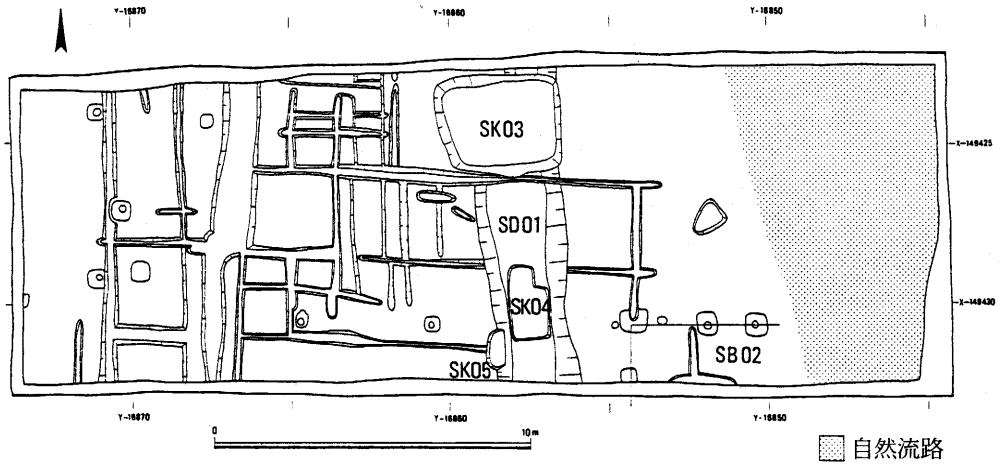
Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市東九条町字大永井333－1他における三律不動産㈱届出の看護婦寮新築工事に伴う事前の発掘調査である。調査地は、平城京条坊復元によると、左京九条四坊二・七坪にまたがっており、二坪は穂積寺旧境内東半部に相当している。

今回の調査は、二・七坪の坪境小路の検出、穂積寺旧境内東半部及び七坪の様相を把握することを主眼におき、東西30m、南北10mの発掘区を設定しおこなった。調査期間は平成元年8月11日から8月25日までである。

Ⅱ　検出遺構

発掘区内の堆積土層は、耕土、床土（30cm）の下、明茶灰色砂質土（10cm）、暗黄褐色土（10cm）と続き、地表面から約50cmで暗茶灰色細砂の奈良時代の遺構面に至る。遺構面直上の標高は、西端で57.6m、東端で57.7mを測る。検出した遺構には、掘立柱建物1棟、素掘り溝1条、土坑3があり、この他発掘区東端部で自然流路を確認した。SD01は二・七坪の坪境小路西側溝である。幅1.6～2.6m、検出面からの深さ約50cmを測る。溝内埋土は、暗橙褐色、暗灰色粗砂の上・下2層に大別できる。奈良時代の土器片が若干含まれていた。SB02は、建物の北西隅部分だけを検出した。東側は自然流路で壊されている。SK03は、東西4m、南北3mの平面長方形の土坑である。重複関係からSD02よりも新しいことが判る。埋土からは丸・平瓦が、遺物整理箱で5箱分出土した。SK04はSD01の底部で検出した土坑。出土遺物がないため時期は不明。SK05はSD01の西肩部で検出した土坑。古墳時代の土師器がまとまって出土した。　（三好美穂）



検出遺構平面図

Ⅲ　出土遺物

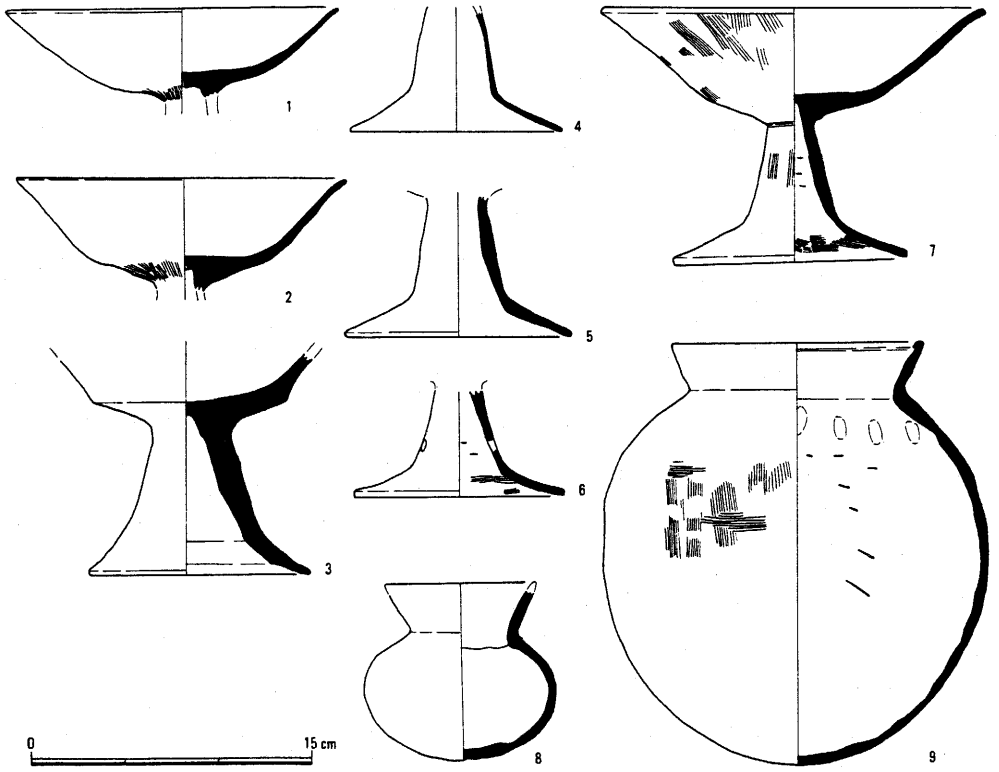
出土遺物には、古墳時代の土師器・須恵器、奈良時代の土師器・須恵器・瓦がある。そのうち、古墳時代のSK05出土土師器について記す。なお、全体的に器壁の剥落が著しく、調整不明のものが多い。

高杯（１～７）　口径 17.6～20.4 ㎝、器高は７が 13.4 ㎝。３を除いて、体部からゆるやかに外方へのびる口縁がつく。口縁端部ではやや外反する。脚部は円錘状を呈し、裾部はゆるやかに大きく開く。６には円形の透かし孔がみられる。３は他と比べて全体に厚手であり、体部と口縁部との境の外面には稜線がみられる。脚部は円錘状であるが、裾部はあまり開かない。

小形丸底壺（８）　口径約 8.0 ㎝、器高約 9.5 ㎝。球形の体部に短い外傾した口縁がつく。口縁端部を欠く。体部最大径 10.3 ㎝。

甕（９）　口径 13.3 ㎝、器高 22.2 ㎝。球形の体部に短いやや内彎した口縁がつく。口縁端部は内側に肥厚。体部最大径 20.4 ㎝。体部内面はケズリ、外面はハケ目がみられる。肩部内面には指圧痕が残存する。

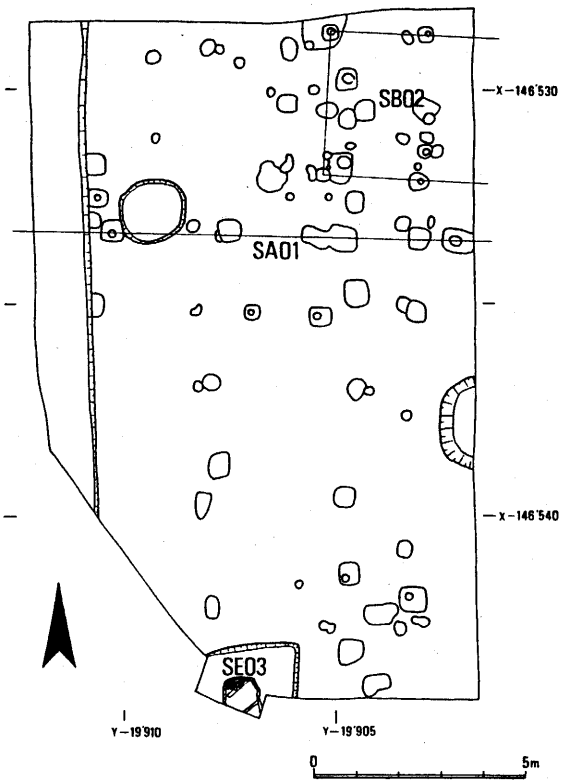
SK05出土土器は、布留式の新しい様相を示すと考えられる。　（森下浩行）



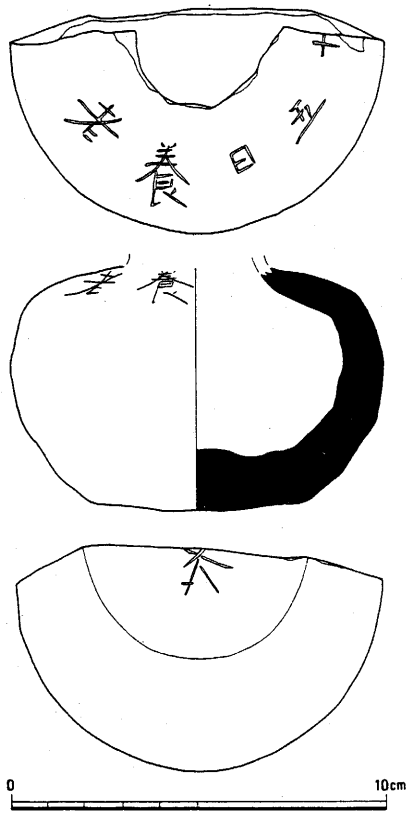
SK05出土土器　1/4

9. 平城京右京三条三坊五坪の調査　第183次

奈良市宝来町93番地の1における共同住宅建設に伴う事前調査である。調査地は五坪の西南隅で、南北16m、東西10mの発掘区を設定した。調査期間は、平成元年9月22日から10月4日までである。発掘区の層序は、耕土、黄灰色粘質土、黄褐色粘質土であり、黄褐色粘質土上面で遺構を検出した。検出した遺構は、奈良時代の掘立柱建物1棟、塀1条、井戸1基などである。建物SB02は、桁行2間以上、梁間2間の東西棟。塀SA01は、4間以上の東西塀、井戸SE03は、方形縦板組みの井戸側をもつものである。この他、発掘区南寄りで柱穴を検出しているが、建物としてまとまるものはない。出土遺物は、井戸SE03から、奈良時代末の土器類が少量出土している。なお、昭和61年、本調査地の北約25mの地点で行った試掘調査では、円形素掘りの井戸を検出しており、埋土から、肩部に、「養老〔〕十五日」、底部に「本」の線刻銘のある須恵器壷が出土している。胎土、焼成から、美濃産の須恵器と考えられるもので、今回、併せて報告しておく。　（森下恵介）



検出遺構平面図　1/200

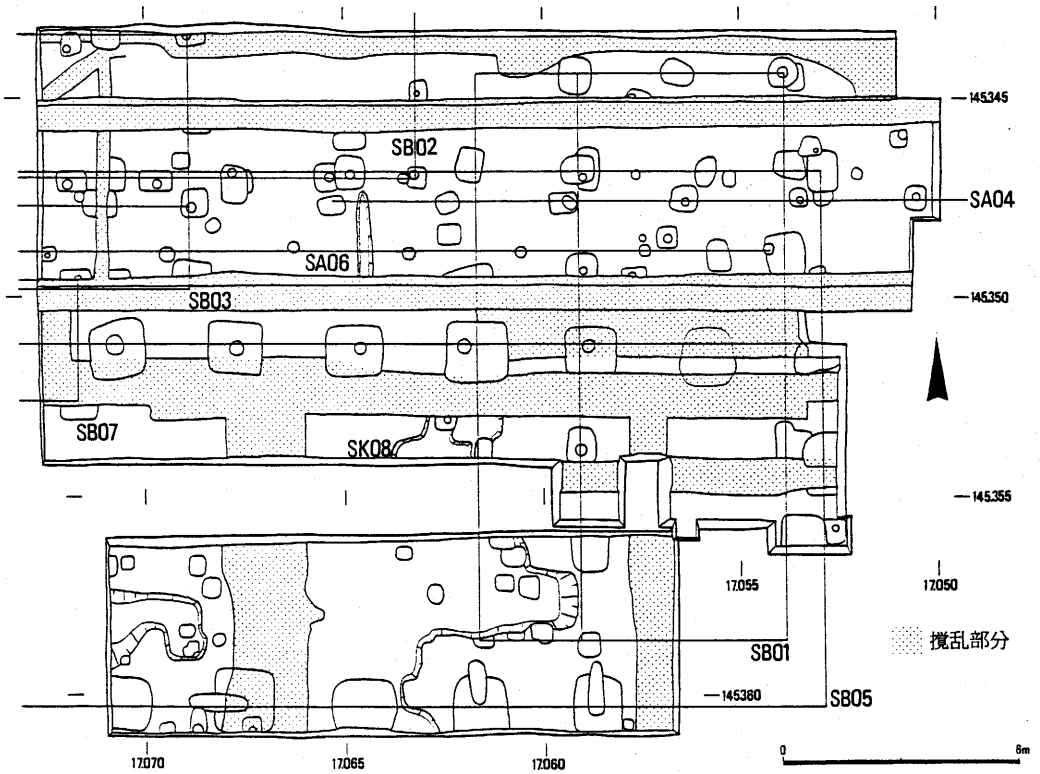


試掘出土線刻須恵器　1/2

10. 平城京左京一条三坊十三•十四坪の調査　第185次

はじめに　本調査は、奈良市法華寺町1351番地において実施した奈良市立一条高校セミナーハウス新築にともなう事前調査である。一条高校校地は、平城京条坊復元では、左京一条三坊のうち十三・十四坪の全域と、十一・十二坪の一部を占めている。今回の調査地は、このうちの十三坪の北辺部中央、十四坪との坪境小路の想定されている位置にあたる。一条高校内では、これまで3回の発掘調査を実施している。このうち、昭和59年度には今回の調査区に接したすぐ南で、トレーニングセンター建設にともなう調査を実施しており、十三坪の東西中軸線上にあたり、十三・十四坪の坪境小路が想定される位置で、柱間10尺等間の大型の東西棟建物を検出している。今回の発掘区設定にあたっては、この建物の北側部分と十三・十四坪坪境小路想定位置を含める形で設定し、調査を開始した。発掘区の面積は、250㎡。調査期間は、平成元年10月17日から11月8日までである。

検出遺構　発掘区は、旧木造校舎跡地にあたり、また、現運動場整備工事のため遺構面はかなりの削平を受けており、部分では完全に破壊されていた。このため、校庭の造成土

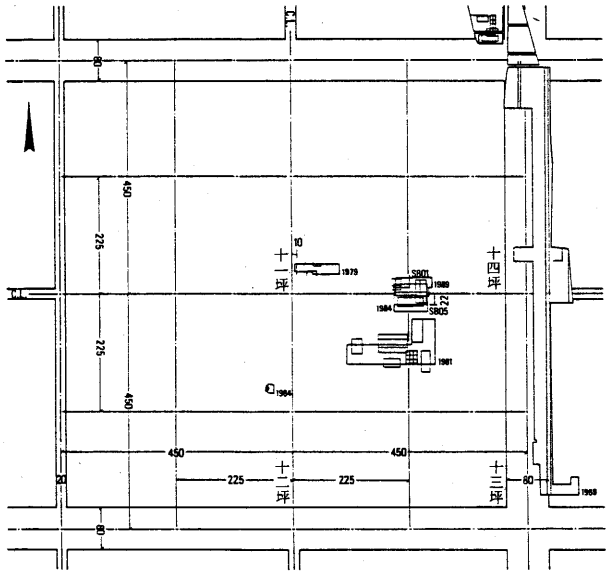


検出遺構平面図　1/200

下ただちに地山の黄褐色粘土となり、遺構はこの地山面で検出した。検出した遺構は、掘立柱建物５棟、柱列２条、土坑１である。重複関係から少なくとも４時期の変遷が窺える。

建物ＳＢ01は、昭和59年度調査区から延びる桁行６間、梁間３間の西庇付南北棟建物で、柱間寸法は、桁行2.4m等間であり、梁間は東から2.7－2.4mで、庇部分は2.7mとなる。建物ＳＢ02は、発掘区北西で検出した桁行５間以上、梁行２間以上の南北棟建物で、柱間は、桁行・梁行ともに2.1m等間である。建物ＳＢ03は、ＳＢ02に重複する位置で検出した桁行２間以上、梁間３間の南庇付東西棟建物である。柱間寸法は、桁行・梁間ともに2.1ｍである。このＳＢ03西側に身舎南側柱列と柱筋を揃え、東西方向に並ぶ柱列ＳＡ04がある。柱間10尺で５間分を確認している。ＳＢ03に付随する塀であろう。いずれの柱穴内にも塼が置かれ、柱の礎板とされている。建物ＳＢ05は、発掘区の約３分の２を占める大型の北庇付東西棟建物で、桁行７間以上、梁間４間以上を確認している。柱間寸法は、身舎部分が桁行・梁間ともに10尺等間、庇の出が14尺となる。このＳＢ05は、昭和59年度調査区で検出した建物の北側部分となるもので、当初妻部分と考えていた柱穴より、さらに２間分東に延びるものであることが明らかとなった。柱列ＳＡ06は、ＳＢ05身舎部分と庇部分の柱穴間の２分の１の位置に10尺等間で並ぶ東西方向の柱列であり、庇部分の床束の柱となる可能性も考えられるが、詳らかではない。建物ＳＢ07は建物東側柱のみを検出した。土坑ＳＫ08は、昭和59年度調査区で検出された土坑に続くと考えられるもの。

まとめ　以上の調査結果と、過去の周辺の調査結果とを併せ、当十三坪・十四坪の平城京の条坊計画における位置を検討してみる。坪の東を限る東三坊大路の東側溝の調査成果によって、条坊計画上の位置が明らかとなっていることから、これを用いて条坊計画線を復元すると、建物ＳＢ01および、ＳＢ05は、十三坪・十四坪坪境計画線上に位置し、かつ、坪の東西中軸線上にあることがわかる。また、今回の発掘区のなかでも、坪境施設を確認できなかったことからも、十三・十四坪においては一括した土地利用が計られていた可能性が強まったということが言えよう。（立石堅志）



調査地周辺条坊概念図

11. 平城京左京三条二坊十六坪の調査　第187次

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市二条大路南一丁目１－１で実施した、奈良市庁舎増築に伴う事前発掘調査である。調査地は平城京左京三条二坊十六坪と十五・十六坪々境小路に相当する。1973・74年には、現在の奈良市庁舎建設に先立ち、奈良国立文化財研究所によって発掘調査が実施されており、その結果、十五坪が１町四方を敷地とした邸宅であったことがわかっている（町田章編『平城京左京三条二坊』奈良国立文化財研究所、1975年）。今回の調査は、前回の調査で明確にしえなかった十五・十六坪々境小路の検出を主目的として実施した。調査面積は1,020㎡、調査期間は平成元年10月25日～平成２年２月９日である。

Ⅱ　検出遺構

発掘区内の土層堆積状態をみると、市庁舎建設・旧三笠中学校建設に際して約２ｍの盛土がなされている。そして、その下に砂層、暗灰色土層（包含層）がつづき、灰色粘土（一部灰色砂）の遺構面（地山）に至る。全体的に遺構面はかなりの削平を受けていると思われ、以下に述べる遺構はすべて地山上で検出した。

検出した主な遺構には、条坊制施行前の自然流路、奈良時代の掘立柱建物、掘立柱塀、溝、中世の採土坑（土取穴）、時期不明の素掘溝がある。

ＳＤ01　条坊制施行前の自然流路。幅3.2ｍ、深さ32㎝。奈良国立文化財研究所調査のＳＤ880と同一と考えられる。埋土は灰色砂。

ＳＦ02　発掘区南端で検出した東西道路で、十五・十六坪々境小路に相当すると思われる。ＳＤ03溝心から南へ幅約４ｍ分検出した。

ＳＤ03　発掘区南寄りで検出した東西方向の素掘溝。十五・十六坪々境小路の北側溝に相当すると思われる。幅1.96ｍ、深さ約45㎝。溝心の座標はＸ＝－146,145.97ｍ、Ｙ＝－17,594.40ｍである。

ＳＸ04　発掘区南西隅で検出した南北方向の素掘溝。北端でＳＤ03と接する。ＳＦ02路面上を横切る暗渠と思われる。復原幅約45㎝、深さ32㎝。

ＳＤ05　発掘区中央で検出した東西方向の素掘溝。発掘区東寄りで、ＳＤ12と接する。ＳＤ03とＳＤ05との間には築地塀が想定され、ＳＤ05はその雨落ち溝と考えられる。幅90～150㎝、深さは最も深いところで70㎝。

ＳＢ06　発掘区東端で、ＳＤ03沿いに検出した東西掘立柱列。検出位置から築地塀に開く門と推定できる。桁行２間。柱間は3.0ｍ等間。埋土の状況から、同位置での建て替えが１回以上みられる。門心の座標はＸ＝－146,143.92ｍ、Ｙ＝－17,594.40ｍである。九

・十六坪坪境小路心から約60ｍの位置にあり、十六坪の南辺のほぼ中心と考えられる。

ＳＤ07　ＳＢ06の北で検出した東西溝。埋土の状態から２回以上の修築がみられる。長さ7.74ｍ。幅は古い順に１.３ｍ、1.0ｍ、0.4ｍ。深さは古い順に55㎝、35㎝、25㎝。遺構面がかなりの削平を受けていると考えられることから、溝の西端は、あるいはＳＤ05と接していたかもしれない。

ＳＤ08　発掘区東端で検出した南北素掘溝。幅45㎝、深さ21㎝。発掘区外北にのびる。

ＳＡ09　ＳＤ08に沿って検出した南北掘立柱塀。発掘区外北にのびる。２間以上。柱間は南から４.３ｍ、４.０ｍ。重複関係からＳＤ08より古いことがわかる。

ＳＡ10　ＳＤ08、ＳＡ09に沿って検出した南北掘立柱塀。発掘区外北にのびる。南端は撹乱によって不明。２間以上と思われる。柱間３.６ｍ。重複関係からＳＡ09より古いことがわかる。

ＳＫ11　発掘区東端で検出した不整円形土坑。最大径２.５ｍ、深さ65㎝。重複関係からＳＡ09・10より新しいことがわかる。

ＳＤ12　発掘区東寄りで検出した南北溝。発掘区外北にのびる。埋土の状態から２回以上の修築がみられる。復原幅は古い順に85㎝、122㎝、52㎝。深さは古い順に34㎝、22㎝、19㎝。南端でＳＤ05と接する。

ＳＡ13　ＳＤ12に沿って検出した南北掘立柱塀。発掘区外北にのびる。１間以上。柱間は２.７ｍ。

ＳＡ14　ＳＤ12、ＳＡ13に沿って検出した南北掘立柱塀。発掘区外北にのびる。２間以上。柱間は２.１ｍ。

ＳＢ15　発掘区東寄りで検出した南北棟の掘立柱建物。発掘区外北にのびる。梁行２間、桁行３間以上。柱間は梁行２.５ｍ等間、桁行２.５ｍ等間。床束がみられる。

ＳＥ16　発掘区北端で検出した素掘り井戸。平面は円形。直径３.０ｍ、深さ2.15ｍ。

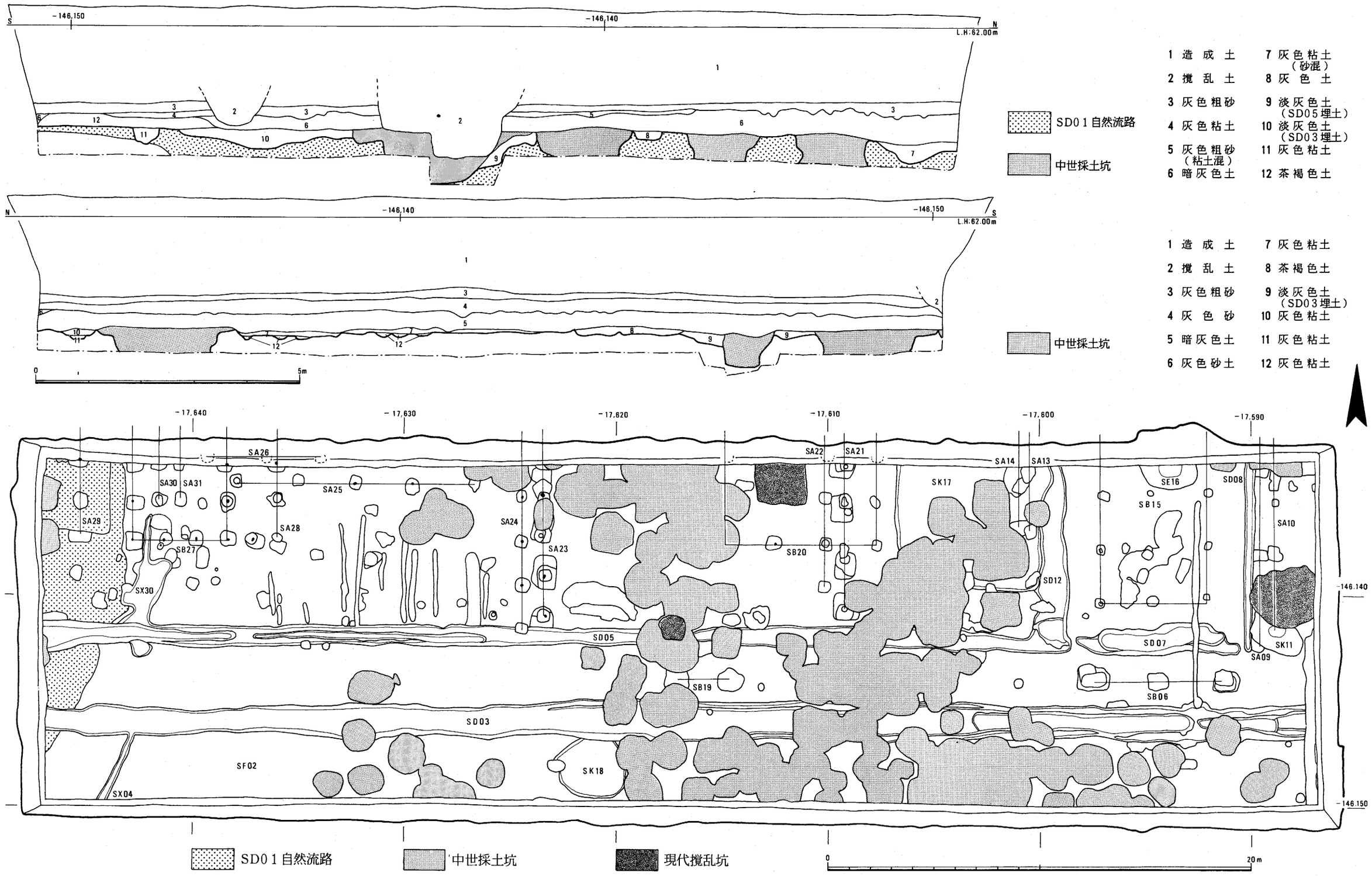
ＳＫ17　発掘区東寄り北端で検出した平面方形土坑。東西６.８ｍ、南北６.２ｍ以上。重複関係からみて、採土坑より古く、ＳＡ13・14、ＳＤ12より新しいことがわかる。

ＳＫ18　発掘区中央南端で検出した平面不整円形土坑。最大径３.１ｍ。重複関係からみてＳＤ03より古い。

ＳＢ19　発掘区中央で検出した東西掘立柱列。検出位置から築地塀に開く門と考えられる。桁行１間。柱間は２.４ｍ。

ＳＢ20　発掘区中央北端で検出した掘立柱建物。発掘区外北にのびる。東西３間。南北３間以上。柱間は南北２.１ｍ等間、東西２.４ｍ等間。

ＳＡ21　発掘区ほぼ中央で検出した南北掘立柱塀。発掘区外北にのびる。３間以上。埋土の状態からみて１回以上の建て替えがある。柱間は南から2.35ｍ、2.92ｍ（新）、2.15


S
N
-146,150
-146,140
L.H:62.00m
SD01自然流路
中世採土坑
1 造成土
2 攪乱土
3 灰色粗砂
4 灰色粘土
5 灰色粗砂（粘土混）
6 暗灰色土
7 灰色粘土（砂混）
8 灰色土
9 淡灰色土（SD05埋土）
10 淡灰色土（SD03埋土）
11 灰色粘土
12 茶褐色土
1 造成土
2 攪乱土
3 灰色粗砂
4 灰色砂
5 暗灰色土
6 灰色砂土
7 灰色粘土
8 茶褐色土
9 淡灰色土（SD03埋土）
10 灰色粘土
11 灰色粘土
12 灰色粘土
0
5m
-17,640
-17,630
-17,620
-17,610
-17,600
-17,590
-146.140
-146.150
SA26
SA25
SA24
SA23
SA22
SA21
SA14
SA13
SA30
SA31
SA29
SA28
SB27
SX30
SB20
SK17
SE16
SB15
SD08
SA10
SD12
SD05
SD07
SK11
SA09
SB19
SB06
SD03
SF02
SK18
SX04
SD01自然流路
中世採土坑
現代攪乱坑
0
20m

検出遺構平面図・土層図

m、2.35 m、2.08 m（古）である。

SA22　SA21に沿って検出した南北掘立柱塀。発掘区外北にのびる。3間以上。柱間は2.1 m等間。重複関係からSA21より新しい。

SA23　発掘区ほぼ中央で検出した南北掘立柱塀。発掘区外北にのびる。3間以上。埋土の状態からみて、1回以上の建て替えがある。柱間は1.9 m等間（新）。

SA24　SA23に沿って検出した南北掘立柱塀。発掘区外北にのびる。3間以上。柱間は2.1 m等間。重複関係からみてSD05より新しい。

SA25　発掘区北端で検出した東西掘立柱列。4間。柱間は西から、3.0 m、2.7 m、2.7 m、3.0 m。桁行4間の東西棟建物の可能性もある。

SA26　発掘区北壁で検出した東西掘立柱列。2間。柱間は2.7 m等間。梁間2間の南北棟建物の可能性もある。

SB27　発掘区北西隅で検出した南北棟掘立柱建物。発掘区外北にのびる。梁間3間、桁行3間以上。柱間は梁行が1.5 m等間、桁行が1.8 m等間。

SA28　SB27の東で検出した南北掘立柱塀。発掘区外北にのびる。2間以上。柱間は1.8 m等間。SB27の東庇となる可能性もある。

SA29　SB27の西で検出した南北掘立柱塀。発掘区外北にのびる。2間以上。柱間は1.8 m等間。SB27の西庇となる可能性もある。

SX30　発掘区西寄りで検出した南北溝状遺構。南端でSD05と接する。SD05に流れ出る宅地内排水溝と思われる。

SA31　発掘区北西隅で検出した南北掘立柱塀。発掘区外北にのびる。1間以上。柱間は1.8 m。

SA32　SA31に沿って検出した南北掘立柱塀。発掘区外北にのびる。1間以上。柱間は1.8 m。

今回、検出した遺構の中で特筆すべきことは、2つの門とそれに関連した宅地内施設を検出したことである。以下にそれについてまとめる。

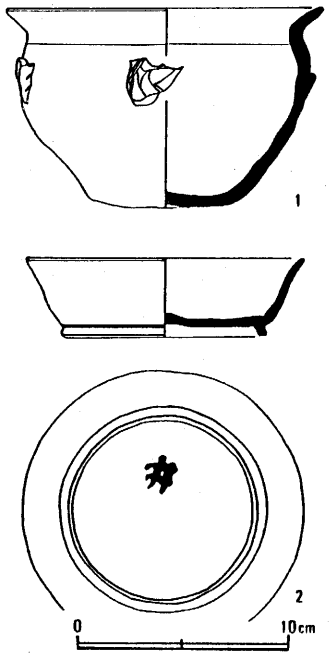
門SB06は坪の南辺のほぼ中心に位置する。そして、その北側の宅地内では溝SD07・08・12と掘立柱塀SA09・10・13・14によって、北を除いた三方が区画されている。(東西約9 m)。この区画の東西長が門SB06の桁行の長さとほぼ同じであるから、この区画はおそらく中心建物につながる通路の機能を有していたと考えられる。なお、この方形区画の中央で掘立柱建物SB15を検出している。この建物が門と区画施設に伴うものかどうかは不明である。仮にこの建物がそれらに伴うと考えた場合は、この区画が通路の機能を有していると考えられることから、廊のような建物を想定せざるをえないだろう。また、門SB19の北側の宅地内には、東と西にそれぞれ南北にのびる掘立柱塀（SA21～24）があ

り、門ＳＢ06の場合と同様に区画が存在する（東西長約14ｍ）。ＳＢ19の桁行の長さに比べて区画の東西長が大きいことから、この区画に門ＳＢ06に伴う区画のような通路の機能を積極的に与えることに無理がある。しかし、門ＳＢ19に伴う区画であることは、位置関係からもみとめられよう。

Ⅲ　出土遺物

出土遺物には、奈良時代のもの以外に弥生土器、瓦器椀がある。瓦器椀は包含層及び採土坑から出土した。奈良時代の遺物には、土師器、須恵器、陶硯、瓦、土馬、有孔土製円板、ふいごの羽口、土錘、斎串、鉄釘、銭貨がある。以下、主なもののみとりあげる。

ＳＥ16 出土土器　須恵器杯Ｂ（墨書土器）１点と土師器壷Ｂ１点がある。須恵器杯Ｂ（２）は口径13.0㎝、器高3.8㎝。底部外面に「井」と読める墨書がある。土師器壷Ｂ（１）は口径14.7㎝、器高9.5㎝。両側肩部に把手があるが、粘土を張り付けたのみで、機能を有しない。



ＳＥ16出土土器

瓦　類　大部分は丸瓦、平瓦である。そのほか、軒丸瓦６点、軒平瓦６点が出土した。その型式と点数の内訳は、軒丸瓦藤原宮式（型式不明）１点、6316Ｇ３点、6316(種別不明）１点、6348Ａ１点、軒平瓦6663Ｈ１点、6679Ａ１点、6711Ｂ３点、型式不明１点である。大半は採土坑及び包含層からの出土である。

ほかに、ふいごの羽口はＳＸ30、及びそれとＳＤ05との接合部から出土した。また、銭貨（神功開宝）はＳＤ05、斎串は採土坑から出土しており、いずれも門ＳＢ19の南にあたる。

Ⅳ　まとめ

今回の発掘調査で明らかになった点を以下にまとめる。

1.　十六坪の南辺の中央に桁行２間の門を検出したことから、十六坪は１町四方の敷地を有する邸宅であった可能性が高い。

2.　坪の南辺の中央の門とその西方にそれより規模の小さい門を検出したことから、十六坪の邸宅が正門と脇門とを有していた時期があると考えられる。

3.　２つの門の内側にはともに区画施設があり、邸宅の入口の一様相を明らかにした。特に掘立柱建物ＳＢ15については、門とその区画施設に伴うものかどうかで大きく性格が異なる。もし、それらに伴うものとした場合、廊のような建物が門に取り付くことになり、特異な例となる。

（森下浩行）

12. 平城京左京二条三坊三坪の調査　第189次

今回の調査は、奈良市法華寺町208番地の2で行った福井新次氏届出の個人住宅建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は平城京の条坊復元で平城京左京二条三坊三坪の北半のほぼ中央にあたる。調査期間は平成2年2月5日から2月9日までである。調査地は既に旧水田面から2.3 mの高さまで客土され宅地化していた。敷地の一部が資材置場になっていたため、調査面積は当初の計画の50㎡より20㎡と狭くなった。

発掘区内の堆積土層は宅地造成の客土、黒灰色土（旧耕土）、緑灰色粘土、黄灰色粘質土、暗黄褐色粘質土、灰褐色粘質土、黒灰色粘質土、暗茶褐色土、灰色砂、茶褐色土と続き旧耕土下1.4 mで、黄褐色粘土の地山となる。遺構は暗茶褐色土、灰色砂の上面で検出した。検出した遺構面の標高は概ね62.0 mである。地山直上の灰色砂、茶褐色土は奈良時代の整地層である。この層から奈良時代中頃の土器が出土した。

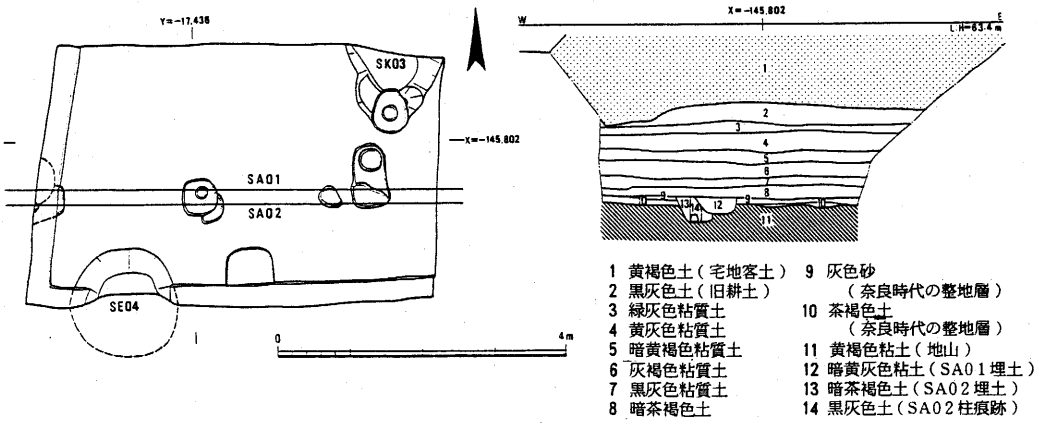
調査の結果、奈良時代の柱列2条、土坑1と平安時代の井戸1基を検出した。

SA01・02　発掘区の中央で検出した2条の掘立柱柱列である。2条はほぼ同位置で重複している。柱間は二間以上あり、共に柱間寸法は2.4 m（8尺）等間である。柱穴の重複関係からSA02のほうが、古いことがわかる。柱列は灰色砂の上面で検出した。建物の柱列とも考えられるが調査面積が狭くわからない。この他に、奈良時代の柱穴があるが建物としてはまとまらない。

SK03　発掘区の北東隅で検出した不整形な土坑である。深さは0.2 mと浅い。

SE04　発掘区の南西隅で検出した円形の井戸で、北半を検出した。井戸枠は残存しない。掘形は径1.2 m、深さ1.2 m以上ある。井戸は暗茶褐色土の上面で検出した。埋土から11世紀初頭の土師器皿が出土した。

（篠原豊一）



検出遺構平面・土層図　1／100

13. 平城京左京五条一坊十五坪の調査　第190次

今回の調査は、奈良市柏木町545番地の1他で行った岡本圭市氏届出の農業用倉庫建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は平城京左京五条一坊十五坪の南西隅にあたる。調査は西辺の十・十五坪境小路東側溝推定地に北発掘区を、南辺の五条条間路北側溝推定地に南発掘区を設定して実施した。調査期間は平成2年2月21日から3月8日までである。調査面積は合計170㎡である。発掘区内の堆積土層は水田耕土、赤褐色粘質土の床土と続き、耕土下0.3mで、黄褐色粘土の地山となる。遺構はこの地山上面で検出した。調査の結果、弥生時代の溝1条、奈良時代の掘立柱建物1棟、柱列3条、溝2条を検出した。

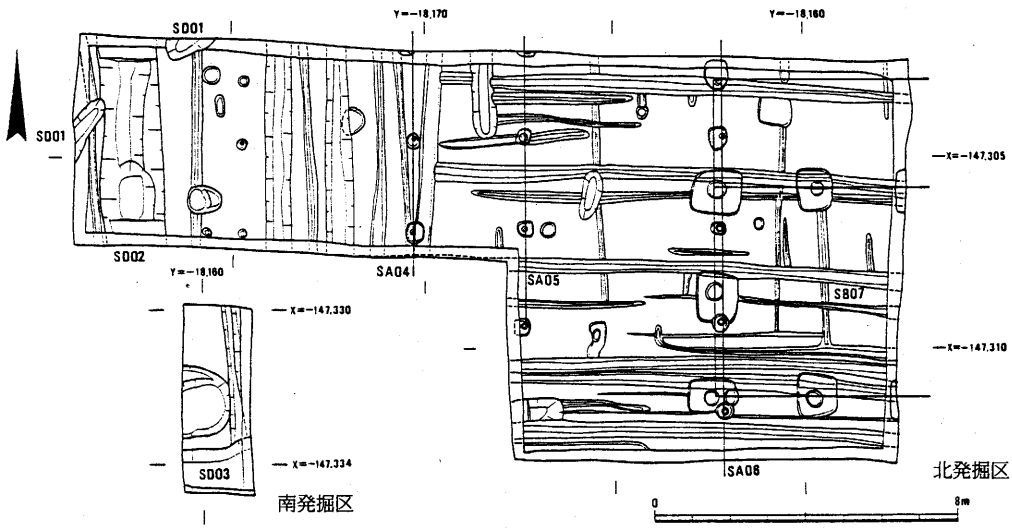
SD01　北発掘区の北西隅で検出した南西方向に斜行する溝である。溝は幅0.6m、深さ0.35mある。埋土から弥生土器片が1点出土した。

SD02　北発掘区の西辺で検出した南北溝である。溝は幅2m、深さ0.35mある。埋土から奈良時代中頃の土器、土馬、円面硯が出土した。

SD04　南発掘区で検出した東西溝で、南岸は発掘区外へ延びる。深さは0.5mある。

SA05・06・07　北発掘区の中央で検出した並行する3条の南北掘立柱列である。共に柱間は2.4m等間で、東西に柱筋が揃う。西庇をもつ東西棟建物とも考えられるが、発掘区外に延びるため不明である。重複関係からSB08より新しいことがわかる。

SB08　北発掘区の東半で検出した北庇をもつ南北3間、東西2間以上の東西棟建物である。柱間は桁行梁間共に2.7m等間である。　（篠原豊一）



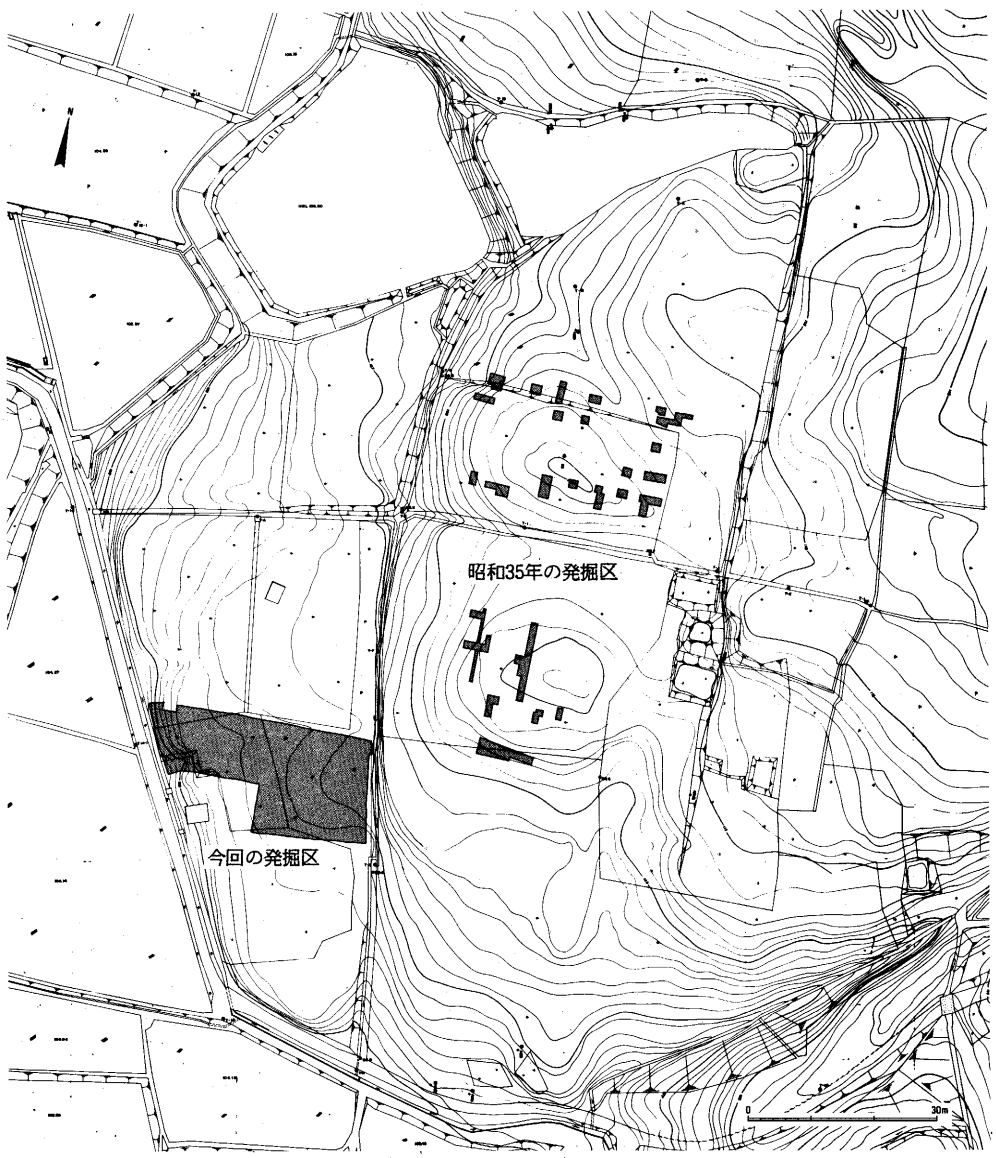
検出遺構平面図　1／200

Ⅱ. 寺院その他の調査

1. 古市廃寺の調査　第1次

I　はじめに

本調査は、奈良市古市町字高井戸2269番地の1・3において、上田清氏届出の住宅建設工事に伴って実施した事前発掘調査である。調査地である古市廃寺跡は、古瓦が出土することから、昭和の初め頃から寺院跡であることが知られ、高井戸廃寺と呼ばれたこともある。



調査地周囲の地形と発掘区の位置　1/1200

初めて発掘調査が行われたのは昭和35年で、この時には塔址と金堂址とみられた土壇の一部が調査され、南大門・中門・塔・金堂・講堂が南北に一列に並ぶいわゆる四天王寺式の伽藍配置をもった寺と推定された。飛鳥時代から平安時代までの瓦が出土しており、創建の時期は飛鳥時代であるとされ、また平瓦の中に「野」と記した文字瓦があったことなどから、この地に勢力をもったとみられる小野氏の氏寺かと考えられてきた。注)今回の調査地は、昭和35年調査地の西側で、前述の伽藍配置をとるとすると、西面回廊の存在が予想される場所である。調査期間は平成元年10月17日から12月22日までで、発掘面積約465㎡である。

Ⅱ　検出遺構

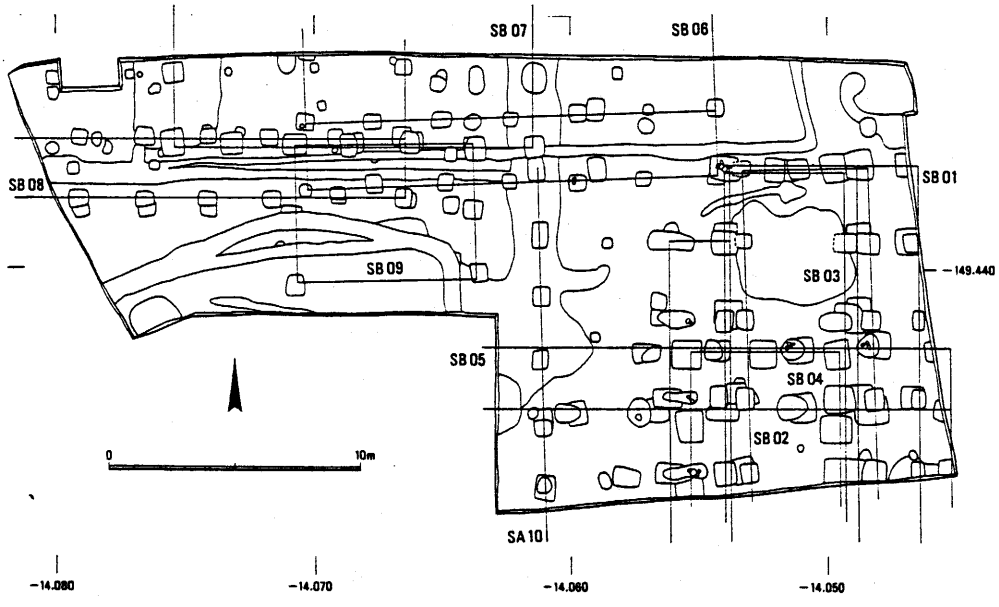
主な検出遺構は、奈良時代から平安時代初期にかけての掘立柱建物9棟、掘立柱塀1条で、少なくとも5時期以上の建物変遷がある。

SB01　桁行4間（12.0m）以上、梁行4間（9.8m）の南北棟建物で、東西両面に庇がつく。ただし西庇は北1間分を欠く。柱間寸法は、桁行3.0m等間、身舎梁行2.5m等間、庇の出は各々2.4m等間である。SB02・03よりも古く、SB04・05よりは新しい。

SB02　桁行4間（12.0m）以上、梁行2間（5.0m）の南北棟建物。柱間寸法は、桁行3.0m等間、梁行2.5m等間である。SB01・03・04・05のいずれよりも新しい。

SB03　桁行4間（12.0m）以上、梁行2間（4.8m）の南北棟建物。柱間寸法は、桁行3.0m等間、梁行2.4m等間である。SB02よりも古く、SB01・04・05よりは新しい。廃絶の時期は柱抜取りあと出土の土器からみて、奈良時代末頃と判断できる。

SB04　桁行2間（5.4m）以上、梁行2間（6.0m）の南北棟建物。柱間寸法は、桁



検出遺構平面図　1/300

行2.7 m等間、梁行3.0 m等間である。SB01・02・03よりも古い。

SB05　桁行5間（15.0 m）以上、梁行2間（4.8 m）以上の東西棟建物で、北庇がつく。柱間寸法は、桁行3.0 m等間、庇の出2.4 mである。SB01・02・03よりも古い。

SB06　桁行6間（16.2 m）、梁行2間（5.4 m）以上の東西棟建物で、南庇がつく。柱間寸法は、桁行2.7 m等間、庇の出も2.7 mである。SB02・03よりも古い。

SB07　桁行6間（14.4 m）、梁行1間（2.7 m）以上の東西棟建物。桁行の柱間寸法は、2.4 m等間である。SB08・09よりは新しい。

SB08　桁行5間（13.0 m）以上、梁行2間（5.1 m）以上の東西棟建物で、南庇がつく。柱間寸法は、桁行2.6 m等間、庇の出2.4 mである。SB07よりも古い。

SB09　桁行3間（7.2 m）、梁行2間（4.8 m）の東西棟建物。柱間寸法は、桁行・梁行ともに2.4 m等間である。SB07よりも古い。

SA10　5間（12.0 m）以上の南北塀。柱間寸法は2.4 m等間である。SB07よりも古い。

Ⅲ　出土遺物

遺構面を覆う遺物包含層から整理箱約450箱分の瓦塼類が出土したが、目下整理途中で、軒瓦についても型式数と型式別個体数とを確定するまでに至っていない。とりあえずは、これまでに型式の判明した資料について列記し、全容はあらためて報告したい。

軒丸瓦　1は平城宮6130型式A種と同笵。2はいわゆる興福寺式の瓦で、平城宮6301型式C種と同笵。3は平城宮6304型式G種と同笵。4は複弁8弁蓮華文瓦で、平城宮6304型式に属すが、同笵例が知られない新種。5は平城宮6225型式A種と同笵。6は平城宮6282型式B種と同笵。7は単弁16弁蓮華文瓦。8は特殊な宝相華文瓦で、ほかに類例がない。9は単弁12弁蓮華文瓦。10・11は単弁5弁蓮華文瓦で、大（10）小（11）の二笵がある。

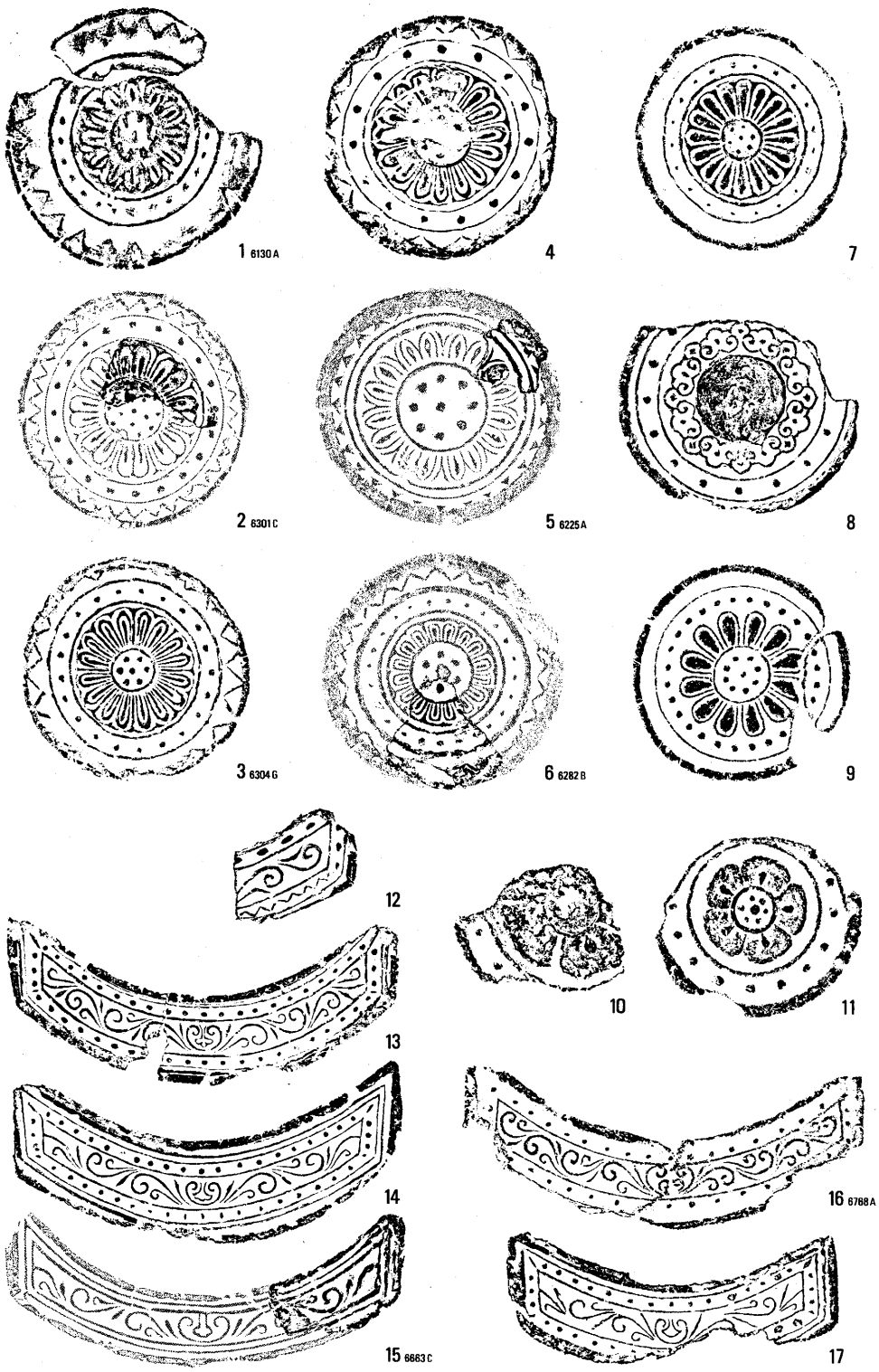
軒平瓦　12はいわゆる興福寺式の瓦で、平城宮6671型式に属すが、同笵例が知られない新種。13は平城宮6667型式の新種。14は平城宮6668型式の新種。15は平城宮6663型式C種と同笵。16は平城宮6768型式A種と同笵。17は14の退化形とみれる3回反転均整唐草文瓦。

上述の軒瓦を数量でみると、軒丸瓦では3と7が、軒平瓦では14と16が他を圧して多く、軒丸3と軒平14、軒丸7と軒平16との二組の組合わせが主体であったと判断できる。

Ⅳ　まとめ

調査前の予想に反し、回廊の遺構は検出できず、大規模な掘立柱建物群が調査地周囲に広がる事実が判明した。課題となるのは、昭和35年調査遺構との併存・否併存の関係をも含め、建物群の性格付けである。寺院の付属施設であるのか、あるいは、調査地周辺一帯が小野氏の勢力範囲であったとの見方を考慮すると、邸宅遺構の一部とみることもあながち不可能ではない。いずれにせよ、いま少し広範に調査する必要があろう。（中井　公）

注）中村春壽「古市廃寺の調査」『奈良県観光 第43号』（昭和35年）　同「古市寺院の発掘調査」『昭和35年4月19日付 朝日新聞朝刊（奈良版）』


1 6130A
4
7
2 6301C
5 6225A
8
3 6304G
6 6282B
9
12
10
11
13
14
16 6768A
15 6663C
17

出土軒瓦　1/5

2. 塔の宮廃寺の調査　第1次

本調査は、奈良市山町の市道南部478号線拡幅工事に伴なう事前の発掘調査である。調査期間は、平成元年12月20日～22日の3日間を要した。

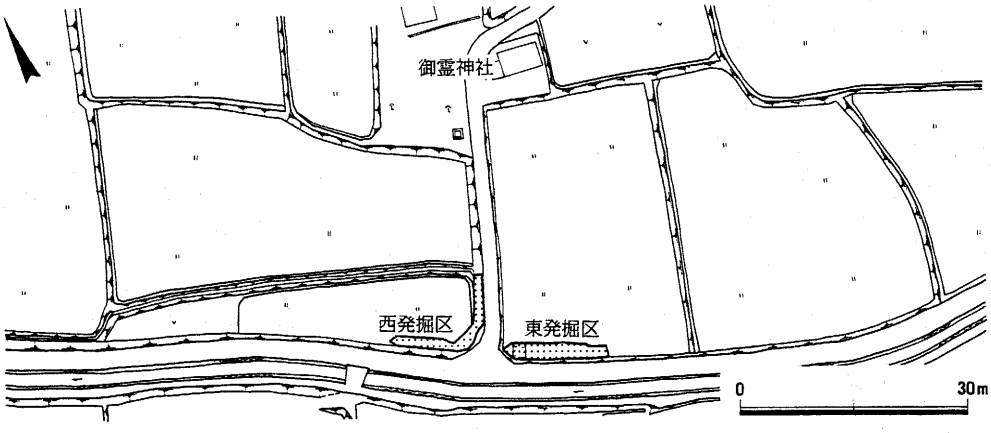
塔の宮廃寺跡に関しては、大正5年に天沼俊一氏が山村廃寺跡として報告されている。それによれば、御霊神社境内地に塔心礎（原位置をとどめる）と礎石が遺存していたこと(注)が知られ、地元の方の話によれば、それは現存しているという。また、古瓦がかなり盗掘されたらしく、出土瓦から寺の創建を奈良時代初期もしくはそれ以前としている。伽藍配置等は不明であるが、神社境内に主要堂塔が依置していたものと考えられる。したがって、南門遺構の有無を確認する目的で、発掘区を参道の南側入口付近に設定した。以下、便宜上参道をはさんで西側（西発掘区）、東側（東発掘区）とに分けて記述する。

西発掘区　土層は、耕土の下に淡灰粘質土、灰色粘質土、黄灰色砂、灰色砂、灰色砂礫、暗灰色粘土と続いて堆積しており、東側で地表下約1.5mで灰白色礫の地山となる。灰色砂礫層には布目瓦が包含されていた。

東発掘区　土層は、耕土の下に、灰（黄）褐色土、淡灰粘質土、灰色粘質土、灰色砂礫、青灰色砂、暗灰色粘土と続いて堆積しており、地表下約1.6mで灰白色礫の地山となる。暗灰色粘土層には布目瓦が包含されていた。

西・東発掘区において遺構面は確認できず、砂と粘土が堆積する状況から、両発掘区が旧流路内にあたるものと判断できる。神社境内地の南辺にそって地形が一段低くなっており、そこまでは旧流路内に含まれると考えられよう。しかし、南門遺構が削平されてしまったのか、もっと北側に位置するのかは不明である。　（鐘方正樹）

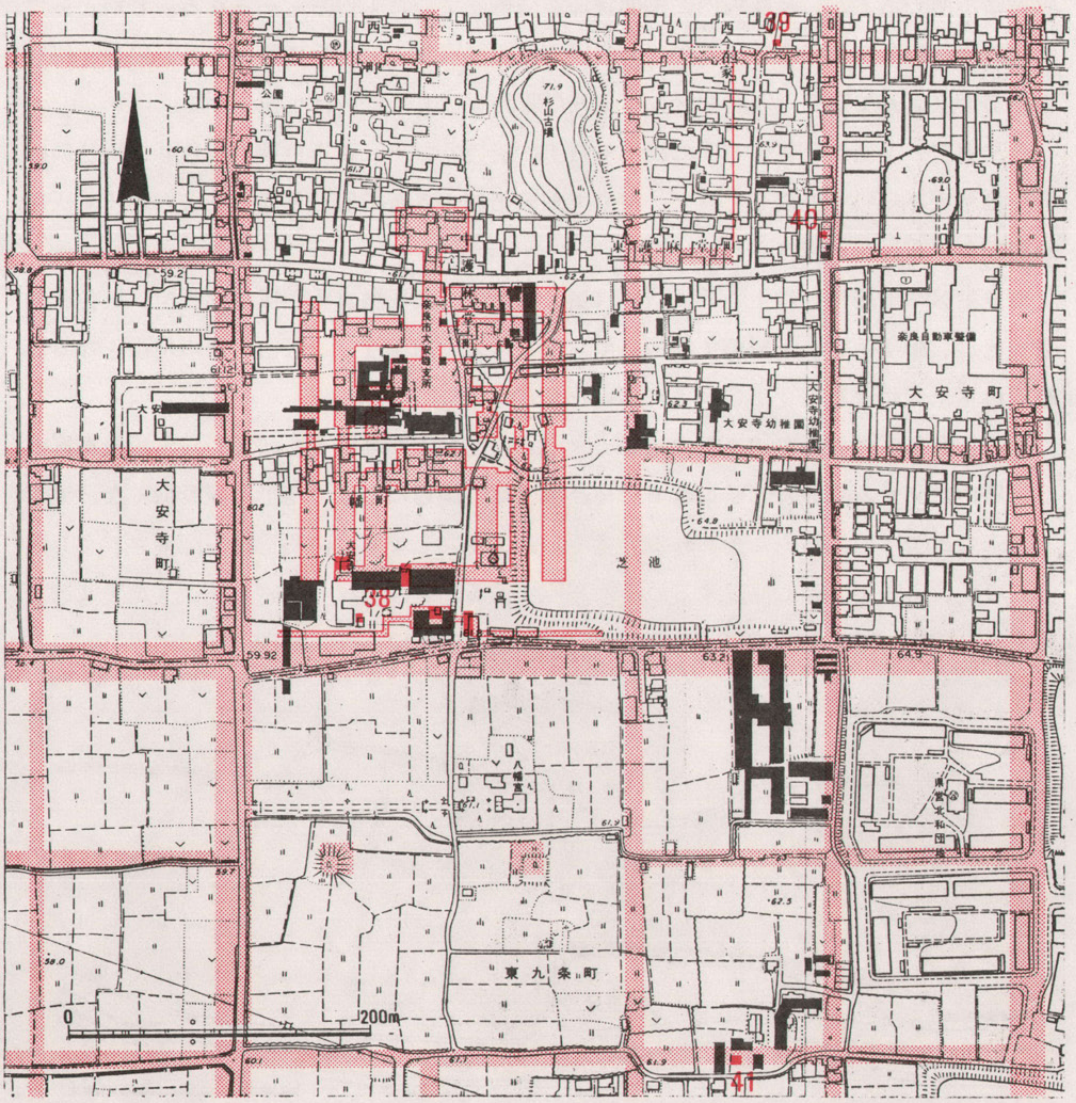
（注）天沼俊一「山村廃寺址」『奈良県史蹟勝地調査会報告書』第3回　大正5年



発掘調査位置図　1/1000

3. 史跡大安寺旧境内の調査

本年度、史跡大安寺旧境内では４件の発掘調査を実施した。いずれも現状変更の許可申請に関わる調査である。第38次調査は28次（昭和61年度）・30次（昭和62年度）調査に引き続き、現在の大安寺の本堂・東門の増改築計画に関わって正確な伽藍位置を確認すべく４箇所に発掘区を設け、南大門、回廊、僧房の一部を再発掘した。第39次調査は住宅の、第40次調査は事務所ビルの改築、第41次調査は住宅新築計画に関わって実施した。第40次調査では旧境内の東辺を画する小路西側溝を検出した。

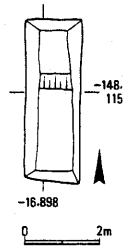


史跡大安寺旧境内発掘調査位置図

第38次の調査

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市大安寺町1299番地他において、大安寺貫主・河野清晃氏提出の現状変更申請（大安寺本堂および東門の増改築）に対処すべく実施したもので、第28次調査（昭和61年度）・第30次調査（昭和62年度）と一連の発掘調査である。今回の調査の目的は、昭和29年に発掘調査された南大門・中門・南面回廊地区の一部を再発掘して、これら伽藍の主要建物の位置を正確に把握することで、第28・30次での両調査成果とも併せて、申請に対する判断資料を整えようとするものである。調査では、南大門および南面築地地区、南面回廊地区、僧房（西太房南列）地区に5箇所（合計面積約270㎡）の発掘区を設定した。調査期間は、平成元年7月17日から同年10月4日までである。



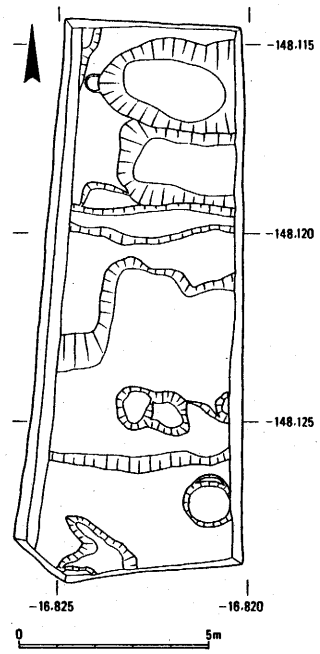
南面築地地区（西）
遺構平面図 1/200

Ⅱ　検出遺構

各地区での調査成果の概要は下記のとおりである。

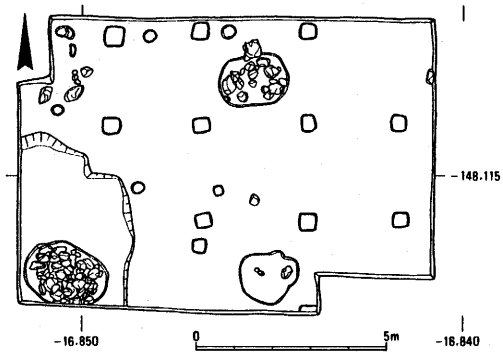
南面築地地区　南大門から東西にのびる築地塀の確認を目的に、南大門の東西両側に発掘区を設定したが、東側発掘区では後世の粘土採掘のために遺構は失われていた。一方、西側発掘区では、築地塀北側の雨落とみられる東西溝の一部を確認した。北肩が未検出で全幅不明だが、南肩から幅1.6mまで確認、深さ0.5mである。溝内埋土は茶褐土で、軒丸瓦6137A・6138C・6304D、軒平瓦6712Aのほか多量の丸・平瓦が出土した。

南大門地区　南大門は、昭和29年の発掘調査で、桁行5門（17尺等間）・梁行2間（17尺等間）の規模であったことが既に判明している。今回は、当時未発掘であった中央間の北側部分について調査し、礎石据付痕を4箇所確認した。これにより、南大門の中心の座標値が確定できた。すなわち、X＝－148,117.640　Y＝－16,847.820　である。

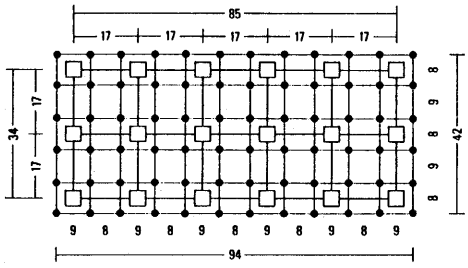


南面築地地区（東）
遺構平面図 1/200

さらに今回の調査では、礎石据付痕とともに、新たに足



南大門地区　遺構平面図 1/200

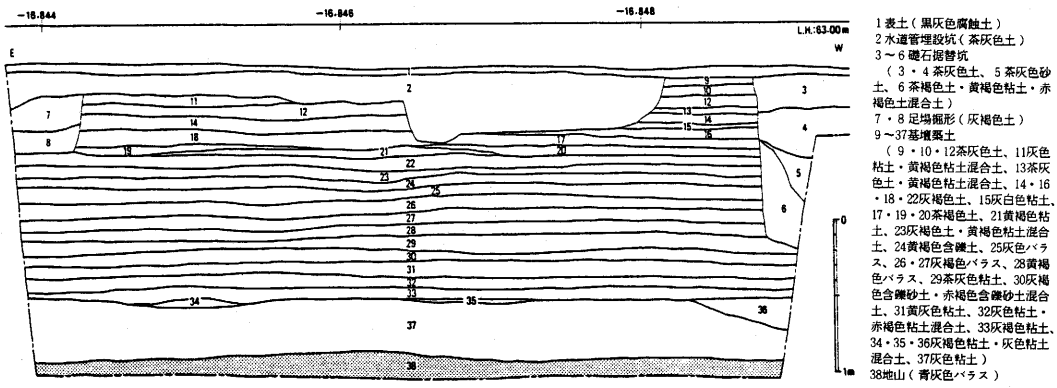


南大門足場配置復原図
（単位は小尺）

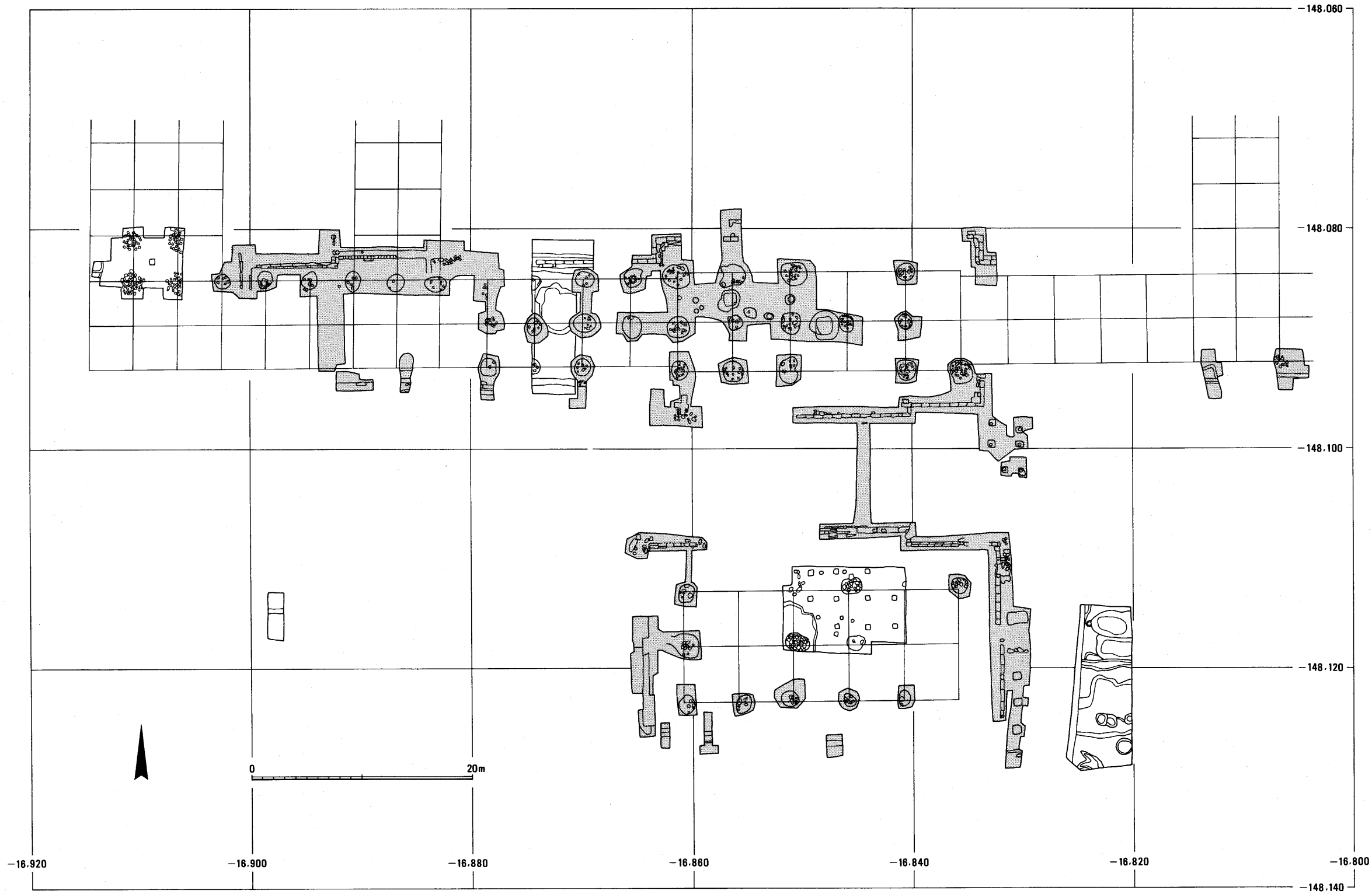
場の小柱穴列を確認することができた。建物本体の柱の外周に各々4箇所ずつ配置され、掘形は方40～50㎝、深さ40㎝ほどである。本体の柱1本を囲む4柱穴間の寸法は、桁行2.7m（9尺）、梁行2.4m（8尺）である。調査所見をもとに足場全体を復元すると、桁行11間（94尺）、梁行5間（42尺）の総柱遺構を想定することができる。

また発掘区南壁部分で基壇の断ち割り調査を実施し、基壇築成についての知見を得た。基壇は、現存上面から深さ1.85mまでが築成土である。基壇基礎となるのは青灰色バラスの地山で、掘込み部分の深さは不明だが、掘込み地業が行われているものと解される。築成には底にまず30～40㎝の粘土をおき、この上に粘土・砂土・含礫土が版築される。各々の築土は厚さ5～14㎝ほどで丁寧に突き固められており、上面までに21層を数えた。

ところで、今回の調査では、確認した4箇所の根石群のうち、南西のものが後世に据替えられていることが判明したのも新知見である。南北4.5m以上、東西3.0m以上、深さ1.2mの土坑を基壇に掘込んで、これをいわば仕事



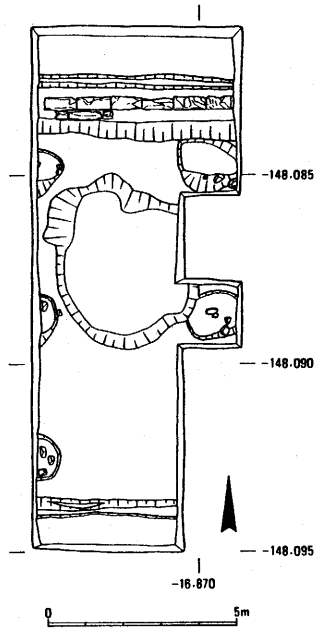
南大門基壇断面図 1/100



遺構配置全体図 1/400（網部分は昭和29年の発掘区）

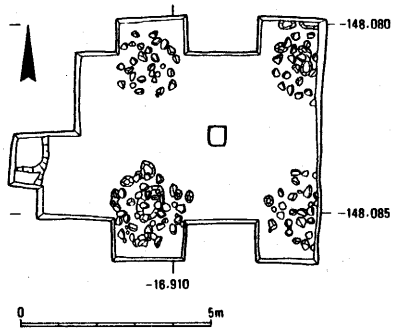
穴として、根石すなわち礎石の据替えを行っている。土坑埋土から出土した土器からみて、13世紀頃のことと判断できるが、記録の上では文永5年（1268）頃に別当宗性による南大門修造が知られ、あるいはこれに比定することもできようか。

南面回廊地区　中門に取付く南面回廊も、昭和29年の調査で、中門西側の10間分以上が確認されている。梁行2間（13尺等間）の複廊で、中門から5間は桁行14.8尺等間、6間目と7間目が13尺で、ここで北に折れて西面回廊につながる。さらに西側にも続き、8～10間目が13.5尺で、11間目から僧房（西太房南列）に連結するとみられている。今回の発掘は、中門の西3間目にあたり、前回の調査部分の再発掘であるが、新たに基壇北縁の凝灰岩列の一部を検出し、基壇構造に関して補足資料を得た。すなわち、延石と地覆石の両者をともに検出し、回廊基壇の外装も、延石を使用したいわゆる正規の壇上積であったことを確認した。また、基壇北側では雨落を検出している。幅0.3～0.4mで、深さ0.05mとごく浅い。恐らくは掘削された溝ではなく、雨だれに打たれて形づくられたのであろう。これから軒の出を7尺（2.1m）とみることができる。なお、基壇端を一部断ち割り調査したが、基壇の築成は版築によらず、整地土上に一気に含礫土を盛上げている。



南面回廊地区　遺構平面図 1/200

僧房（西太房南列）地区　復原案による大安寺伽藍の大きな特徴のひとつは、東西の僧房（太房）が中門からのびる南面回廊に連結するとみられる点で、僧房がこのように伽藍の前面に配置された例は珍らしい。この連結部分については過去に調査例がなく、必ずしも明確ではなかったが、今回はじめて礎石据付痕を4箇所確認することができ、回廊と僧房とが連結していた事実が明確になった。西太房については、昭和38年に講堂西側で北列の一部が調査されて



僧房（西太房南列）地区
遺構平面図 1/200

おり、梁行３間（13尺等間）で、桁行は13.8尺ほどに考えられている。今回確認した礎石位置は、３間の梁間のうちの中央間で、回廊から北１間目にあたるが、柱間は桁行・梁行とも北列と同一とみてよい。ちなみに西太房南列の規模に関しては、天平19年（747）の『資材帳』に長さ27丈４尺５寸と記載されたことをもとに、南端２間は回廊梁間と合わせて13尺とし、以北を北列と同様に13.8尺として18間とし、全体で20間、長さ274.4尺とする復原案が示されている。発掘結果に矛盾はなさそうである。

一部で断ち割り調査を行ったが、基壇の築成は版築によっている。深さは現存上面から0.4mまでで、厚さ２～10cmの築土７層を数えた。版築上下は瓦を多量に包含した含礫土が厚さ0.6m続き、地山となる。含礫土は掘込みによる基礎の地業土であろう。なお、検出した根石群は、一箇所径1.8mほどの範囲に、15～20cm大の比較的小ぶりな石が配されるが、据付掘形を掘らずに版築の工程で上面が水平を保つように埋込まれている。したがって、これらが直接礎石を支えたとは考え難く、根石を置く地固めであると解されよう。

Ⅲ　出土遺物

出土遺物はほとんどが瓦塼類で、５箇所の発掘区をあわせ整理箱380箱が出土した。大多数は丸瓦・平瓦であるが、軒瓦160点がある。奈良時代のもの102点、平安時代以降のもの58点で、奈良時代のものは細片のため型式の固定が困難な７点を除いて、４型式５種29点の軒丸瓦と、８型式10種66点の軒平瓦とに分類できる。発掘区別の型種と点数の内訳は下記のとおりである。なお、これらのうち遺構との関係で出土したものは、先述したが、南大門東側の築地北側溝から出土した軒丸瓦6137Ａ・6138Ｃ・6304Ｄ、軒平瓦6712Ａ各１点ずつだけである。

軒丸瓦

型式＼地区	築地（東）	築地（西）	南大門	回廊	僧房	（型式別計）
6137A	1	1		3		5
6138C		1		1	1	3
6138E	2			2		4
6231				1		1
6304D	4	2		9	1	16
奈良型式不明	2			1		3
平安時代以降	12	6	1	11	2	32
（地区別計）	21	10	1	28	4	合計 64

軒平瓦

型式＼地区	築地（東）	築地（西）	南大門	回廊	僧房	（型式別計）
重弧文	1			4		5
重郭文	1					1
6661B	1	1		4	2	8
C					1	1
6664A	1			2	1	4
6690A	3					3
6712A	7	3		13	5	28
B	5	1		2		8
6716C	1				3	4
6717A	1	1		1	1	4
奈良型式不明				4		4
平安時代以降	5		4	14	3	26
（地区別計）	26	6	4	44	16	合計96

出土軒瓦計数表

第39次の調査

奈良市大安寺町1003、1004－1番地で行った住宅建設のための現状変更許可申請に伴う事前調査である。

調査地は、大安寺旧境内の東北端で、大安寺旧境内の北を限る左京六条四坊北条間路となる坪境小路が推定された。この九坪、十坪間の坪境小路は、大安寺旧境内に存在する杉山古墳後円部に推定位置がかかっており、かねてよりその施行の有無が問題となっている。

発掘調査は、この小路確認に主目的を置き、東西1.5ｍ、南北3ｍの発掘区を設定した。調査期間は、平成元年9月6日から9月8日までである。

調査の結果は30～40㎝の厚さの表土を取り除くと、すぐ地山である淡黄色粘土層となり、削平されたためか、この上面において、顕著な遺構は、まったく検出できなかった。出土遺物も皆無である。

（森下恵介）

第41次の調査

奈良市東九条町1373番地の5において行った住宅建設による現状変更許可申請に伴う事前調査である。調査期間は、平成2年1月9日から1月12日までである。

調査地は、大安寺旧境内の東南、花園院推定地の南を限る七条条間路が推定される。昭和59年に隣接地で行った大安寺第17・19次調査では、この七条条間路の北側溝とみられる溝ＳＤ01を検出している。調査成果では、この溝ＳＤ01は幅約7.5ｍと、かなり広く、調査地の西側で行った19次調査では、溝全体を検出したが、東側の第17次調査では、溝の南肩は検出できなかった。今回の調査では、こうした成果をもとに、条間路北側溝とみられる溝ＳＤ01の南肩の確認に主眼をおき、その推定地に東西4ｍ、南北4ｍの発掘区を設定した。発掘区は、調査地が第17次調査以後に造成されていたこともあり、造成土排除等の制約から東西の幅を調査中に縮小した。発掘区の基本的な層序は、造成土、旧耕土、淡青灰色粘土、淡灰色砂質土、灰白色砂、黄褐色砂質土、青灰色砂質土、暗青灰色粘質土、灰色砂礫であり、青灰色砂質土、暗青灰色粘質土が溝内の堆積土と考えられる。発掘区内では、溝南肩は検出できず、今回の発掘区全域が溝内に位置するものであろう。溝内堆積土からの出土遺物は無い。第19次発掘区と今回の発掘区は5ｍ程度しか離れておらず、溝ＳＤ01は、この間でより南へ広がり、かなりな幅をもつ溝と推測され、この溝を七条条間路とするには、問題点が多い。

（森下恵介）

第40次の調査

本調査は、奈良市大安寺町988－5 において実施した服部憲典氏提出の現状変更許可申請に関る発掘調査である。申請は店舗付事務所を改築しようとするものであった。当該地は大安寺旧境内の東限を画す左京六条四条十坪と十五坪の坪境小路にあたり、小路の西側溝が想定される位置である。昭和61年度には当該地の南の隣接地を調査しているが、近世の土坑数基を検出しただけで、奈良時代の遺構とみられるものは検出していない。

まず、調査地中央に東西４ｍ、南地２ｍ（８㎡）の発掘区を設定したが、西壁ぎわで埋土に奈良時代の遺物を包含する溝の東肩を検出したため、さらに西へ東西2.5ｍ、南北１ｍの範囲で拡張し、計10.5㎡の発掘区となった。調査期間は平成元年12月５日から同７日の３日間である。

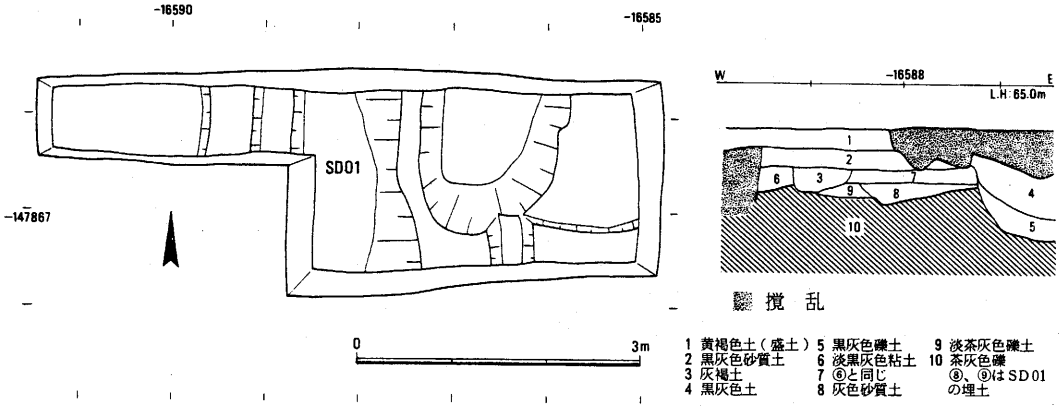
発掘区内の基本的な層序は約40㎝の造成盛土以下、黒灰色砂質土、暗茶灰色土と続き、地表下60～90㎝で茶灰色シルトの地山に達する。遺構は茶灰色シルト上面で検出した。地山上面の標高は概ね64.0ｍである。

検出した遺構は奈良時代の溝１条（ＳＤ01)、近世の土坑である。

溝ＳＤ01は十・十五坪境小路の西側溝である。東西幅約1.1ｍ、検出面からの深さ20～30㎝を測る。南北2.0ｍ分を確認した。溝内には灰色砂質土、淡茶灰色礫が堆積し、奈良時代の土師器片、須恵器片、軒丸瓦(型式不明)を包含していた。

溝心の座標値はＸ＝－147,867.000　Ｙ＝－16,588.400 である。

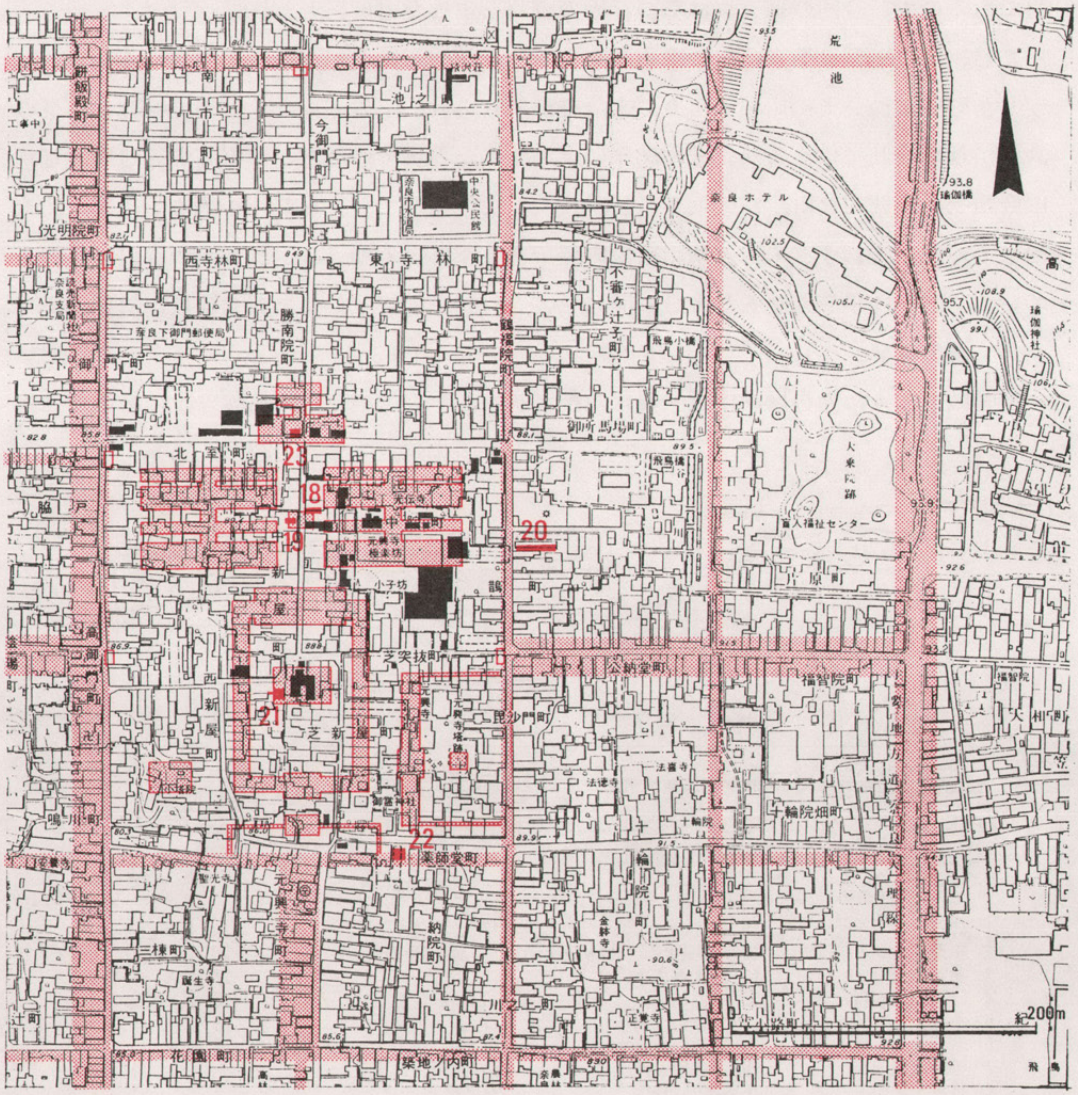
当該地周辺の調査では、宅地化以降の掘削により奈良時代の遺構面が深く削りとられている場合が多いが、今回の調査では大安寺の寺域東限を画す小路の西側溝を検出することができた。このことから奈良時代の遺構が完全に削平されてはいないことがわかり、今後とも綿密な調査を行ない、遺構の確認につとめる必要があると考える。　（三好美穂）



発掘区平面・北壁土層図

4. 元興寺旧境内の調査

元興寺周辺地区は旧奈良町の中でも伝統的町並をよく残した地区である。現在、市ではこの地区を横断する都市計画道路杉ケ町高畑線拡張事業を行なう一方、町並の保存・修景事業を進めつつあるが、道路事業の進展に伴って沿線の民家が取り壊され、建替えられる例がふえている。ところが、旧奈良町の伝統的町並の特質のひとつに間口が狭く、奥行の深い敷地割があり、いきおい建替え前に小範囲の発掘調査を重ねる結果となっている。本年度は道路拡張に伴う調査１件、住宅改築に伴う調査５件、計６件の調査を行なった。



元興寺旧境内発掘調査位置図

第18次の調査

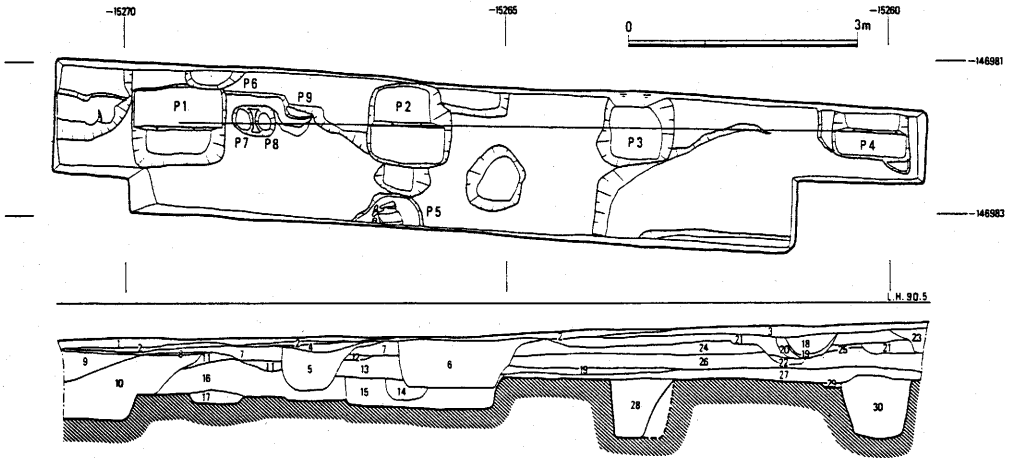
Ⅰ　はじめに

この調査は野崎太三氏届出の倉庫建設に関わる事前発掘調査である。調査地は奈良市中新屋町27番地の1、元興寺の旧境内でも主要伽藍地域のやや北寄り、ほぼ伽藍中軸線上にあたる。昭和56年に今回の調査地の南、敷地ひとつ隔てた中新屋町29番地のこれも野崎氏宅の改築工事中に、2個の礎石が発見されている[1)]。いずれも土坑の中に落し込まれており元の位置はわからないが、元興寺の伽藍復原に照らして鐘楼のものである可能性が高いと考えられている。しかし、その際の調査では鐘楼の遺構は検出されておらず正確な位置も不明であるので、今回の調査ではその存否の確認を主要な目的とした。

また、この一帯は旧奈良町の中心部を占め、伝統的な町屋がよく残る地域でもある。こうした町並については昭和56年度以来調査が続けられ[2)]、その成果にもとづく保存、修景の計画が進められてはいるが、昭和50年にはじまった都市計画道路杉ケ町高畑線建設の進行に合わせて伝統的な町屋が破壊され、現代的な建物に建て替えられつつある。今回の調査地もその例にもれず、もとは明治頃の町屋であったが取り壊され、調査時には更地になっていた。調査は平成元年5月8日に開始し、5月19日に終了した。調査面積は21㎡である。

Ⅱ　検出遺構

土層図のように発掘区内は近・現代の撹乱が著しく、遺構は黄褐色砂礫土の地山面で検



1 砕石
2 黒茶色土
3 黄茶色土
4 暗茶色土（炭入る）
5 茶色土
6 暗茶色土（焼土入る）
7 暗茶色土
8 茶色土
9 黒茶色土
10 黄茶色土（コンクリート入る）
11 淡黄茶色土
12 黄色粘土
13 暗茶色土
14 黄白色砂質土
15 黄褐色砂礫土
16 褐色砂質土
17 黒茶色土
18 黒灰色土
19 焼土
20 暗灰色粘土
21 黄茶色土
22 黄茶色土・黄色粘土混乱
23 黒茶色粘質土
24 22と同じ
25 黄茶色土
26 13と同じ
27 暗黄茶色粘土
28 黄褐色砂質土
29 黄褐色粘質土
30 黄褐色土

発掘区平面・北壁土層図　1/100

出したが、土層図の19焼土層から16Ｃ後半頃の土器が出土しており、27黄褐色粘質土層上面がその時期の生活面であったことがわかる。検出した遺構は柱穴９個である。柱穴は形態で大柱穴（Ｐ１～４）と、不整形な小柱穴（Ｐ５～９）にわけることができる。

Ｐ１～４　一辺１～1.2ｍ、深さ67～77㎝の柱穴。いずれも平面方形で整然と掘られている。３ｍ間隔で４個、東西３間分を検出した。確認はできなかったが、さらに東西に続くと思われる。４柱穴とも柱痕跡や柱抜き取り痕跡がなく、まざりけのない地山質の黄褐色砂礫土で均一に埋められており、遺物もまったく出土しないことから、柱掘形は掘ったものの柱を立てることなく埋め戻されたのではないかと考える。層位と形態からみて奈良時代の遺構であろう。

Ｐ５～９　Ｐ５と６は径80㎝ほど、Ｐ７～８は径20㎝ほどの不整形な柱穴。いずれも埋土は黒茶色土。柱痕跡は確認できなかったが、Ｐ５には一辺30㎝ほどの方形の礎石が据えられている。検出数が少なく建物としてはまとまらない。Ｐ５は20暗茶色粘土層から掘り込まれ、19焼土層中に礎石の上面があることから16Ｃ後半頃の遺構だと思われる。

Ⅲ　まとめ

以下の２点を今回の調査のまとめとしておく。まず、今回の発掘区内では鐘楼の遺構を検出できなかったことがある。この点については、何分狭い範囲の調査であったのでこの調査のみをもって鐘楼の位置を云々することには無理があり、今後の周辺の調査を待つべきかと考える。

第２点は奈良時代の掘立柱柱穴を検出したことである。柱掘形の規模からみて相当規模の建物が計画されていたと思われるが、上記のように柱を立てた痕跡がないことから、正確な時期は不明だが掘立柱建物の建設が中止になったか計画変更されたのではないかと考える。建物全体の計画が判明していないので計画建物の性格も推測の域を出ないが、以下の可能性を考えてみたい。(1)元興寺が移建される以前の建物　(2)元興寺の伽藍、もしくは寺域内の区画施設として計画された建物　(3)元興寺造営にかかわる施設として計画された建物　(4)元興寺の伽藍が倒壊した後に計画された建物

(1)については、平城遷都直後から元興寺が平城京に移建されたとされる養老二年(718)までの間に計画が進められていた建物と考えればよいのであるが、検出位置がほぼ伽藍中軸線上、京の条坊区画では外京四条六坊四・五坪境小路相当位置にあたることから、ふた坪にまたがる大規模な敷地の中央に計画された建物を想定せねばならない。また、外京の条坊設定の時期ともかかわってくる。

(2)については、主要伽藍の一部が当初掘立柱建物で計画され、後に変更されたと考えねばならないことになる。こうした造営経過はこれまでのところ知られておらず、また他の大伽藍でも主要伽藍の一部を掘立柱建物とした例は知られていない。

(3)については、伽藍建設途上でそうした施設が必要であることはいうまでもないが、主要伽藍地域内とくに伽藍建設位置やその近接地に建設することは不自然であり、あえてそうした用途の建物が今回の調査地に計画されていたとするならば、逆に当初の伽藍配置計画が変更されたことも考えに入れなければならなくなる。しかし(2)と同様そうした変更も知られておらず問題が残る。

(4)については、長元八年（1035）の「堂舎損色検録帳」でその時点での鐘楼、僧房の存在が知られることから、それまでにその近接地に掘立柱建物を計画することは不自然であるし、それ以降と考えることは時期的に無理である。

以上4点の可能性を考えてみたが、いずれも根拠に乏しく断定するまでには至らない。今後、計画建物の全容が判明し、その時期が確認できた時点で再度検討する必要があろうかと考える。

最後に、今回の調査地一帯は伝統的な町屋がよく残り、その保存、修景の計画が進められている地域でもあることはすでに記した。こうした地域で学術的な動機による調査はともかくとしても、建替工事に先立つ発掘調査を重ねることによって遺跡の解明が進むことにはいささかの矛盾を感じていることをあえて記しておきたい。（西崎卓哉）

1）奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書　昭和56年度』　1982

第19次の調査

奈良市中新屋町17番地の1、2で行った店舗付共同住宅建設に伴う事前調査である。調査地は第18次調査の調査地の道路を隔てた西側に位置する。発掘区は東西7m、南北4mで、調査期間は、平成元年8月10日から8月16日までである。

発掘区の基本的な層序は、現地表から、表土、黒色土、灰褐色砂質土、暗黄褐色砂質土、黄褐色砂礫の順であり、地表下約90㎝で地山の黄白色砂礫層に達する。遺構は、すべてこの黄白色砂礫層の上面で検出した。検出した遺構は、すべて中世～近世の土坑、井戸であり、奈良時代の元興寺に関る遺構は、検出できなかった。

検出した土坑は、いずれも長辺50～60㎝、短辺20～30㎝の平面楕円形のもので、深さ10～20㎝程度のものである。埋土からは、瓦質土器、土師器など16世紀～17世紀の土器類が出土している。この他、発掘区北東隅で、径約90㎝の円形素掘り井戸を検出した。深さは、検出面から、3mまで確認したが、崩壊の危険性があり、底まで確認できなかった。埋土からは、瓦質土器、土師器の他に陶器擂鉢が出土し、18世紀以降のものと考えられる。

（森下恵介）

第20次の調査

奈良市鵲町6番地の11で行った店舗付共同住宅建設に伴う事前調査である。調査地は、元興寺旧境内の東辺、東七坊坊間路と元興寺の寺地と推定されている左京四条七坊十二坪にあたる。発掘区は、南北1.2m、東西12mであり、調査期間は、平成元年8月21日から、8月29日までである。

発掘区の基本的な層序は、現地表から、造成土、淡黄褐色砂質土、黒褐色砂質土、黒色粘土の順であり、地表下約2mで遺物を含まない灰黄色粘土層あるいは、青灰色粘土層に達する。灰黄色粘土層あるいは、青灰色粘土層上面では、遺構は検出できず、東七坊坊間路、元興寺に関る遺構はない。堆積土層のうち、黒褐色砂質土層からは、瓦質土器、土師器など16世紀の土器類が、黒色粘土層からは、瓦器椀、土師器皿、土師器羽釜など13世紀の土器類が出土した。元興寺主要伽藍の立地する調査地西側の丘陵部と、東北方の鬼薗山丘陵との間には、尾花谷川が流れており、今回の調査成果から、四条七坊のうち、東七坊坊間路以東の部分は、この尾花谷川の開折谷（尾花谷）に相当するものとみることができる。調査地の東方に位置する名勝旧大乗院庭園の園池も、この開折谷につくられているらしく、出土遺物からみる限り、鎌倉～室町時代に、この谷が除々に埋め立てられ、現在の市街地が造成されていったものとみられる。（森下恵介）

第22次の調査

奈良市薬師堂町29番地の1における住宅建設に伴う事前調査である。調査地は、元興寺旧境内の南方、南大門推定地の南を東西にはしる五条北条間路推定地にあたる。先年度行った第16地調査地とは東へ約25m隔る。発掘調査は、東西2.5m、南北3mの規模の発掘区（西積7.5㎡）を設定し、平成元年9月13日から9月18日にかけて行った。

発掘区の基本層序は、現地表から、造成土、暗茶褐色粘質土、暗灰色粘質土、茶褐色砂質土、茶灰色砂質土の順であり、発掘区北側では、地表下約1mで地山の淡黄色粘土層に達する。地山の直上層である茶灰色砂質土は、上面が堅くしまっており、第16次調査における黄灰褐色礫土層に対応するものと考えられる。暗灰色粘質土以下の各層からは、土師器皿、土師器羽釜、瓦器椀、瓦質土器火鉢、瓦質土器擂鉢、常滑焼擂鉢など13世紀～16世紀にかけての土器類が出土し、特に茶灰色砂質土層からは瓦類の出土がめだった。五条北条間路の明確な遺構は、今回の調査では検出できなかったが、地山層の淡黄色粘土層は、第16次調査地と同じく南方へ低くなっており、元興寺旧境内のうち主要伽藍地区は丘陵最頂部に位置し、旧地形は、五条北条間路以南で低くなり、この傾斜地に五条北条間路が存在したものとみることができよう。（森下恵介）

第21次の調査

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市西新屋町15・16番地における加藤立久氏届出の住宅建設に伴い実施した。当該地は元興寺の主要伽藍のうち金堂跡に相当する。金堂の調査はかって昭和49年に奈良県教育委員会によりなされ、基壇や花崗岩製の礎石が検出された。その礎石の位置関係や柱間寸法の検討から基壇の復原が試みられ、南北90尺（約27ｍ）、東西140尺（42ｍ）前後に想定するなど大きな成果を得ている。今回の調査地は昭和49年の調査地の西に接しており、敷地の東縁には基壇の一部が想定されているので、まず敷地東半に東西4.0ｍ、南北8.0ｍ（32㎡）の発掘区を設定し調査を開始した。だが、当初の発掘区内では基壇西端が確認できないことが判明したので、後に西へ5㎡分拡張した。調査期間は平成元年9月7日から10月13日までである。

Ⅱ　検出遺構

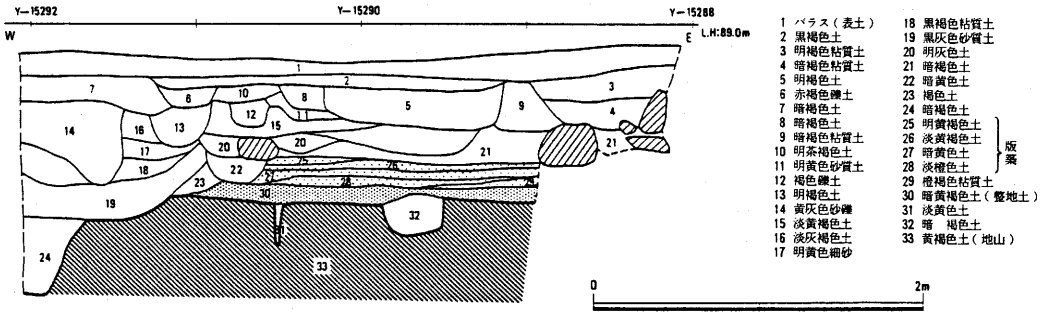
発掘区内の層序は、17世紀頃から現代にいたる間の土坑、撹乱などの重複で、複雑な様相を呈している。基本的には昭和49年の調査区内の層序と同じで、表土の下、黒褐色土（約40㎝）、暗褐色土（約20㎝）と続き、現地表面から約60～70㎝で金堂基壇築成土を確認した。さらに下層には暗黄褐色土（約10㎝）が堆積し、黄褐色土の地山にいたる。基壇築成土上面の標高は概ね88.2ｍである。

検出した遺構は金堂基壇、柱穴、埋甕、溝、土坑である。

金堂基壇　残存状態が悪く、発掘区北辺に基壇築成土がわずか15㎝程度残るのみである。地山の上面を暗黄褐色土で整地したのち、3～5㎝を一単位として版築している。5層までを確認した。

柱　穴　発掘区北壁で基壇下層の柱穴1個を確認した。地山上面から掘り込まれているが、出土遺物がないので正確な時期は不明。

埋　甕　ＳＸ02は東西0.9ｍ、南北1.2ｍの長方形掘形の中央に瓦質土器甕が据えられ



発掘区北壁土層図　1／50

ている。甕の口縁部上端は近年の撹乱で壊されていた。17世紀の遺構である。

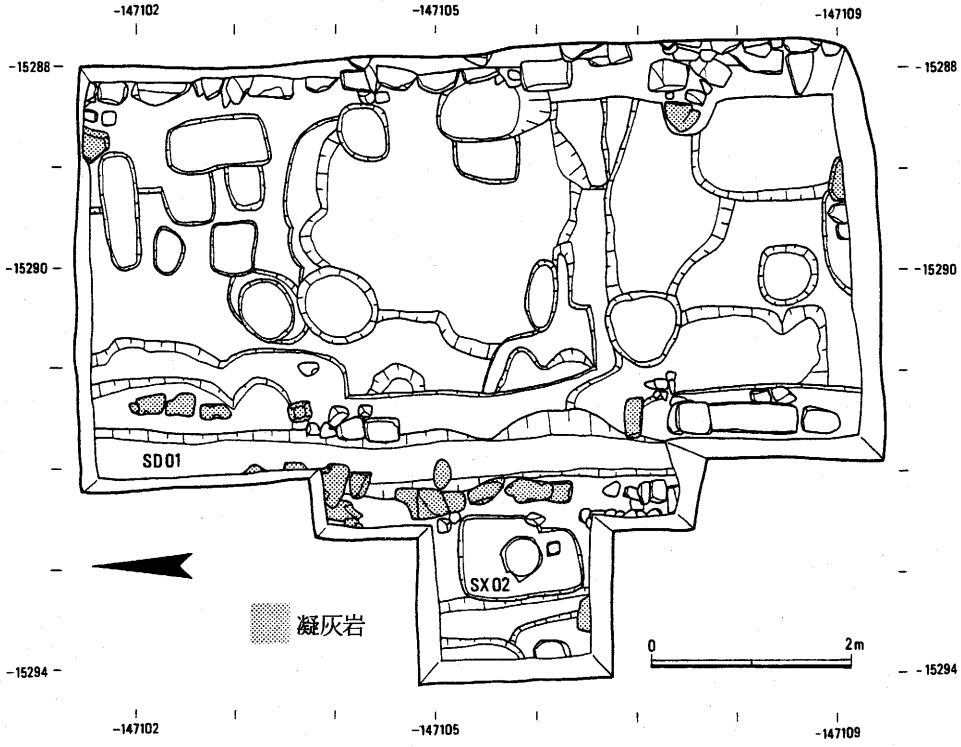
溝　ＳＤ01は幅60㎝、検出面からの深さ40㎝。長さ8.0ｍ分を確認した。溝の両肩には凝灰岩の切石が置き並べられている。この凝灰岩は著しく磨滅しており、原形は復原できない。溝内には暗褐色土が堆積し、16～17世紀の土器が出土した。

土　坑　多くが黒褐色土から掘り込まれ、17世紀代のものが大半である。

Ⅲ　まとめ

今回の調査では金堂基壇築成土の一部を検出したとにいうものの、当初目的とした基壇西端の検出にはいたらなかった。金堂後に多くの遺構が営まれ、基壇の大半が削平された結果である。しかし、溝ＳＤ01の両肩に置き並べられた凝灰岩の切石は、本来基壇化粧に使われたものを転用した可能性が高いことや、今回の発掘区は基壇の範囲にあることなどいくつかの知見を得ることができた。昭和49年の調査で検出された５個の礎石が、いずれも原位置にはなかったり、基壇築成土がわずか数層しか残っていないなど、残りがよくない遺構の調査にあたっては、こうした細かな成果の蓄積が肝要かと考える。今後とも周辺の綿密な調査が期待される所である。　（三好美穂）

注）奈良県教育委員会『元興寺金堂跡発掘調査概報』　1975



発掘区平面図　1 / 80

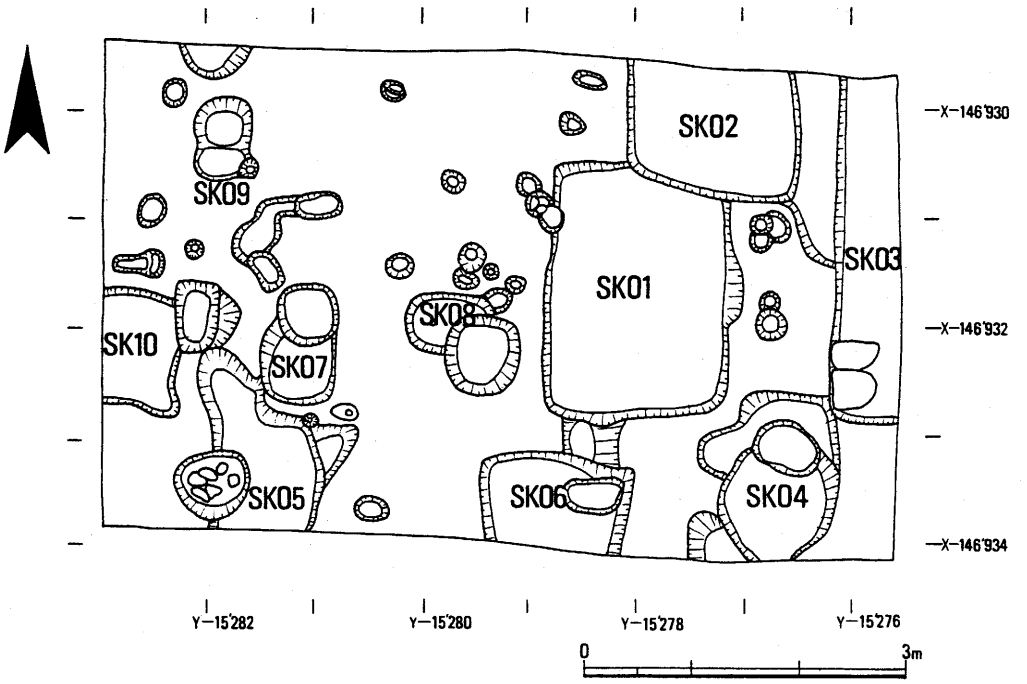
第23次の調査

奈良市勝南院町25番地他における都市計画道路杉ケ町高畑線建設に伴う事前調査である。調査地は、元興寺食堂推定地の南辺中央部で、昭和62年に行った第13次調査地とは、道路を隔て、その西側に位置する。発掘調査は、東西7.5 m、南北4.5 mの発掘区（面積35㎡）を設定し、平成元年12月12日から12月25日にかけて行った。

発掘区の基本的な層序は、現地表から灰色砂質土、褐色砂質土、灰色小礫層、灰色砂質土の順で、地表下約60㎝で地山の黄褐色砂礫層に達する。遺構はすべてこの黄褐色砂礫層上面で検出した。

検出した遺構は、土坑10ケ所と小穴群であり、元興寺食堂に関る遺構はない。土坑のうち、ＳＫ01～03は、平面が長方形を呈し、深さも50㎝以上ある。ＳＫ01、ＳＫ03埋土からは、瓦質土器、陶器、磁器、土師器が出土し、近世以降のものであることがわかる。またＳＫ02からは金属滓とともに土師器皿、土師器羽釜、瓦質土器甕、瓦質土器擂鉢、信楽焼擂鉢など16世紀後半の土器類が出土した。他の土坑も出土遺物から、ほぼ16世紀後半～17世紀初頭のものと考えられるが、土坑ＳＫ05だけは、14世紀末～15世紀初頭に位置づけられる土師器皿、土師器羽釜、備前焼擂鉢などがまとまって出土した。

（森下恵介）



発掘区平面図　1 / 75

5. 称徳陵兆域推定地（西大寺旧境内第４次）の調査

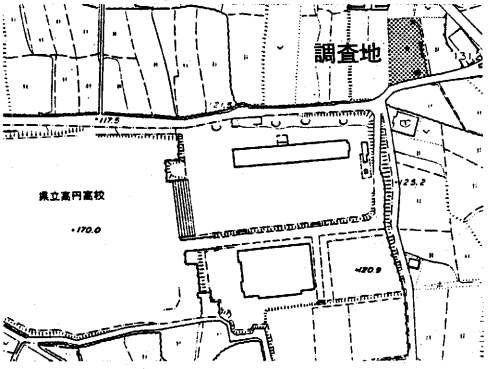
この調査は、奈良市西大寺野神町一丁目６－１所在の奈良市立伏見中学校職員室増築に関わる事前発掘調査である。従来、西大寺の寺地については諸説があるが、各説とも調査地付近に『西大寺流記資材帳』にみえる山陵八町をあてることには異論がないところである。しかし、31町とされる寺地のうち８町を後に山陵として除いたとする考えもあり、現在の遺跡地図はその説をとっている。こうしたことから、この調査の次数は西大寺旧境内と一連の次数としている。調査期間は平成元年５月22日～5月29日、増築予定地には自転車置場が２棟並列してあったので、まずその間の東西３ｍ、南北10ｍの範囲を発掘した。

発掘区内の層序は、現地表から90㎝までは造成土、この下に旧表土である腐触植物層があり、以下暗茶粘質土、茶色粘質土、赤茶色粘質土の順である。現地表から赤茶色粘質土層上面までは1.4ｍある。旧表土以下の土層は遺物をまったく含んでいない。赤茶色粘質土を地山だと考え、その上面で遺構検出を行ったが何らの遺構も検出できなかった。土層の堆積状態その他にも人為的な手が加わった痕跡は見られず、発掘区内は自然の地形を留めているものと思われる。

（西崎卓哉）

6. 高円離宮推定地の調査

奈良市白毫寺町500－3 において、川口シヅエ氏届出の個人住宅建設に先立ち、試掘調査を実施した。調査日は９月４日である。昭和57年に奈良県教育委員会が、近接地で高円高校建設に伴う事前の発掘調査を実施したところ、奈良～平安時代の遺構群が発見された。庭園的な要素を有する遺構のあり方から、これが高円離宮に相当するのではないかと推定されている。今回の試掘調査地は、その北東側の微丘陵上に位置し、遺跡範囲の確認が必要となった。



発掘調査位置図　1／5000

敷地内に３箇所の発掘区を設定して調査したが、遺構は認められず、出土遺物もない。層序は、耕土下に暗灰色土、橙褐色砂礫土、灰茶褐色砂礫土、灰色砂土と続き、地表下約1.0ｍで黄色粘土の地山となる。試掘調査の結果からみて、奈良県調査地の北側微丘陵上には遺構の存在する可能性が少ないものと判断される。

（鐘方正樹）

7. その他の調査

「周知の埋蔵文化財包蔵地」での土木工事で発掘調査が必要とされたもののうち、39件について奈良県教育委員会文化財保存課、奈良県立橿原考古学研究所の指導のもとに、緊急に合同発掘調査を実施した。比較的小範囲の工事であったり、工事が軽易で遺構にはほとんど影響を及ぼさないと考えられるもの、周辺の調査例や、これまでの届出地の利用状況からすでに遺跡が破壊されている可能性が高いものなどである。調査の概要は表にとりまとめて示した。

また、この調査の結果をふまえて、19件（表１）には遺構に影響のないように工事をすること、今後の当該地での土木工事に際してはあらためて埋蔵文化財発掘届出書を提出し、発掘調査に協力すること、さらに当該地の売却等に際しても上記内容を相手方に引き継ぐ旨の指導を行った。

（鐘方正樹）

提出者	提出地	日付	届出時の工事内容
㈱大和フーズグループ	法蓮町380－1	3. 8	共同住宅建設
谷口化学工業㈱	杏町字高橋151－1、152、153、156、157－1	6. 1	店舗新築
木村行雄・好子	法蓮寺東町字上神明73－1・2、76－1	6.15	店舗新築
㈱稔和	宝来町954－1	6.26	事務所新築
大西正晴	西九条町三丁目7－4	6.30	倉庫新築
廣瀬安兵衛	西九条町三丁目1－3	6.30	倉庫新築
奈良市長	法蓮寺町284－1、286－1	7. 1	公用車駐車場造成
成田興産㈱	八条町564－1他33筆	7.13	ゴルフ場新築
松岡嘉平治	大安寺町527－1	9.12	青空駐車場造成
㈱三和住宅	八条町470－3、471－1、472－2	10.11	配送センター建設
㈱奈良そごう	三条大路二丁目565、561－2	10.27	青空駐車場造成
西田勝己	杏町390－2	11. 7	青空駐車場造成
㈱魚宇	小西町5	12.21	ビル新築
中村孝	法蓮町570－5	1.20	店舗付共同住宅建設
伊藤繁雄	山陵町字南代100	1.22	青空駐車場造成
大西庄司	大安寺町69－1	1.23	青空駐車場造成
森中賢	三条大路一丁目634－3	2.21	店舗付住宅新築
福山明	法華寺町字大芝210－1	2.28	青空駐車場
福山明	法華寺町字堂ノ前56	3. 8	青空駐車場

誓約書提出地一覧表

	遺跡名	届出地	届出内容	調査日	調査概要	届出者
1	左京四条六坊十三坪	脇戸町29	共同住宅	4.12	柱穴・溝（中世）	西田世映子
2	左京五条六坊十一坪（佐伯院）	西木辻十三軒町228～232	共同住宅	4.17	土坑・溝（近世）	西木辻ビル建設準備委員会
3	左京六条東二坊大路	八条町243－1	事務所改築	4.20	東二坊大路々面	㈱奈良市清美公社
4	右京二条三坊九坪	西大寺城本2103	共同住宅	5.12	粘土採集坑	上田　明
5	右京三条四坊十坪	宝来町954－1	事務所	5.18	掘立柱列、土坑	㈱稔和農園
6	左京八条一坊十二坪	杏町高橋151－4他4筆	店舗	5.29	掘立柱建物	谷口化学工業㈱
7	左京二条三坊十一坪	法華寺東町上神明73－1他2筆	店舗	5.31	柱穴	木村行雄・好子
8	左京九条二坊八坪・八条大路	西九条町三丁目1－3	倉庫	6. 6	溝（奈良）、井戸・柱穴（中世）、土坑	廣瀬安兵衛
9	左京九条二坊一坪	西九条町三丁目7－4	倉庫	6. 7	掘立柱建物・列、土坑	大西　正晴
10	左京四条六坊三・四坪	杉ケ町1－3・4、73－1、74－1・2	店舗付共同住宅	6.14	溝（中世）、小柱穴	都　延三
11	左京二条七坊十五坪	今小路町2－1	病院増築	6.15	曲物枠井戸（平安）	桜井病院
12	左京七条二坊一・二・七・八坪	八条町564－1他23筆	ゴルフ練習場	7.11	掘立柱建物	成田興産㈱
13	左京三条三坊六坪	大宮町四丁目459－1	自動車展示場	7.18	遺構未検出	中室　新治
14	左京五条六坊十一坪	西木辻十三軒町228～232	共同住宅	7.24	土坑（近世）	西木辻ビル建設準備委員会
15	左京二条七坊十四坪	押上町36－1、37－1、38－1・2	社宅	8. 1	溝（平安）	三和製菓㈱
16	左京九条二坊一坪	西九条町三丁目8－14・15	共同住宅	8. 4	遺構未検出	柳好知、奥村弘
17	右京四条一坊八坪・西一坊々間路	四条大路四丁目44、47－1・3、52	店舗	8.17	地山落ち込み、坊間路未確認	奥田測量設計事務所
18	赤田横穴群	西大路赤田町一丁目7－1	病院改築	8.24・25	遺構なし	医療法人平和会
19	左京九条三坊六坪	西九条町四丁目1－1	研修所	9. 1	遺構未検出	大和ハウス工業㈱
20	左京三条一坊六坪	三条大路三丁目475－1	店舗	9.18	遺構未検出	仲井　義一
21	左京八条一坊三・六坪	杏町197－3、203－5 205－2、211、216－1	倉庫・事務所	9.20	流路、溝、柱穴	スケーター㈱
22	紀寺跡	西紀寺町35－7、34－11	共同住宅	9.30	溝、土坑（近世以降）	播磨　鉄郎
23	左京三条三坊十二坪	大宮町四丁目250－8 255	共同住宅	10. 4～ 6	掘立柱建物	松山　重博
24	外京二条東七坊大路	押上町12－1	共同住宅	10.12	地山落ち（中世）	辻本　和男
25	左京三条三坊七坪	大宮町六丁目5－6	事務所	10.23	遺構なし	㈱パラツィーナ
26	遺物散布地	秋篠町78－1、84－1	給油所	11.22	粘土採集坑	山文商事㈱
27	興福寺旧境内	登大路町14－5	事務所	12. 5	遺構なし	(社)奈良納税協会
28	左京九条三坊六坪	西九条町四丁目1－1	研修所防火水槽	12.11	溝、土坑	大和ハウス工業㈱
29	興福寺旧境内	小西町5	ビル	12.19	土坑（中世）、溝	㈱魚宇
30	左京一条四坊五坪	法蓮町570－5	店舗付共同住宅	1.11	溝、土坑	中村　孝
31	左京六条二坊十三坪	八条町650－7	事務所	1.17	旧流路	奈良県測量設計協同組合
32	外京五坊五条大路	西木辻町194－1	給油所	1.22	五条大路々面	奈良石油㈱
33	新薬師寺旧境内	高畑町210－1他	やすらぎ苑	1.24	能登川旧流路	医療法人岡谷会
34	左京二条六坊三坪	北市町75－1	共同住宅	1.25	遺構なし	明成商事㈱
35	左京五条六坊十四坪	東木辻町47－1	共同住宅	3. 7	溝（近世）、土坑	板金　善一
36	左京九条二坊七坪	西木辻町三丁目3－17	倉庫	3.12～ 15	掘立柱建物・井戸（奈良）、溝（中世）	堀井　敏孝
37	ベンショ塚	山町塚廻637～640	社	3.13・14	盗掘坑	平井　章文
38	左京一坊五条大路	柏木町地内	道路改良	3.22	五条大路々面	奈良市長
39	左京二坊五条々間路	五条町388－1他	道路改良	3.26	遺構なし	奈良市長

その他の小規模調査一覧表

〈付 論〉

１．平城京右京三条三坊一坪から出土した古墳時代前期の土師器に残存する脂質について

— 第173次調査 —

２．平城京左京二条四坊七坪SX28から出土した須恵器甕に残存する脂質について

— 第174次調査 —

帯広畜産大学畜産環境学科　教授　中野益男

㈱ ズコーシャ総合研究所　長田正宏　中野寛子　福島道広

1. 平城京右京三条三坊一坪から出土した古墳時代前期の土師器に残存する脂質について

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境条件の変化に対しては不安定で、圧力、水分などの物理作用を受けて崩壊していくだけでなく、土の中に住んでいる微生物による生物的作用によっても分解していく。これまで生体成分を構成している有機物が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、生体成分の一部、とくに脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年と云う長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した。[(1)] すべての動植物は体内に脂肪を持っており、これらを構成する脂肪酸およびステロールの組成は動植物の種によって異なる。この化学組成と考古学資料に遺存する脂肪の化学組成とを照合させることで"脂肪の持主"を特定しようとするのが残存脂肪分析である。この「残存脂肪分析法」を用いて、土師器の性格を解明しようとした。

1. 土師器および土壌試料

古墳時代前期の竪穴住居址SB01の南壁中央の小土坑SX07に土師器壷Ⅰおよび小型丸底壷Ⅱ、竪穴住居址SB03内のSX08に土師器甕Ⅲが埋置されていた。試料No.は土師器壷本体をNo.SX07－Ⅰ、土師器壷の埋土上層部分をNo.SX07－Ⅰ－A、埋土下層部分をNo.SX07－Ⅰ－B、小型丸底壷の埋土上層部分をNo.SX07－Ⅱ－A、埋土下層部分をNo.SX07－Ⅱ－B、土師器甕埋土上層部分をNo.SX08－Ⅲ－A、埋土下層部分をNo.SX08－Ⅲ－Bとした。

2. 残存脂質の抽出

土師器壷試料1450ｇと土壌試料34～759ｇに3倍量のクロロホルムメタノール（2：1）混合溶液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し、残存脂質を抽出した。処理液をろ過後、残渣に再度クロロホルム－メタノール混液を加え、再び30分間超音波処理をする。この操作を更に2回繰り返して残存脂質を抽出した。得られた全抽出溶媒に、1％塩化バリウムを全抽出溶媒の4分の1容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂質を分離した。

残存脂質の抽出率を表1に示す。残存脂質抽出率は0.0002～0.0118％（湿重）、平均0.0039％であった。この値は平城京左京（外京）五条五坊十一坪から出土した胞衣壷内埋土試料の平均抽出率0.0199％[(2)]よりは低いが、宮城県郷楽遺跡から出土した埋設土器の平均0.0013％、同じく埋設土器内の土壌試料の平均0.0062％や東京都新宿区立歴史博物館所蔵

の胞衣処理用カワラケ内の土壌試料の平均0.0038%[4]とはほぼ同じくらいで、分析には十分量であった。

残存脂質を構成する脂肪種はケイ酸を薄くガラス板に塗布したケイ酸薄層クロマトグラフィーで検索した。脂肪種は、グリセロールと脂肪酸の結合したグリセリドから誘導されたと推定される。遊離脂肪酸が最も多く、次いで結合型のトリグリセリド、ステロールの順に多く、その他に微量のステロールエステル、長鎖炭化水素および高級アルコールを持つワックスを検出した。このうち脂肪酸とステロールについて分析した。

3. 残存脂質の脂肪酸組成

土師器および土壌の残存脂質に5%メタノール性塩酸を加え、125℃で2時間封管中で反応させて脂肪酸メチルエステルを生成した[5]。この脂肪酸メチルエステルを薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーに供して脂肪を構成する脂肪酸を検索した。

試料の残存脂質の脂肪酸組成を図1に示す。残存脂質から12種類の脂肪酸を検出した。このうち、パルミチン酸(C16：0)、パルミトレイン酸(C16：1)、ステアリン酸(C18：0)、オレイン酸(C18：1)、リノール酸(C18：2)、アラキジン酸(C20：0)、エイコサモノエン酸(C20：1)、ベヘン酸(C22：0)、エルシン酸(C22：1)、リグノセリン酸(C24：0)、ネルボン酸(C24：1)の11種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー質量分析により同定した。

土壌試料の脂肪酸組成をみると、いずれの土師器の埋土も主要な脂肪酸はパルミチン酸で約42～59%を占めていた。次いでステアリン酸、オレイン酸が多く、試料No.SX07－Ⅱ－Bを除きパルミトレイン酸がそれらに次いで多かった。これに似た脂肪酸パターンを持つものに植物腐植がある。一般に植物腐植に残存する脂肪酸はパルミチン酸、パルミトレイン酸、ステアリン酸、オレイン酸の順に多い。しかし、土師器壷および土壌試料の残存脂肪酸では、オレイン酸またはステアリン酸が植物腐植脂肪酸よりも多く含まれる。こういう試料には高等動物の肉、体脂肪、骨油が残存している可能性がある。また高等動物の脳、血液、臓器等に多く分布するアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸等の高級飽和脂肪酸も土師器壷でその合計が約8%、小型丸底壷で約17～19%、土師器甕で約2～12%と、比較的高い割合で分布していた。

土師器本体である試料No.SX07－Ⅰについてみると、土壌試料同様パルミチン酸が最も多く約25%含まれてはいるが、他のパルミトレイン酸、ステアリン酸、オレイン酸もほゞ同等量含まれている。それに対し高級飽和脂肪酸はリグノセリン酸、アラキジン酸、ベヘン酸の順に多く、その合計含有率が約29%と非常に高率であり、高等動物の臓器に類する遺存体の存在を示唆している。

4. 残存脂質のステロール組成

土師器および土壌の残存脂質からステロールをヘキサン－エチルエーテル酢酸（80：30：1）を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジン－無水酢酸を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にしてからガスクロマトグラフィーにより分析した。

残存脂質の主なステロール組成を図2に示す。残存脂質から3～13種類のステロールを検出した。このうち、コレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなど7種類のステロールをガスクロマトグラフィー－質量分析で同定した。

いずれの土壌試料にも、動物に固有に存在するコレステロールが、試料№SX07－I－Aの約8％を除き、約33～70％の高率で含まれているのに対し、植物に固有に存在するシトステロールは約2～8％しか含まれていなかった。これは土壌試料中に動物脂肪が存在していたことを示唆している。土師器本体である試料№SX07－Iについてみると、コレステロールが約24％、シトステロールが約8％の含有量であった。試料中のステロールのうち、動物由来のコレステロールと、植物由来のシトステロールの分布比を表2に示す。土師器および土壌試料のいずれもが、約1.3～23.4という高い分布比を示した。一般に動物性遺存体の存在を示唆する指標値は、土坑で0.6以上[6]、土器・石器・石製品で0.8～23.5をとる[7,8]。従っていずれの試料もその分布比が0.8以上で動物性遺存体の存在した可能性が強い。また、各埋土試料の上層、下層で分けてみても、両者がほゞ同じか、もしくは下層土の方がコレステロール含有量が多く、コレステロールとシトステロールとの分布比でも下層土の値の方が高かった。

5. 脂肪酸組成の数理解析

残存脂質の脂肪酸組成パターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料間の類似度を調べた。同時に前回分析解析を行なった同じ平城京内の左京（外京）五条五坊十一坪から出土した胞衣壷内埋土試料[4]、静岡県原川遺跡の幼児埋葬用甕棺[9]および宮城県摺萩遺跡の再葬墓からの出土試料[10]との類似度も比較した。それらの試料の脂肪酸組成の類似度を相関行列距離にして表した樹状構造図を図3に示す。

土師器壷内埋土試料、小型丸底壷内埋土試料および土師器甕内下層土試料は、平城京左京五条五坊十一坪の胞衣壷および胞衣壷内底部土の相関行列距離と同じ0.1以内の近い距離にあり、A群を形成した。これは、これらの試料が非常に類似していることを示している。土師器甕内上層土試料は原川遺跡の幼児埋葬用土器棺埋土試料と同じC群を形成し、平城京左京五条五坊十一坪から出土した胞衣壷内上層土試料のB群と0.15以内の相関行列距離にあった。土師器壷試料は平城京左京五条五坊十一坪から出土した胞衣壷内下層土と

共にD群を形成しており、A群、B群およびC群とは 0.2 以内の相関行列距離にあり、これらと比較的近いことを示している。また、土師器壷本体および各土師器内埋土試料のいずれもが、人間の骨油試料や摺萩遺跡再葬墓内試料のE群、平城京左京五条五坊十一坪の胞衣壷内中層土試料のF群とは離れた距離にあった。

これらの成績と脂肪酸およびステロール分析の結果を総合すると、土師器壷、小型丸底壷および土師器甕には、胎盤に類する動物体が納められていた可能性が高い。

6. 脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸（炭素数16のパルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20のアラキジン酸以上）との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分により、第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、胎盤、臓器等に由来する脂肪が分布し、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪が分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第3象限から第4象限に移る原点から離れた位置に海産動物が分布する。

土師器壷および土壌試料の残存脂肪から求めた相関図を図4に示す。A群を形成する試料は第2象限の原点から離れた位置に、C群を形成する試料は第2象限の原点から非常に遠い位置に分布した。この位置には高等動物の体脂肪に由来する脂肪が分布する。D群を形成する試料は第1象限の原点から離れた位置に分布した。このA群からD群にかけての位置には高等動物の体脂肪の他に脳、血液、神経組織、胎盤、臓器等に由来する脂肪が分布する。従ってこれらの位置は高等動物の遺存体の存在する可能性が非常に高いことを示している。

これらの成績とステロール分析および先のクラスター分析の結果を総合すると、いずれの土師器にも胎盤に類する動物性遺存体が埋蔵されていたと断定できた。

7. 総　括

竪穴住居址SB01内の土師器壷SX07－Ⅰと小型丸底壷SX07－Ⅱの内部と、竪穴住居址SB03内のSX08土師器甕Ⅲの内部の上層土および下層土いずれの試料からも動物遺存体の残存脂肪酸とコレステロールを検出した。特に下層土のコレステロールは約38～70％の高い含量を示した。また残存脂肪酸のクラスター分析の結果は、土師器壷、小型丸底壷および土師器甕内土壌のいずれもが平城京胞衣壷の残存脂肪酸と類似し、ヒト骨油脂肪酸とは異なっていた。

これらの成績から、土師器に納められていた動物遺存体は、ヒト胎盤であると認定された。

参 考 文 献

(1) 中野益男：「残存脂肪分析の現状」、『歴史公論』、第10巻(6)、1984、pp124。

(2) 中野益男、中岡利泰、福島道広、中野寛子、長田正宏：「平城京左京（外京）五条五坊十一坪から出土した胞衣壷の残存脂質について」、奈良市教育委員会。

(3) 中野益男、福島道広、中野寛子、長田正宏：「郷楽遺跡から出土した埋設土器に残存する脂肪の分析」、『未発表』、宮城県教育委員会。

(4) 中野益男、福島道広、中野寛子、長田正宏：「胞衣処理用カワラケに残存する脂肪の分析」、『未発表』、東京都新宿区立歴史博物館。

(5) M.Nakano and W.Fischer：「The Glycolipids of Lactobacillus casei DSM 20021」、『Hoppe-Seylers Z.Physiol.Chem.』、358巻、1977、pp1439。

(6) 中野益男、伊賀 啓、根岸 孝、安本教傳、畑 宏明、矢吹俊男、佐原 真、田中 琢：「古代遺跡に残存する脂質の分析」、『脂質生化学研究』、第26巻、1984、pp40。

(7) 中野益男：「真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂」、『真脇遺跡－農村基盤総合整備事業能都東地区真脇工区に係わる発掘調査報告書』、能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団、1986、pp401。

(8) 中野益男、根岸 孝、長田正宏、福島道広、中野寛子：「ヘロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」、『ヘロカルウス遺跡』、北海道文化財研究所、第3集、1987、pp191。

(9) 中野益男、幅口 剛、福島道広、中野寛子、長田正宏：「原川遺跡の土器棺に残存する脂肪の分析」、『原川遺跡Ⅰ－昭和62年度袋井バイパス（掛川地区）埋蔵文化財発掘調査報告書』、第17集、財静岡県埋蔵文化財調査研究所、1988、pp79。

(10) 中野益男、福島道広、中野寛子、長田正宏：「摺萩遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」、『未発表』、仙台市教育委員会。

試料 No.	試料	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率 (%)
SX 07－Ⅰ	土師器	1.450.0	16.0	0.0011
SX 07－Ⅰ－A	土壌	397.9	4.2	0.0011
SX 07－Ⅰ－B	土壌	34.2	4.0	0.0118
SX 07－Ⅱ－A	土壌	118.2	7.9	0.0067
SX 07－Ⅱ－B	土壌	43.7	2.5	0.0057
SX 08－Ⅲ－A	土壌	595.7	3.3	0.0005
SX 08－Ⅲ－B	土壌	758.9	3.3	0.0002

表1 土師器および土師器内の土壌試料の残存脂肪抽出量および抽出率

試料 No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール／シトステロール
SX07－Ⅰ	24.17	8.33	2.9016
SX07－Ⅰ－A	8.44	6.64	1.2711
SX07－Ⅰ－B	69.92	8.38	8.3437
SX07－Ⅱ－A	32.81	3.84	8.5443
SX07－Ⅱ－B	38.38	3.03	12.6667
SX08－Ⅲ－A	47.11	2.01	23.4378
SX08－Ⅲ－B	44.35	3.67	12.0845

表2 試料に分布するコレステロールとシトステロールの割合

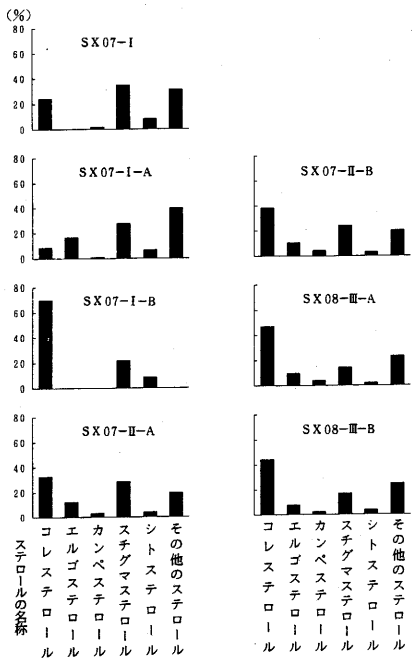


図2　試料に残存する脂肪のステロール組成

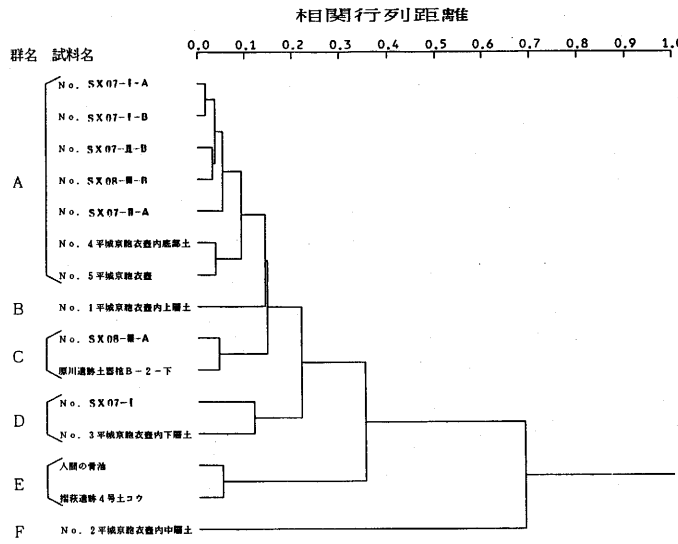


図3　試料に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

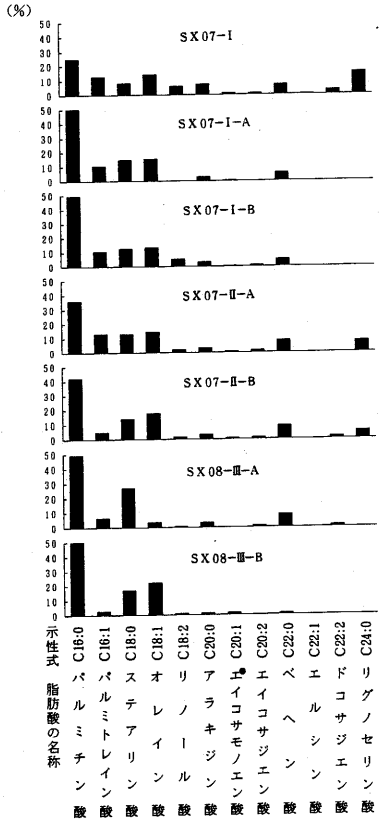


図1　試料に残存する脂肪の脂肪酸組成

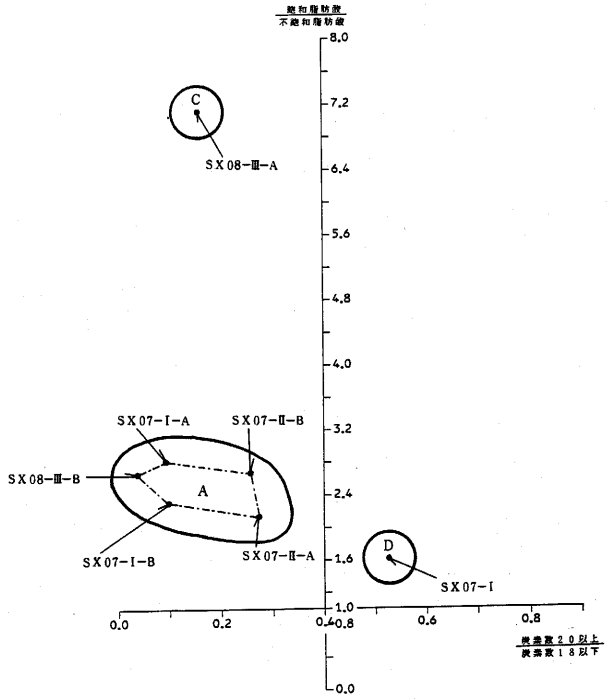


図4　試料に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

2. 平城京左京二条四坊七坪SX28から出土した須恵器甕に残存する脂質について

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境条件の変化に対しては不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊していくだけでなく、土の中に住んでいる微生物による生物的作用によっても分解していく。これまで生体成分を構成している有機物が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、生体成分の一部、とくに脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年と云う長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した。[(1)] すべての動植物は体内に脂肪を持っており、これらを構成する脂肪酸およびステロールの組成は動植物の種によって異なる。この化学組成と考古学資料に遺存する脂肪の化学組成とを照合させることで、"脂肪の持主"を特定しようとするのが残存脂肪分析である。この「残存脂肪分析法」を用いて、須恵器甕の性格を解明しようとした。

1. 土壌試料

SX28 から出土した須恵器甕の中から上層土と下層土を採取した。上層土試料を№ SX28－A、下層土試料を№ SX28－Bとした。

2. 残存脂質の抽出

土壌試料 196～ 202g に3倍量のクロロホルムメタノール（2：1）混合溶液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂質を抽出した。処理液をろ過後、残渣に再度クロロホルムーメタノール混液を加え、再び30分間超音波処理をする。この操作を更に2回繰り返して残存脂質を抽出した。得られた全抽出溶媒に1％塩化バリウムを全抽出溶媒の4分の1容量加え、クロロホルム層と水層に分配し下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂質を分離した。

残存脂質の抽出率を表1に示す。残存脂質抽出率は 0.0014～0.0017％（湿重）、平均 0.0016％であった。この値は平城京左京（外京）五条五坊十一坪から出土した胞衣壷内埋土試料の平均抽出率 0.0199％[(2)]や全国各地の遺跡土壌の平均 0.02％[(3)]よりは低いが、平城京右京三条三坊一坪から出土した土師器内埋土試料の平均 0.0039％[(4)]とはほゞ同じ値で、分析には十分量であった。

残存脂質を構成する脂肪種はケイ酸を薄くガラス板に塗布したケイ酸薄層クロマトグラフィーで検索した。脂肪種は、グリセロールと脂肪酸の結合したグリセリドから誘導されたと推定される遊離脂肪酸が最も多く、次いで結合型のトリグリセリド、ステロールの順

に多く、その他に微量のステロールエステル、長鎖炭化水素および高級アルコールを持つワックスを検出した。このうち脂肪酸とステロールについて分析した。

3. 残存脂質の脂肪酸組成

土壌試料の残存脂質に5％メタノール性塩酸を加え、125℃で2時間封管中で反応させて脂肪酸メチルエステルを生成した。[5] この脂肪酸メチルエステルを薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーに供して脂質を構成する脂肪酸を検索した。

試料の残存脂質の脂肪酸組成を図1に示す。残存脂質から10種類の脂肪酸を検出した。このうち、パルミチン酸（C16：0）、パルミトレイン酸（C16：1）、ステアリン酸（C18：0）、オレイン酸（C18：1）、リノール酸（C18：2）、アラキジン酸（C20：0）、ベヘン酸（C22：0）、リグノセリン酸（C24：0）の8種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー質量分析で同定した。

須恵器甕上層土、下層土ともに主要な脂肪酸は飽和脂肪酸のパルミチン酸で、上層土ではその含有量が約59％に達していた。下層土でもその量は約36％を占めていた。この他飽和脂肪酸のステアリン酸も約11～23％含まれていて、中級飽和脂肪酸だけで全体の約50～90％以上を占めていた。一般に飽和脂肪酸の多いパターン動物体脂肪、植物種子、葉、茎のワックス類に多くみられる。また、高等動物の脳、血液、臓器等に多く存在するアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸といった高級飽和脂肪酸の含有量についてみると、上層土ではベヘン酸、アラキジン酸の順に多く、その合計が約14％となり、リグノセリン酸は検出されなかった。下層土ではリグノセリン酸が約22％と最も高く、次いでベヘン酸、アラキジン酸となり、これら3つの合計は約41％を占めていた。これらの数値から上層土と下層土試料の残存脂肪酸組成は若干異なっていることがわかった。

4. 残存脂質のステロール組成

土壌試料の残存脂質からステロールをヘキサン－エチルエーテル－酢酸（80：30：1）を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジン－無水酢酸を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にしてからガスクロマトグラフィーにより分析した。

残存脂質の主なステロール組成を図2に示す。残存脂質から5～9種類のステロールを検出した。このうちコプロスタノール、コレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールの6種類のステロールをガスクロマトグラフィー－質量分析で同定した。

動物由来のコレステロールは須恵器甕上層土で約8％とわずかであり、下層土では検出されなかった。一般的な植物由来のシトステロールも約11～13％でその含有量は多くはなかった。それに比べて植物の中でもナス科、キク科の葉、茎に多く分布するスチグマステ

ロールは上層土で約52%、下層土では約70%という高率で含まれていた。また哺乳動物の腸および糞便中に特異的に分布するコプロスタノールは全く検出されなかった。試料中のステロールのうち哺乳動物の糞便由来のコプロスタノール、動物由来のコレステロールおよび植物由来のシトステロールの分布比を表2に示す。コレステロールとシトステロール比は上層土で0.7、下層土で0であった。一般に動物性遺体の存在を示唆する指標値は0.6以上[(3)]である。従って上層土に動物性遺体が混入していた可能性はある。しかしコレステロールが約8%と少ないことから、上層土に分布するコレステロールは植物の葉、茎、種子の表皮に分布する微量のコレステロールが残存したものが主成分と推測される。また下層土には全くコプロスタノールとコレステロールが検出されないことから、下層土で検出された高級飽和脂肪酸は植物表皮にあるワックスを構成する脂肪酸に由来するものと思われる。

5. 脂肪酸組成の数理解析

残存脂質の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料間の類似度を調べた。同時に平城京左京（外京）五条五坊十一坪から出土した胞衣壷試料[(2)]、静岡県原川遺跡から出土した土器棺試料[(6)]、宮城県摺萩遺跡からの土壌試料[(7)]および人間の骨油試料に残存する脂肪酸との類似度も比較した。

上記試料の脂肪酸組成の類似度を相関行列距離にして表した構造図を図3に示す。須恵器甕上層土試料No.SX28－Aは平城京左京五条五坊十一坪の胞衣壷内上層土とその距離が0.1以内で類似しA群を形成した。また原川遺跡から出土した土器棺試料のB群とは0.15の距離にあった。須恵器甕下層土試料No.SX28－Bは平城京左京五条五坊十一坪の胞衣壷内下層土とその距離が0.06以内で類似していてC群を形成した。しかしA群とC群との相関距離は0.23もあり、両群は別の系統樹に属していた。またA群に属する須恵器甕上層土試料No.SX28－AとC群に属する下層土試料No.SX28－Bは、ともに胞衣壷と判定された平城京左京五条五坊十一坪からの出土壷や壷内底部土のD群、壷内中層土のF群、人間の骨油や摺萩遺跡の再葬墓土　試料のE群とは全く異なる系統樹を構成していた。このことは須恵器甕に胞衣や人間の骨が埋納されていた可能性は少ないことを示唆している。

このクラスター分析の結果と先の脂肪酸およびステロールの成績から、須恵器甕には動物遺体以外の植物性を中心とした遺物が存在していたと推定される。

6. 総　括

須恵器甕上層土と下層土試料の残存脂肪酸組成は異なり、下層土の方が高級脂肪酸の分布割合が高く、動物体の混入痕跡を示した。しかし、残存ステロール中に動物の遺存体を示すコレステロールは上層土に微量分布するだけで下層土からは検出されず、主として植

物のナス科、キク科の葉、茎に多く分布するスチグマステロールが50%以上で主成分を成していた。また、哺乳動物の腸および糞便中に特異的に分布するコプロスタノールは全く検出されなかった。従って、動物体の痕跡を示す高級脂肪酸は植物のワックスを構成する脂肪酸から来ていると推測される。

これらの成績から、須恵器甕は糞便器として利用された可能性は少ない。今回の分析では、須恵器甕内土壌について調べたが、甕の用途について更に明確な判定を下すためには、土器の側壁そのものを調べる必要があろう。

参 考 文 献

(1) 中野益男：「残存脂肪分析の現状」、『歴史公論』、第10巻(6)、1984、pp124。

(2) 中野益男、中岡利泰、福島道広、中野寛子、長田正宏：「平城京左京（外方）五条五坊十一坪から出土した胞衣壷の残存脂質について」、奈良市教育委員会。

(3) 中野益男、伊賀 啓、根岸 孝、安本教傳、畑 宏明、矢吹俊男、佐原 真、田中 琢：「古代遺跡に残存する脂質の分析」、『脂質生化学研究』、第26巻、1984、pp40。

(4) 中野益男、中野寛子、福島道広、長田正宏：「平城京右京三条三坊一坪から出土した古墳時代前期の土師器に残存する脂質について」、奈良市教育委員会。

(5) M.Nakano and W.Fischer：「The Glycolipids of Lactobacillus casei DSM 20021」、『Hoppe-Seylers Z.Physiol. Chem.』、358巻、1977、pp1439。

(6) 中野益男、幅口 剛、福島道広、中野寛子、長田正宏：「原川遺跡の土器棺に残存する脂肪の分析」、『原川遺跡Ⅰ－昭和62年度袋井バイパス（掛川地区）埋蔵文化財発掘調査報告書』、第17集、財静岡県埋蔵文化財調査研究所、1988、pp79。

(7) 中野益男、福島道広、中野寛子、長田正宏：「摺萩遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」、『未発表』、仙台市教育委員会。

試料 No.	試料	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率 (%)
SX28-A	土壌	202.0	2.8	0.0014
SX28-B	土壌	195.8	3.3	0.0017

表1　試料の残存脂肪抽出量および抽出率

試料No.	コプロスタノール(%)	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール／シトステロール	コプロスタノール／コレステロール
SX28-A	-	7.71	11.3	0.6990	0
SX28-B	-	-	12.76	-	0

表2　試料に分布するステロールの割合

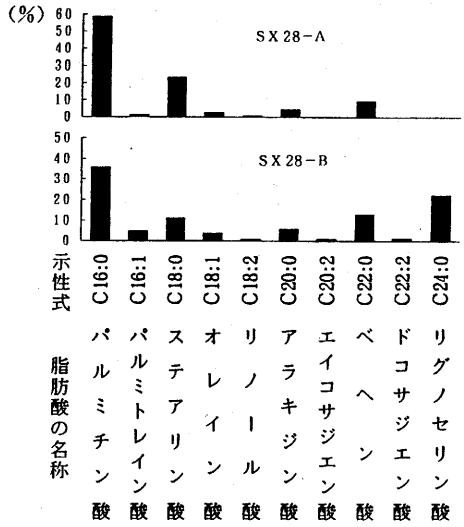


図1　試料に残存する脂肪の脂肪酸組成

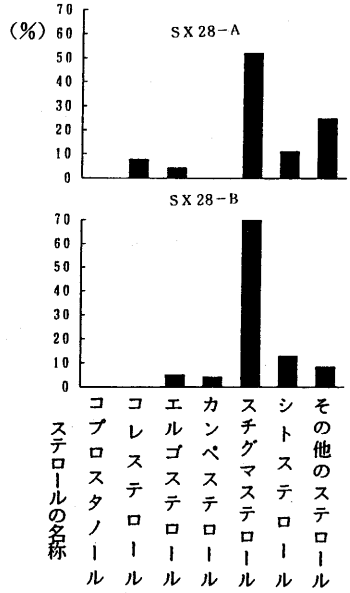


図2　試料に残存する脂肪のステロール組成

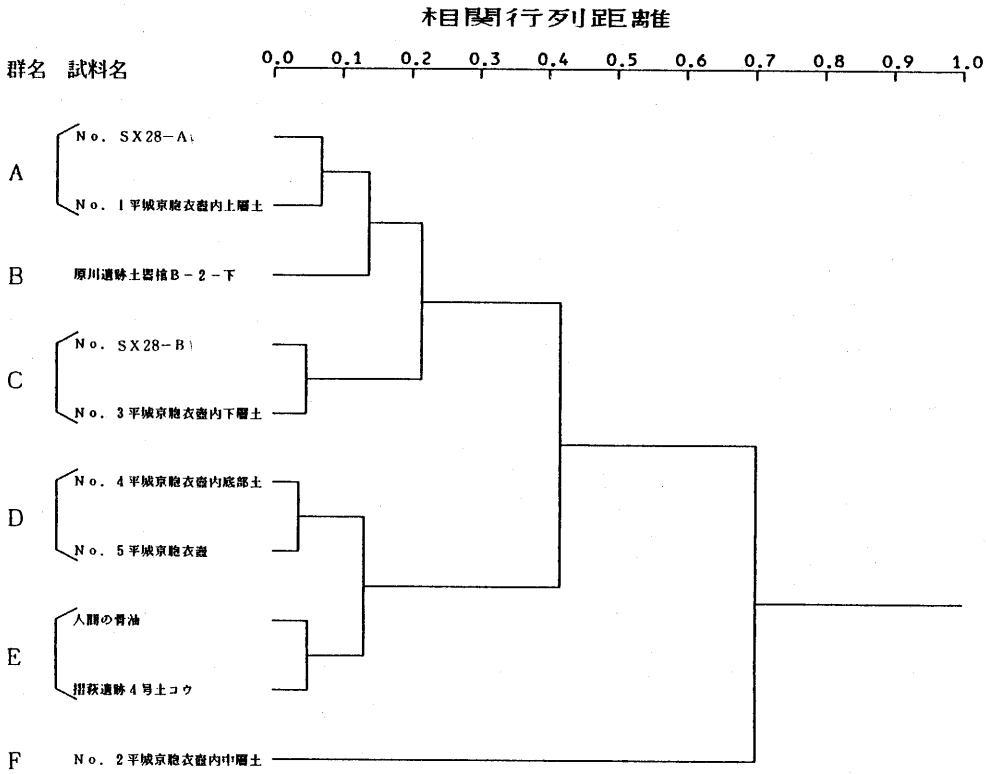
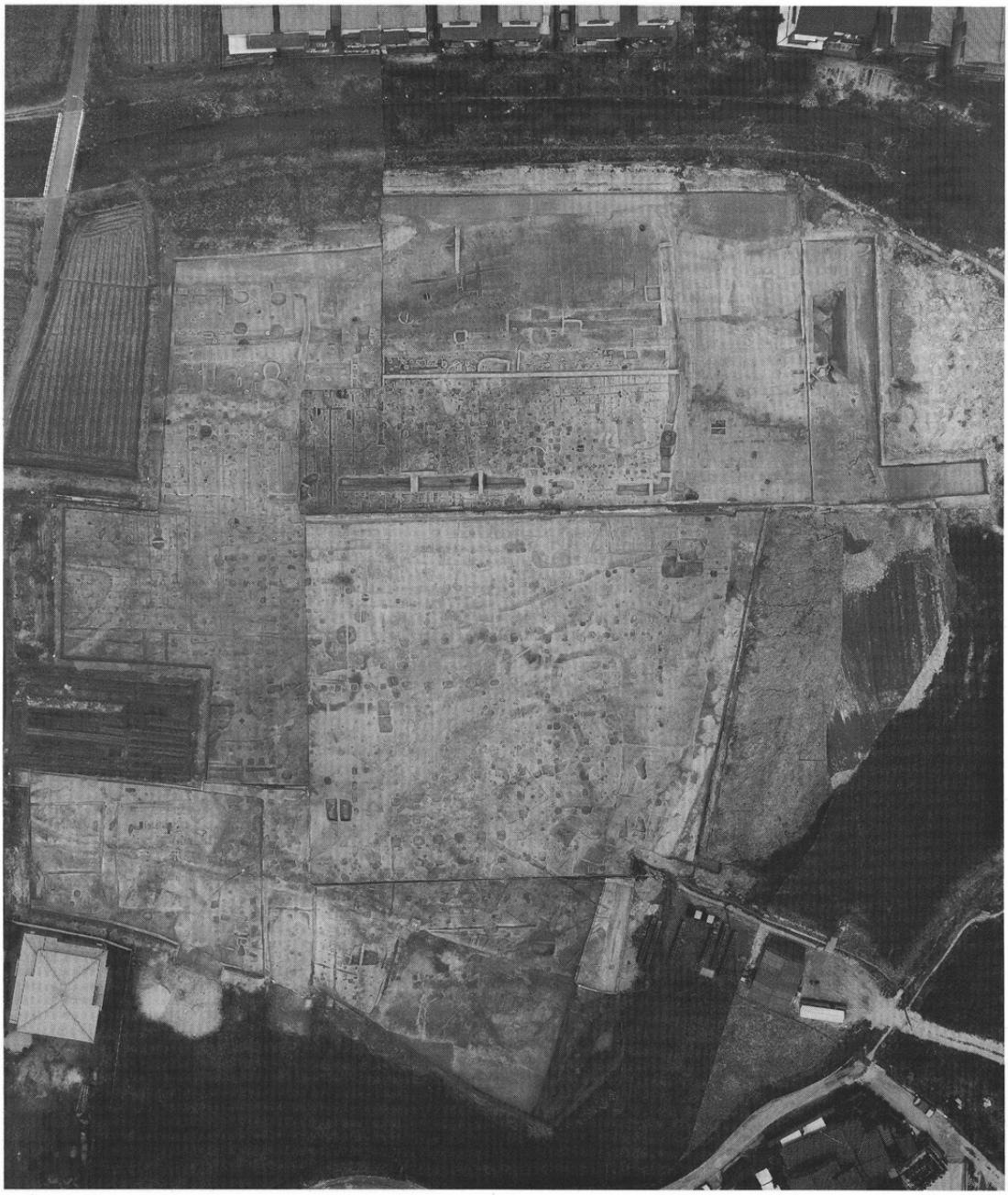


図3　試料に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

図　　版

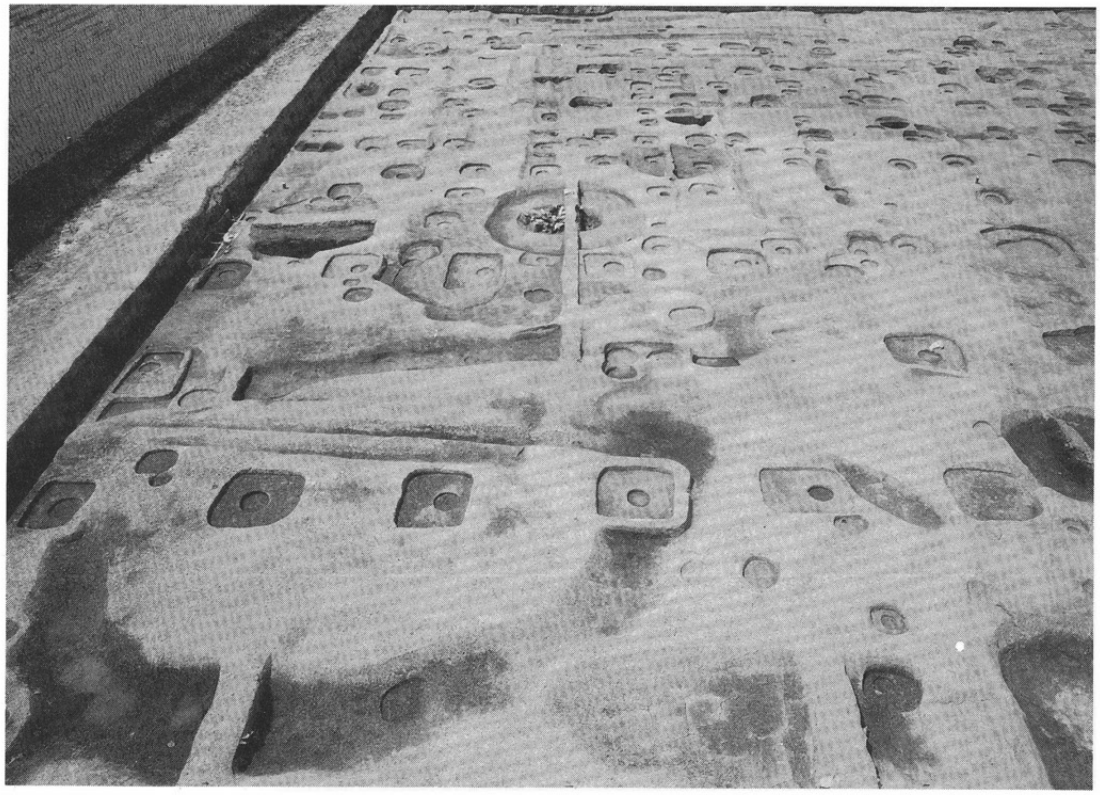
図版1　平城京右京三条三坊一坪　第169・173・182・184次(1)



1.　第169・173・182・184次航空写真

図版2　平城京右京三条三坊一坪(2)　第169・173・182・184次

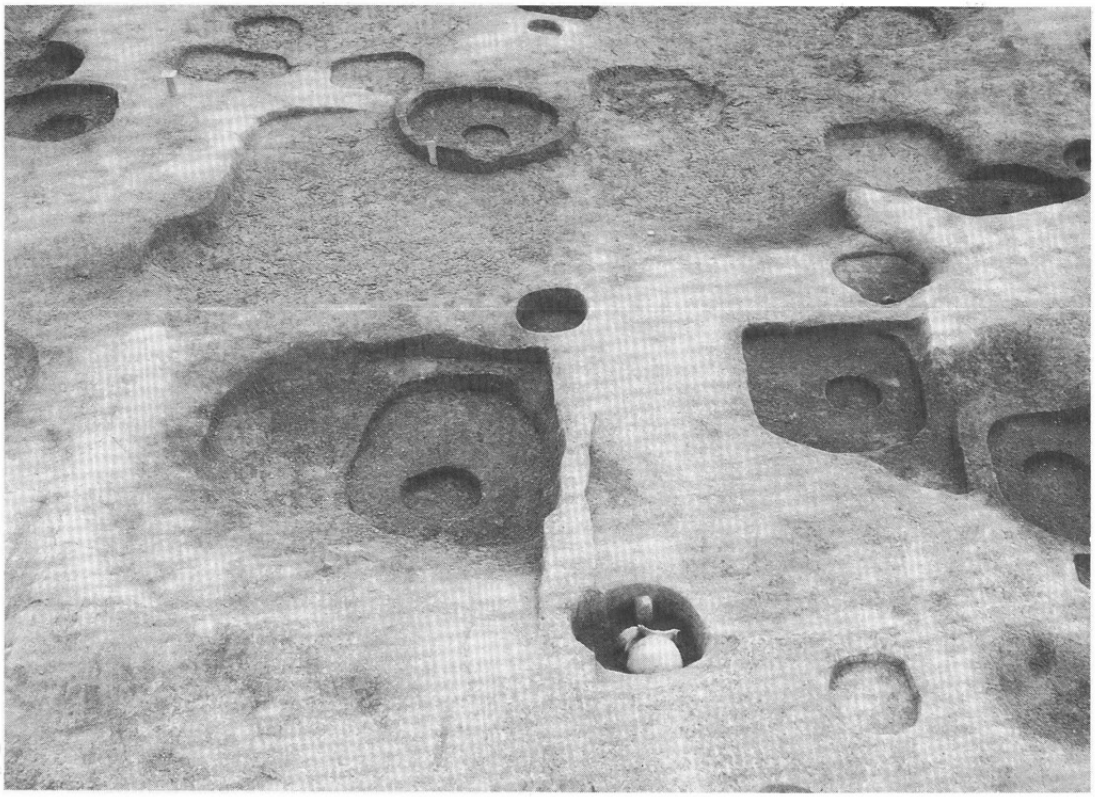
2. 方形周溝遺構　ＳＸ01（東から）



3. 方形周溝遺構　ＳＸ02・03（南から）

4.　方形周溝遺構　ＳＸ04（北から）

5.　方形周溝遺構　ＳＸ05（西から）

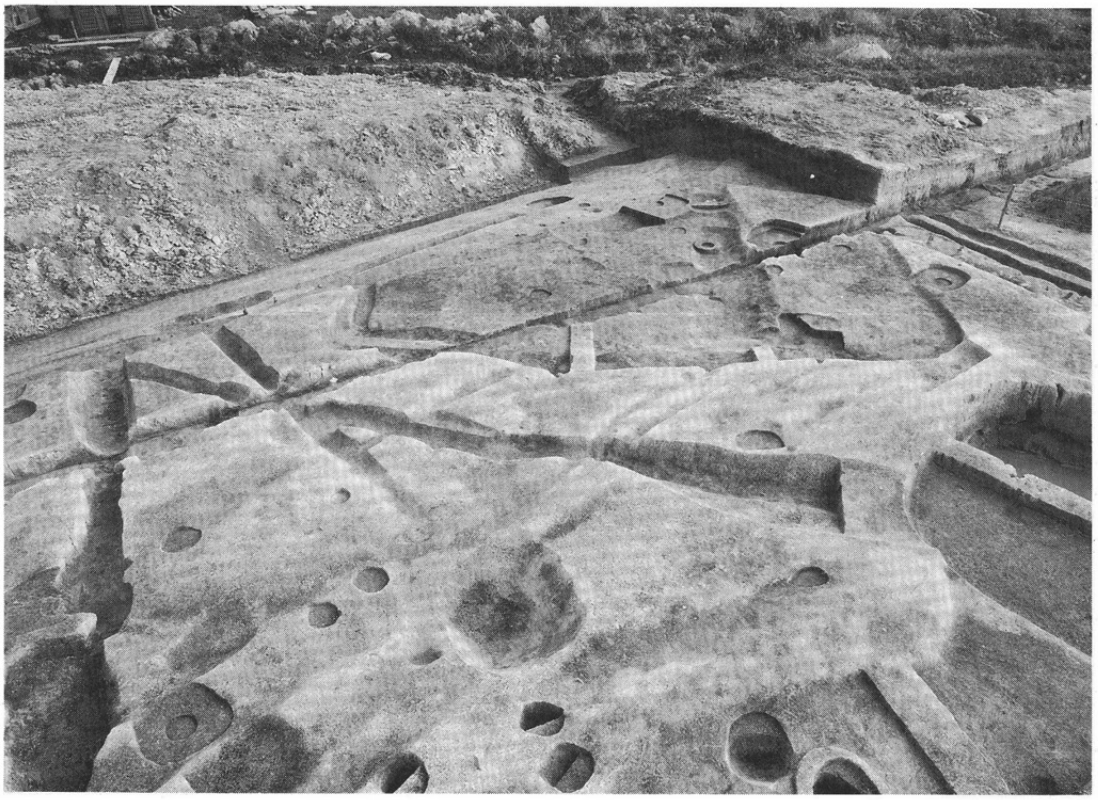


6. 竪穴住居　ＳＢ01・ＳＸ07（北から）

7. 竪穴住居　ＳＢ02・03（西から）

8.　竪穴住居　ＳＢ04・05（西から）

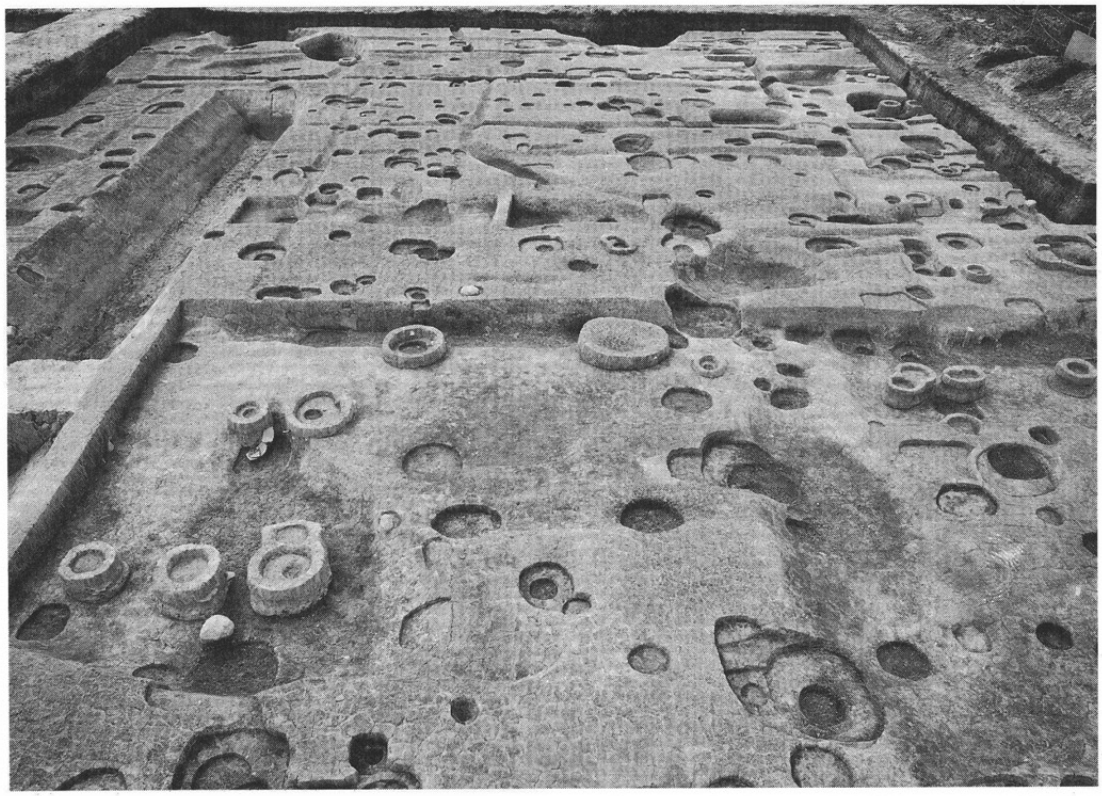
9.　竪穴住居　ＳＢ07・08（西から）



10. 竪穴住居　ＳＢ09・10（北から）

11. 建物ＳＢ14、塀ＳＡ17、土坑ＳＫ59（東から）

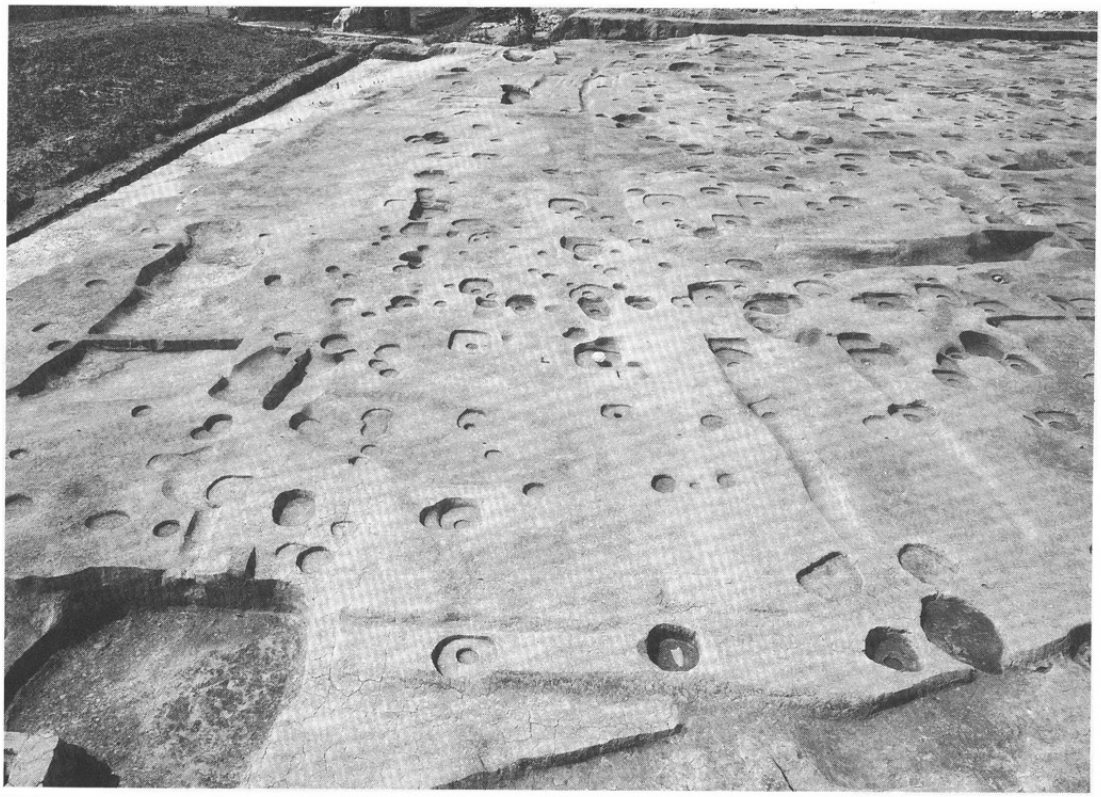
12.　二条大路ＳＦ01、南側溝ＳＤ12、築地ＳＡ01（東から）



13.　溝ＳＤ18・21、建物ＳＢ19（東から）

図版8　平城京右京三条三坊一坪(8)　第169・173・182・184次

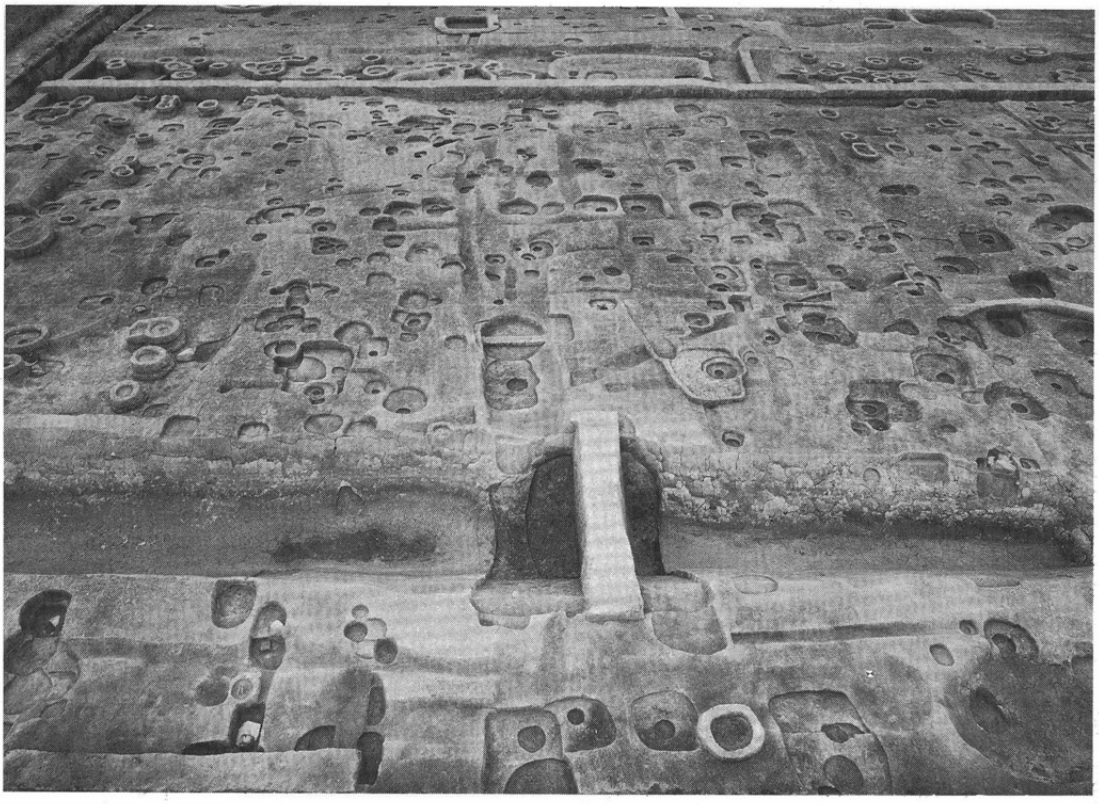
14. 建物ＳＢ50・57、塀ＳＡ10・11・14・15（東から）



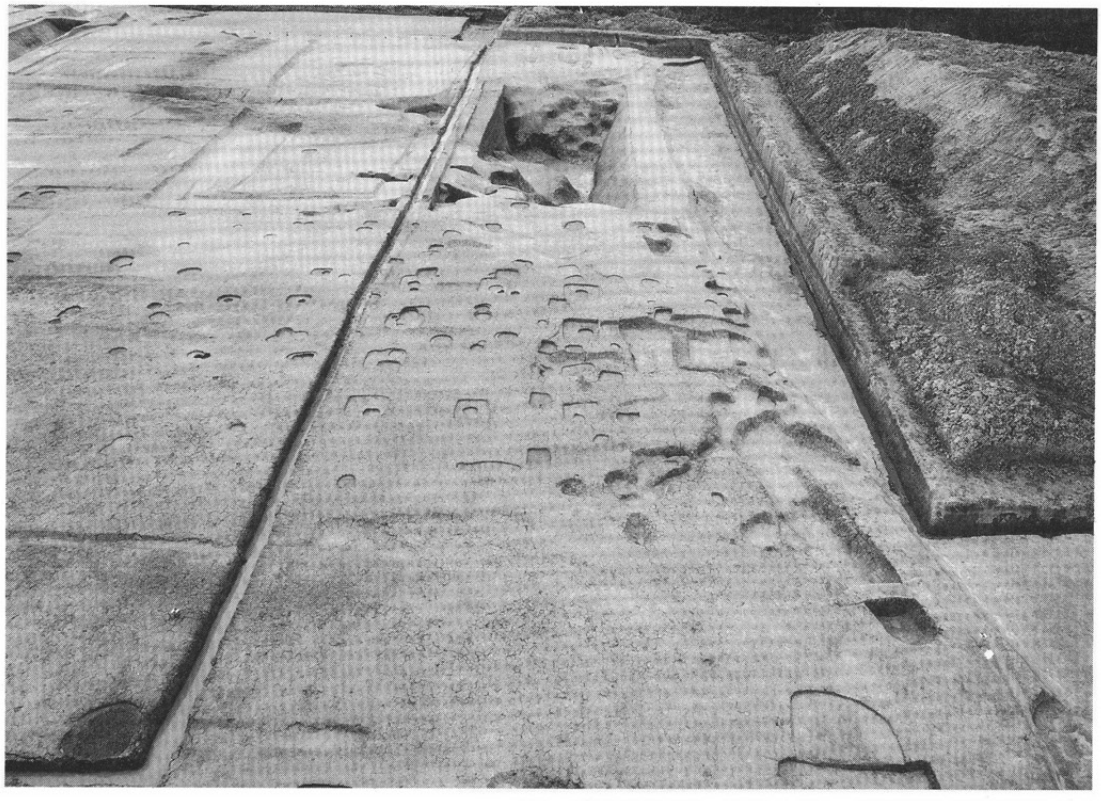
15. 塀ＳＡ11・14・20、建物44（北から）

16.　塀ＳＡ12、建物ＳＢ48・53・54・55（南から）

17.　塀ＳＡ17、井戸ＳＥ18、建物ＳＢ62（西から）



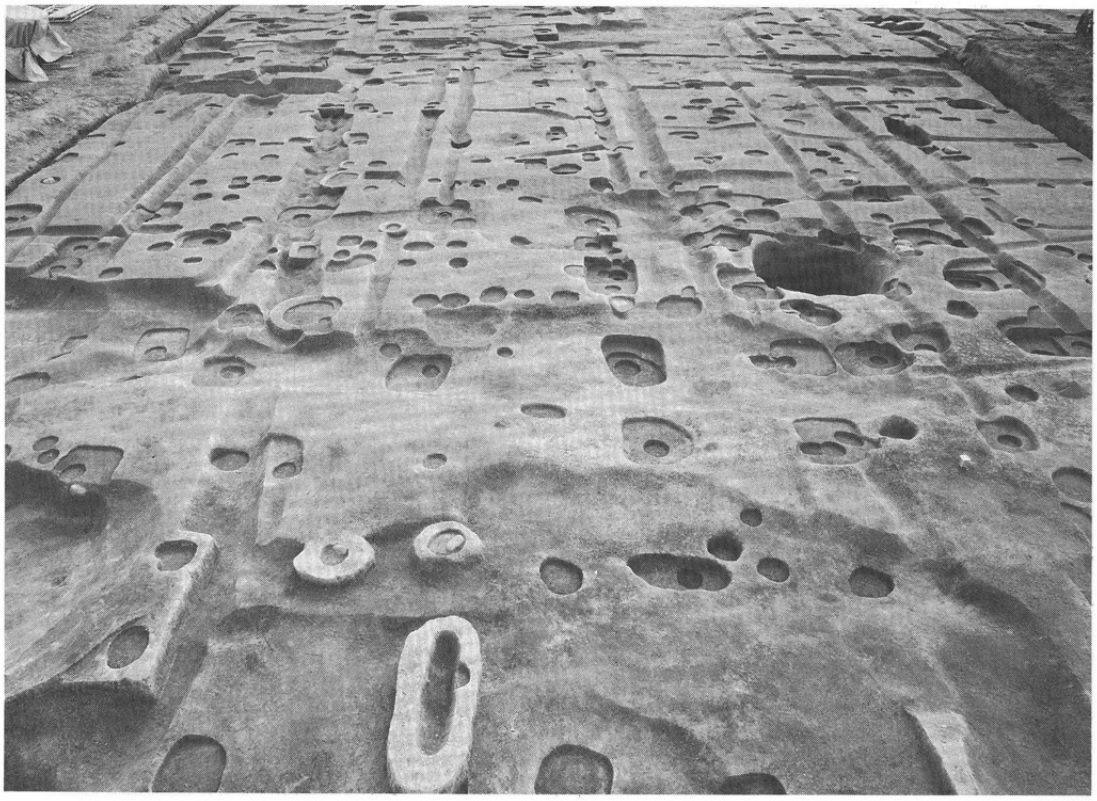
18.　建物ＳＢ21・22・29・30、井戸ＳＥ09（南から）



19.　建物ＳＢ28、塀ＳＡ04、河道ＳＤ28（西から）

20. 建物ＳＢ58・72、溝ＳＤ23・24・25（東から）

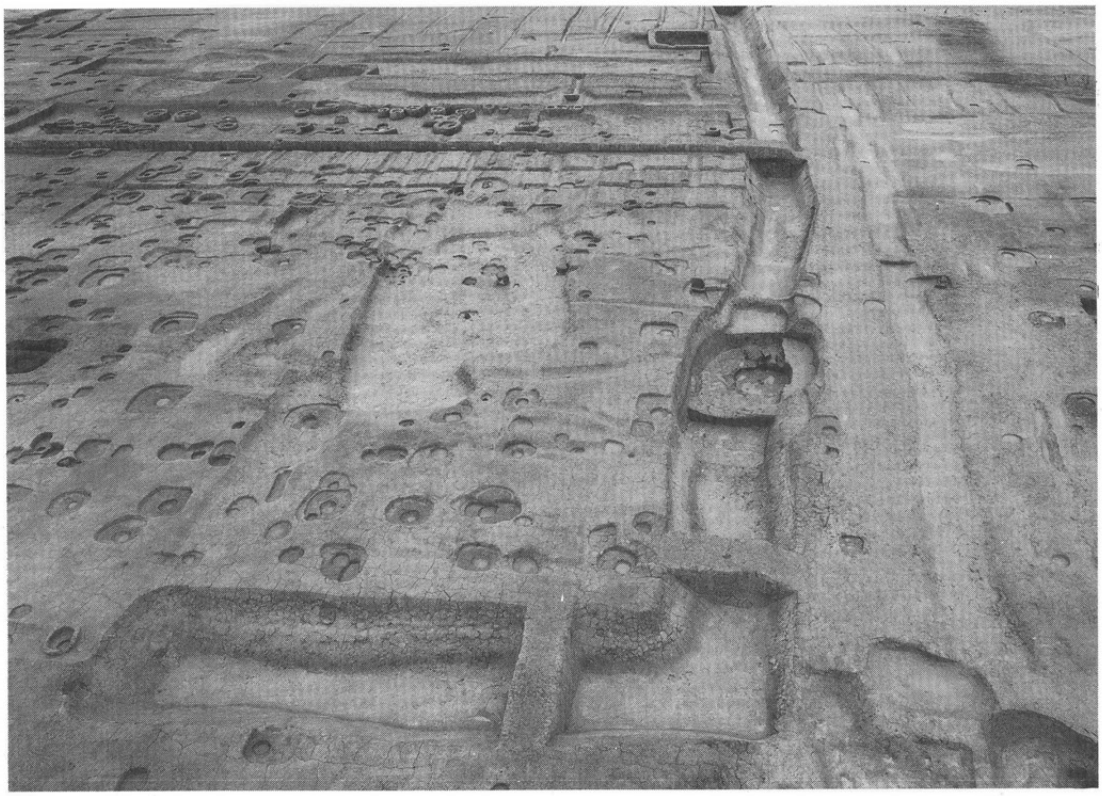
21. 建物ＳＢ70・71、土坑ＳＫ71（西から）



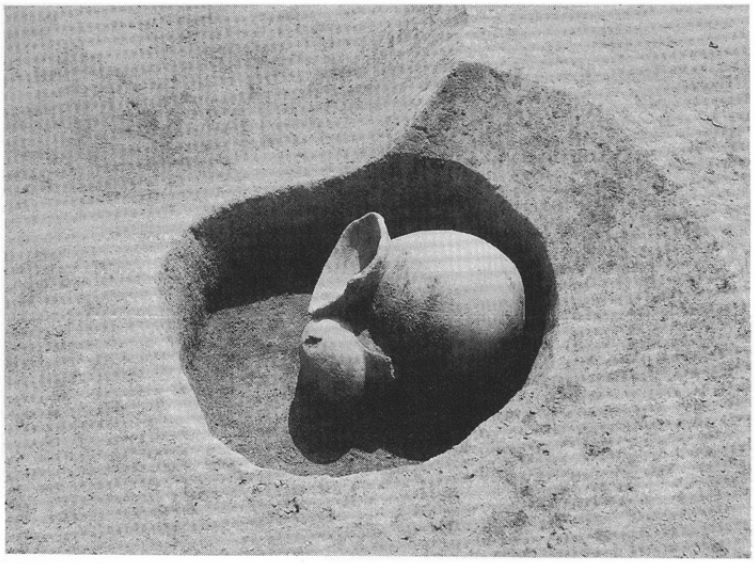
22.　溝ＳＤ16、建物ＳＢ15・16・17（北から）

23.　建物ＳＢ25・26・85・86、土坑ＳＫ99・100（東から）

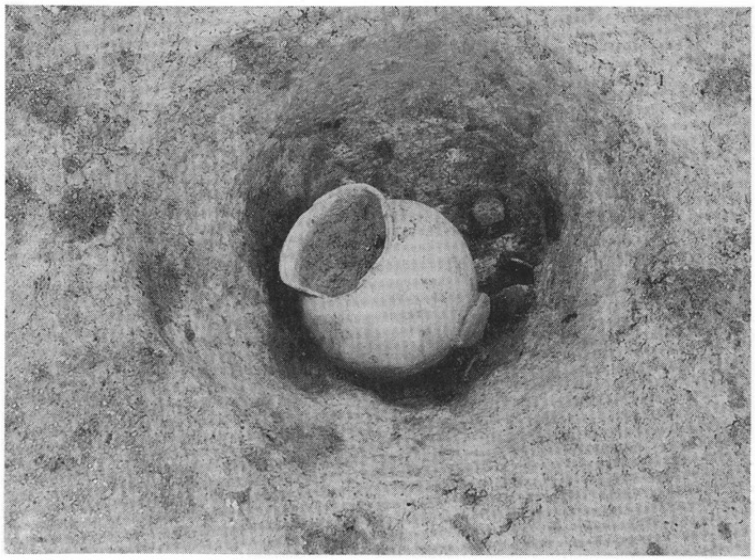
24. 堀ＳＤ36・37（西から）



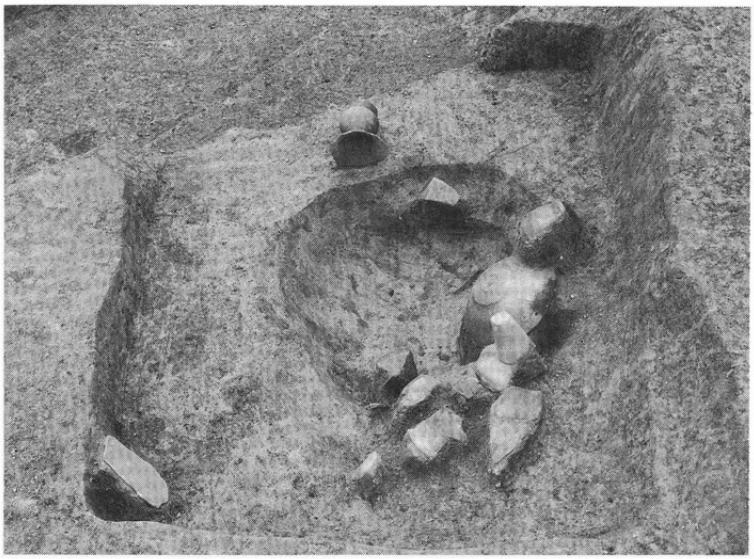
25. 堀ＳＤ35、井戸ＳＥ24・25（南から）



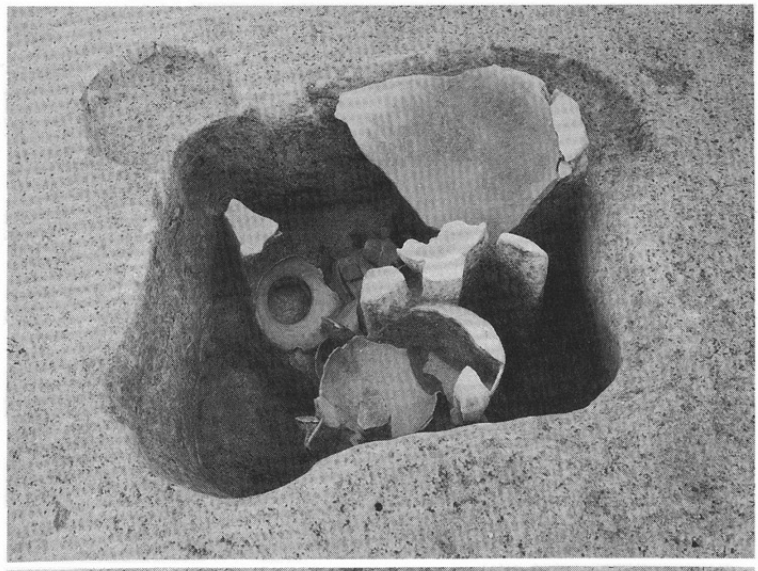
26.　土器埋納遺構ＳＸ07（西から）



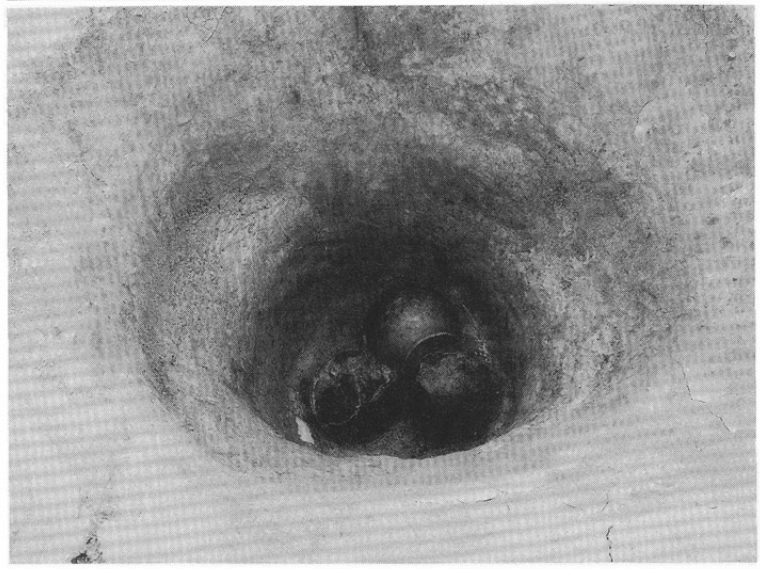
27.　土器埋納遺構ＳＸ08（南から）



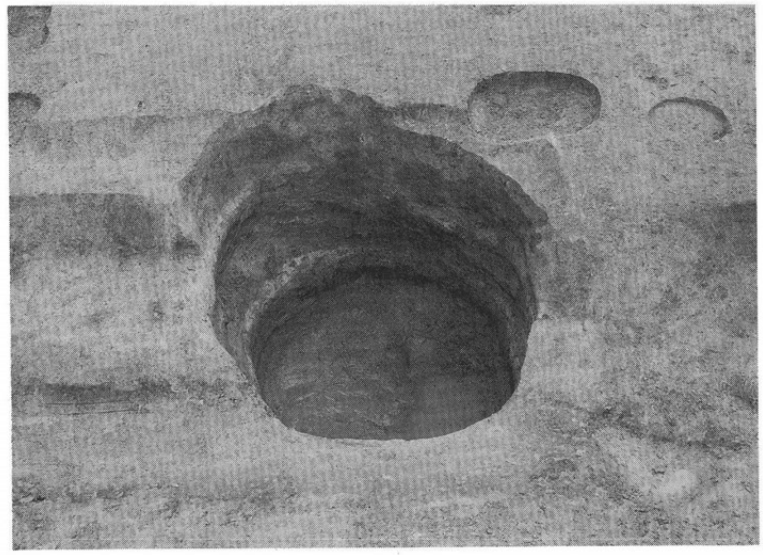
28.　ＳＸ09（東から）



29.　土坑ＳＸ25（南から）

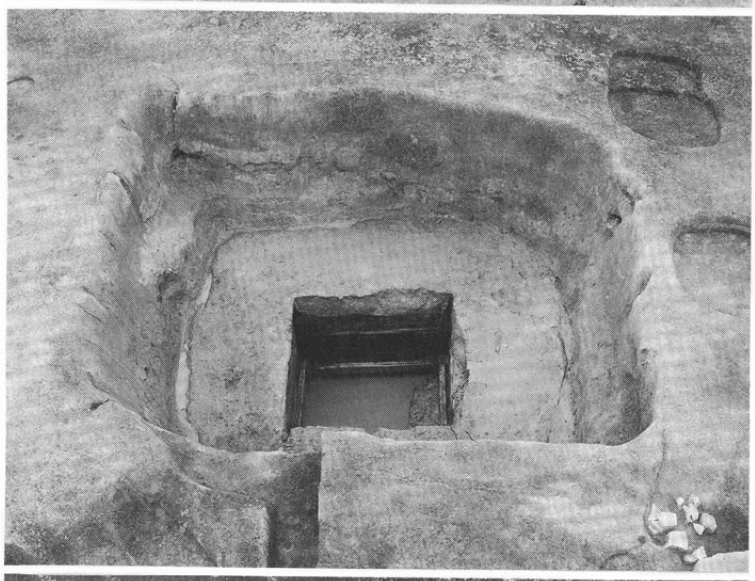


30.　井戸ＳＥ05（東から）

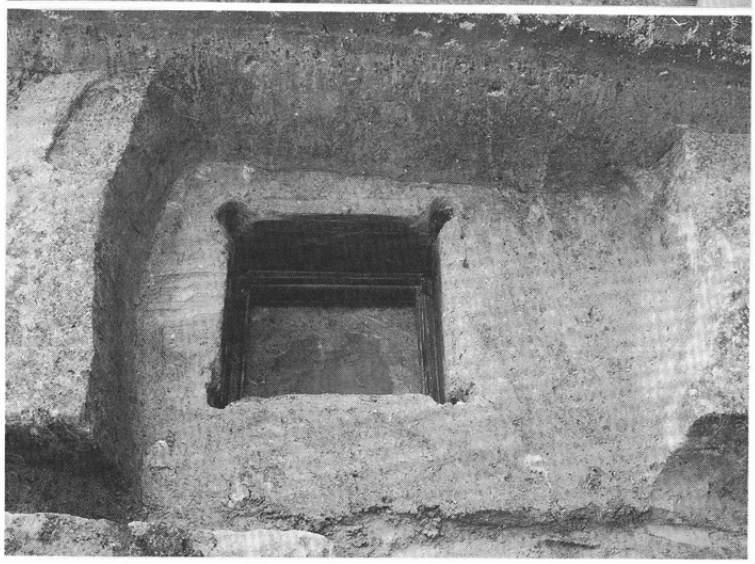


31.　井戸ＳＥ03（北から）

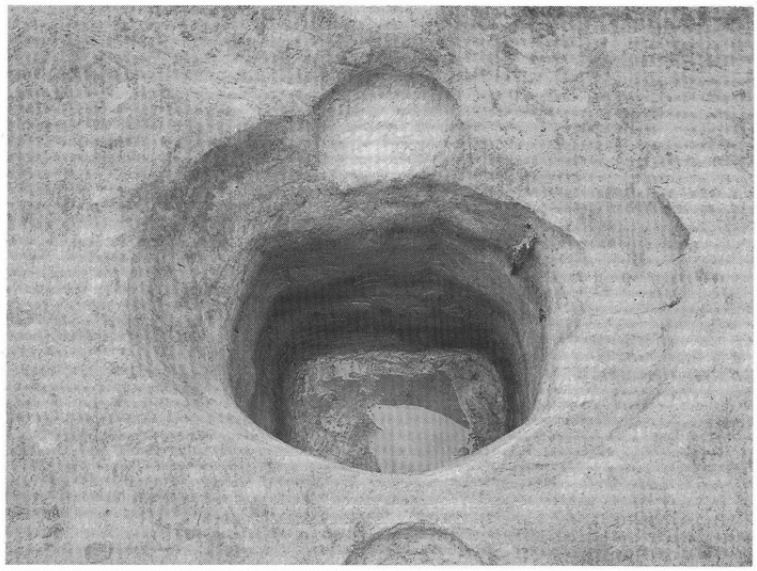
32.　井戸ＳＥ06（南から）



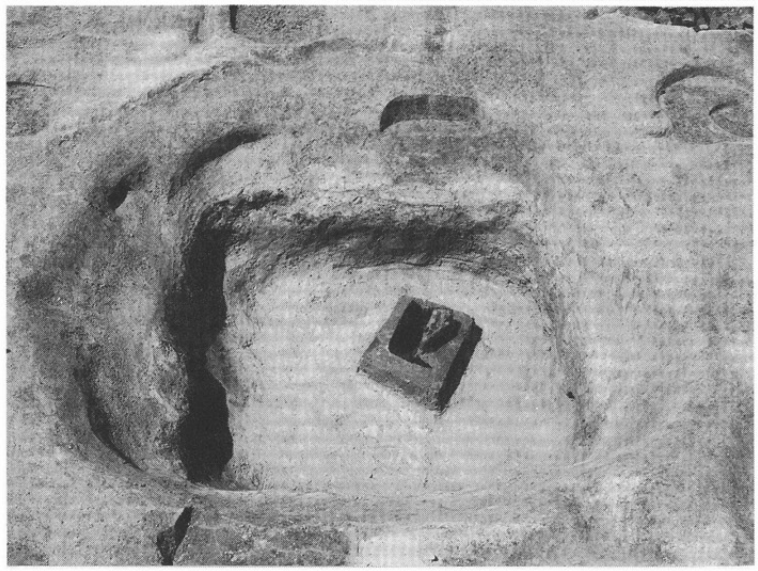
33.　井戸ＳＥ16（南から）



34.　井戸ＳＥ07（東から）



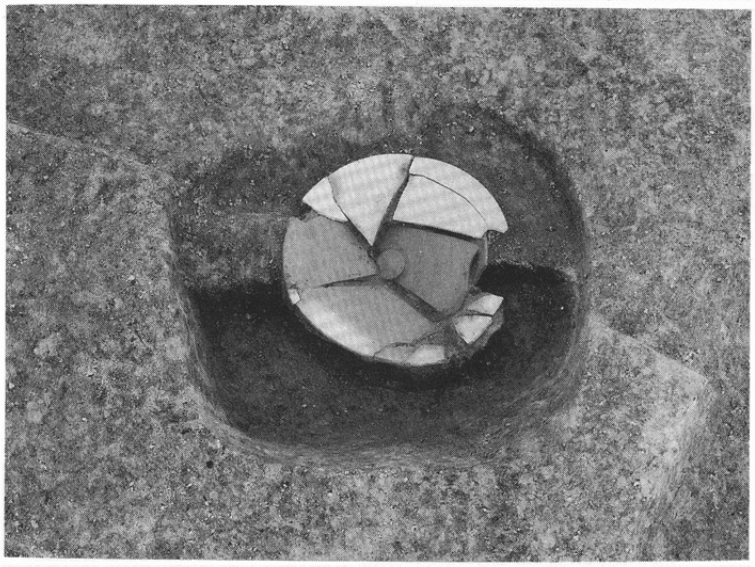
35.　井戸ＳＥ11（南から）



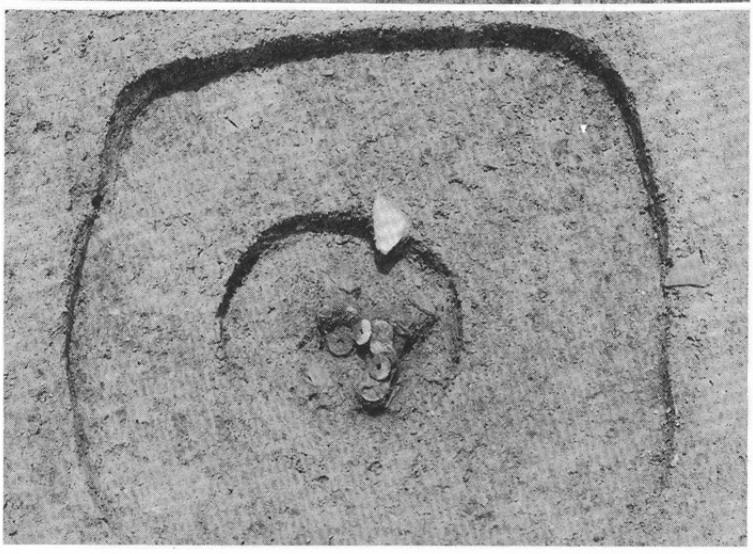
36.　井戸ＳＥ14（南から）

37.　井戸ＳＥ08（南から）

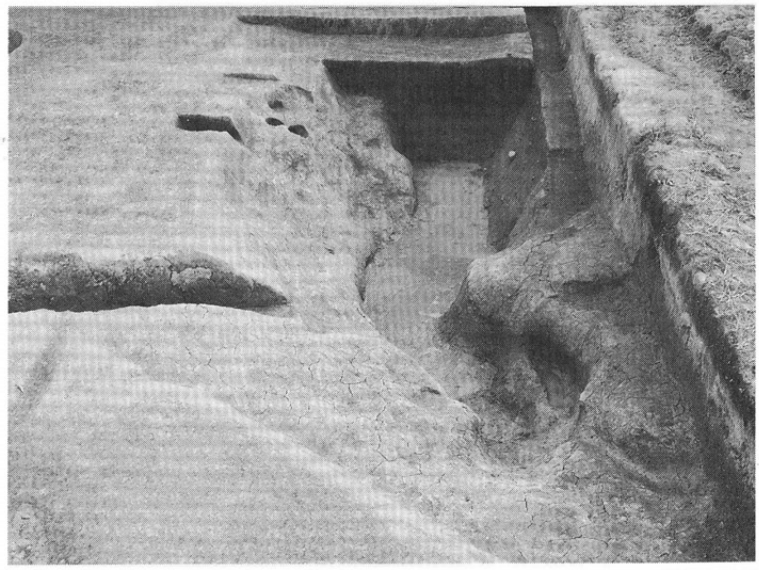
38.　築地暗渠ＳＤ14（南から）



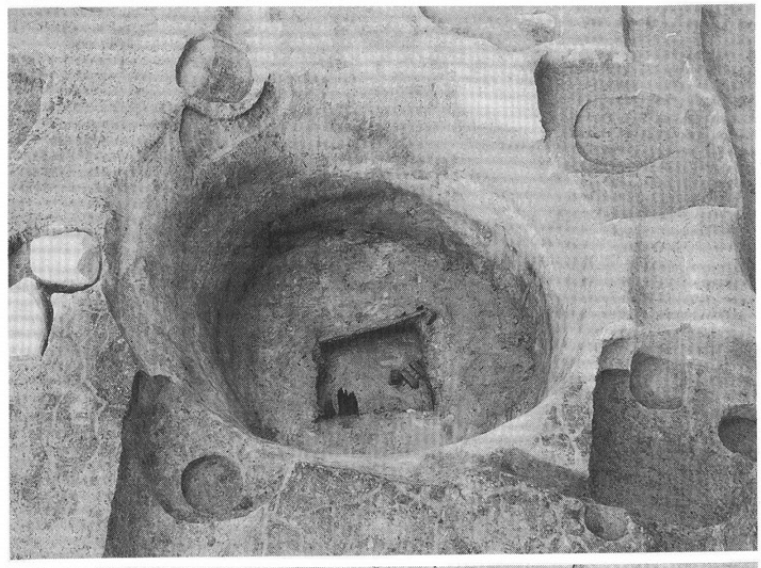
39.　土器埋納坑ＳＸ16（北から）



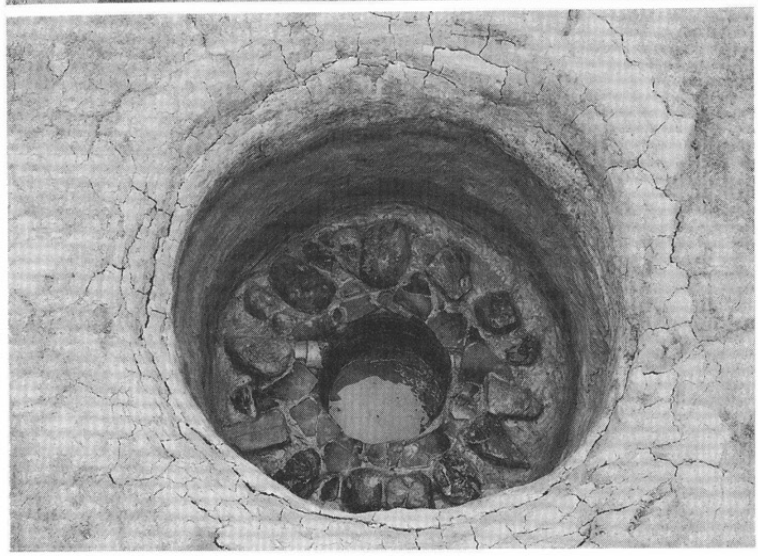
40.　建物ＳＢ42、柱穴出土銅銭（北から）



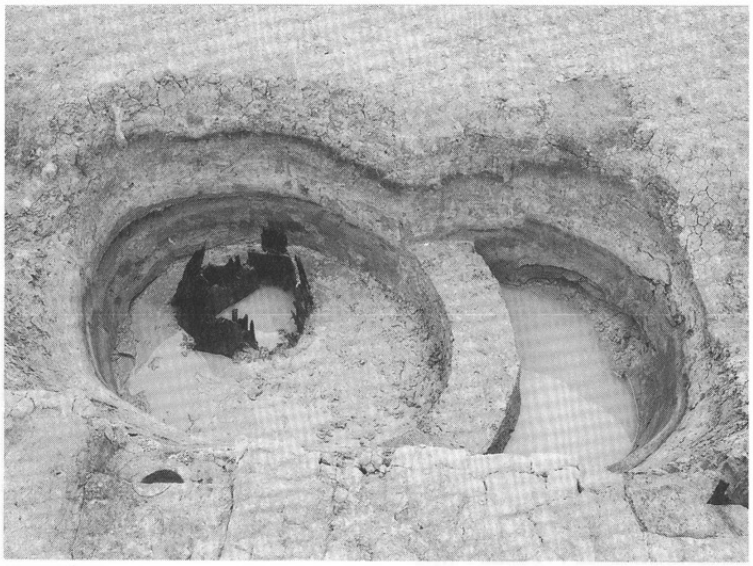
41. 土坑ＳＫ61（北から）



42. 井戸ＳＥ21（南から）



43. 井戸ＳＥ23（南から）



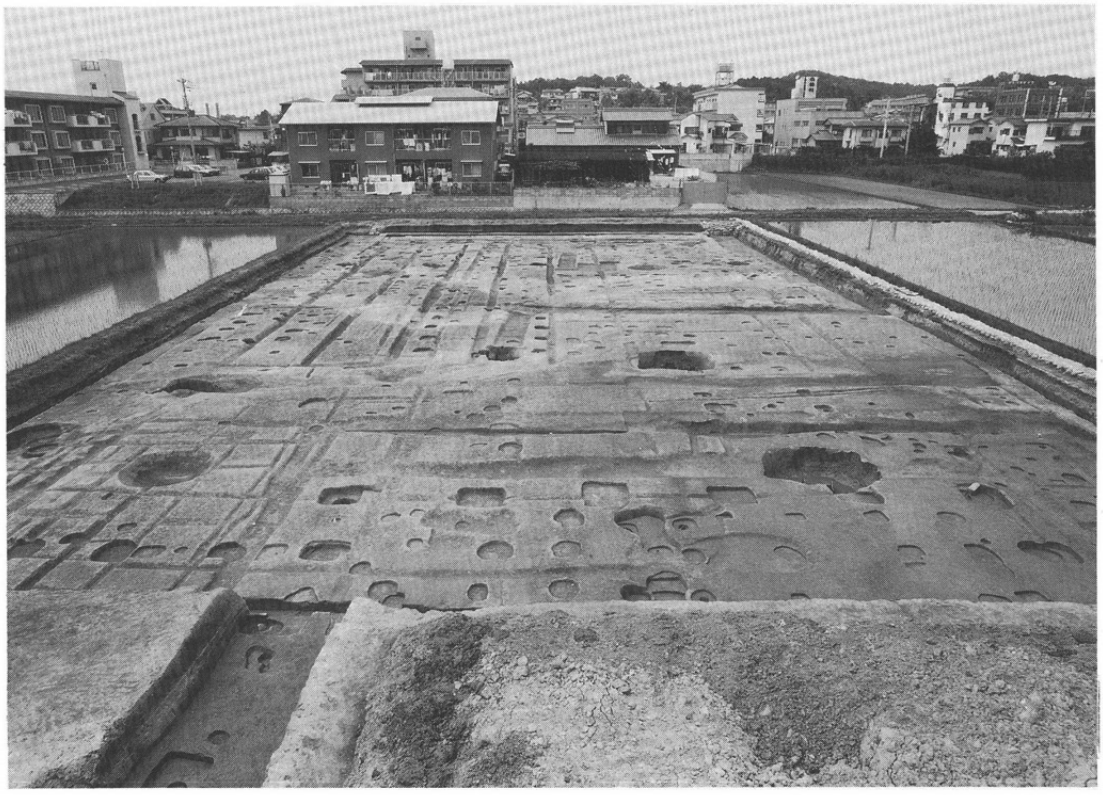
44.　井戸ＳＥ24・25（西から）

45.　土坑ＳＫ83（西から）

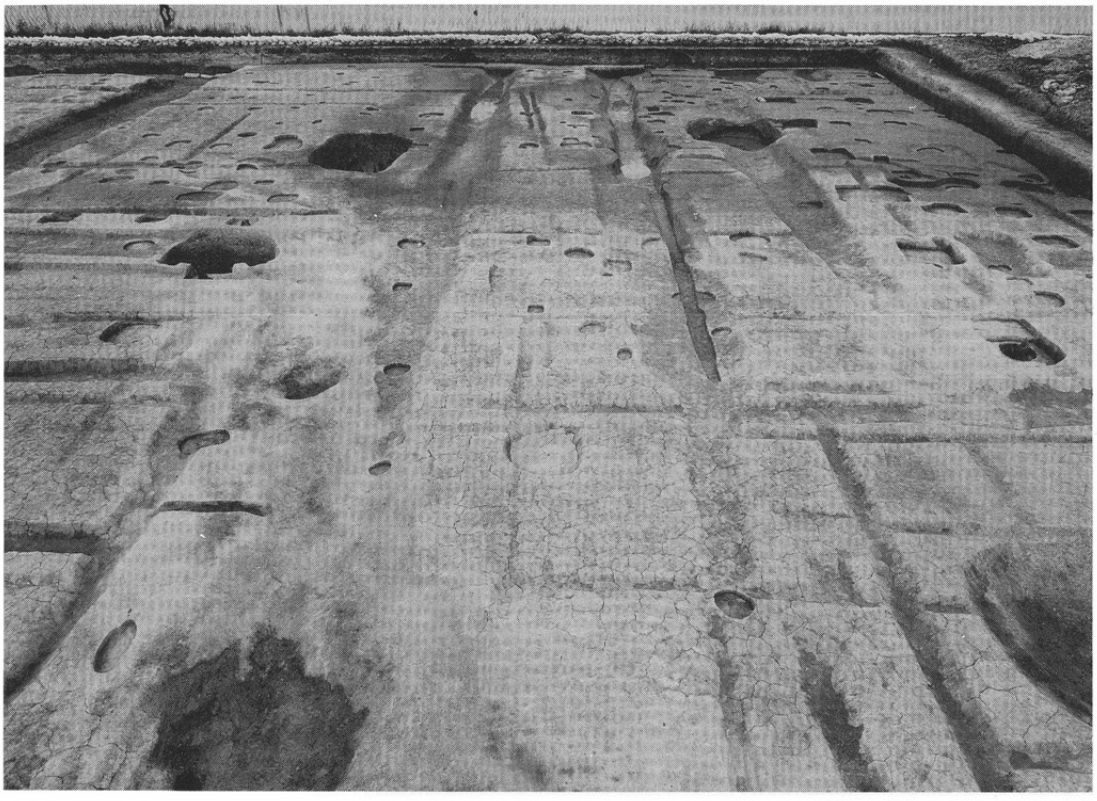
46.　能面出土土坑ＳＫ101
（東から）

図版21　平城京左京二条四坊七坪(1)　第174次

1.　調査地全景（東から）

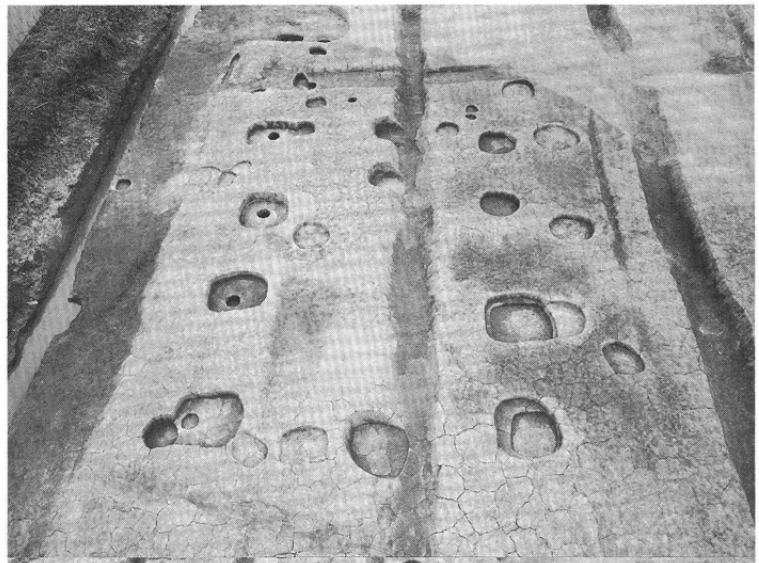


2.　発掘区全景（南から）

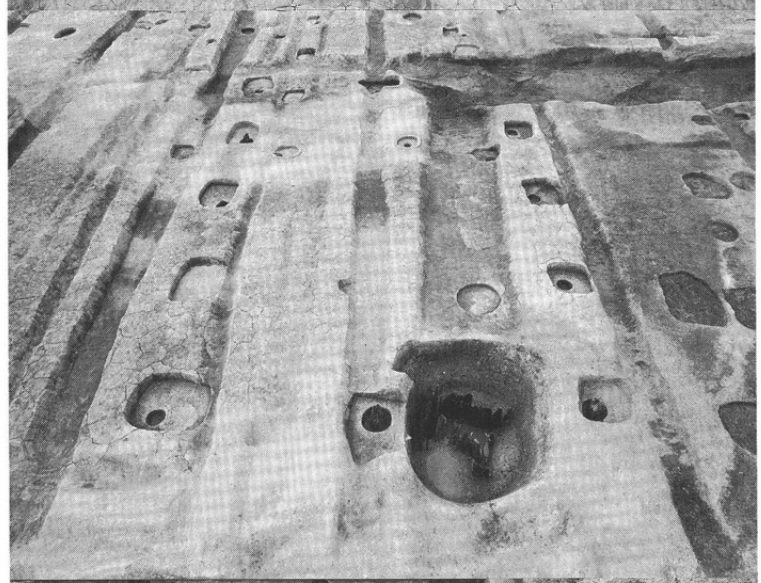


3.　坪内道路ＳＦ05（西から）

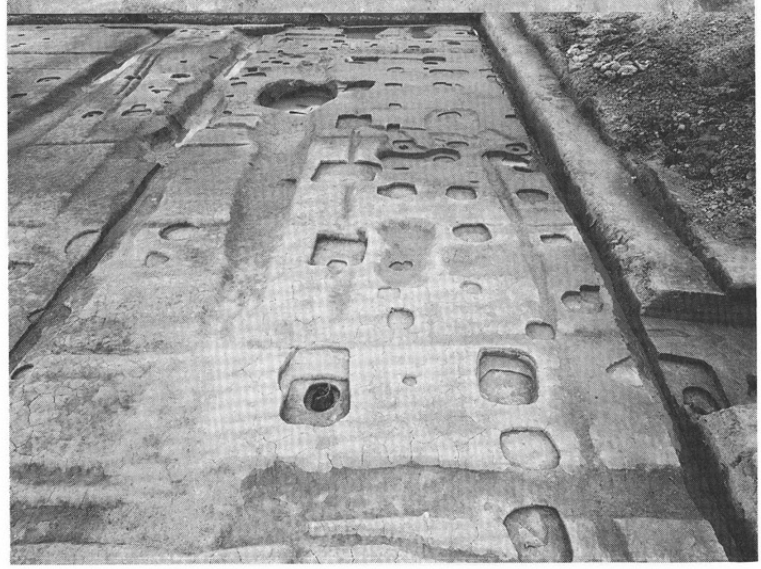
4.　溝ＳＤ01・ＳＤ02（西から）



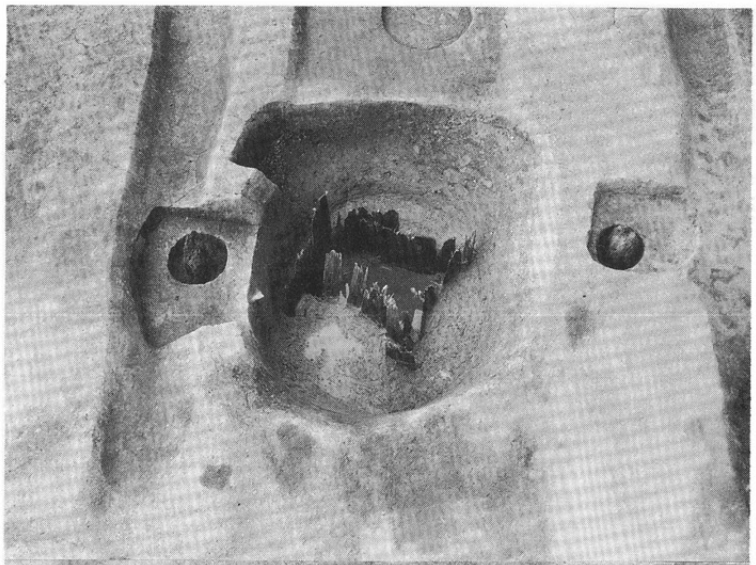
5. 建物ＳＢ12（南から）



6. 建物ＳＢ11（南から）



7. 建物ＳＢ07（西から）



8. 井戸ＳＥ24（南から）

9. 井戸ＳＥ23（東から）

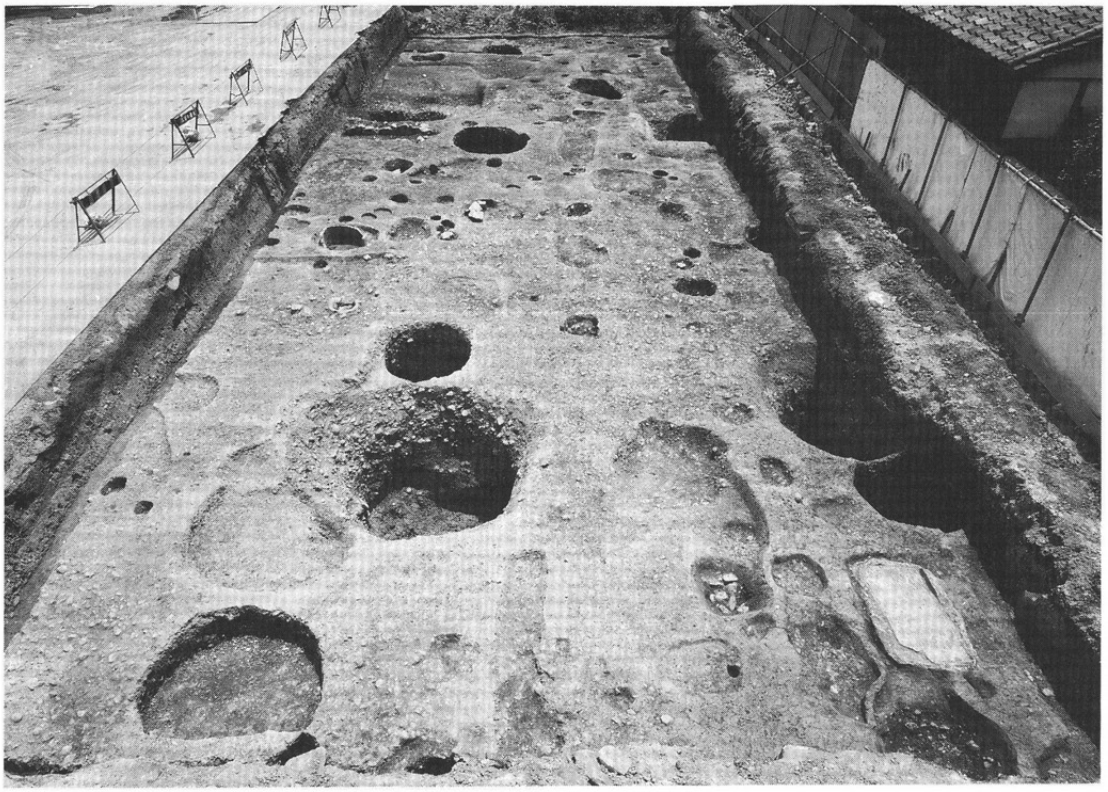
10. 井戸ＳＥ22（北から）

11.　ＳＸ28全景（北から）

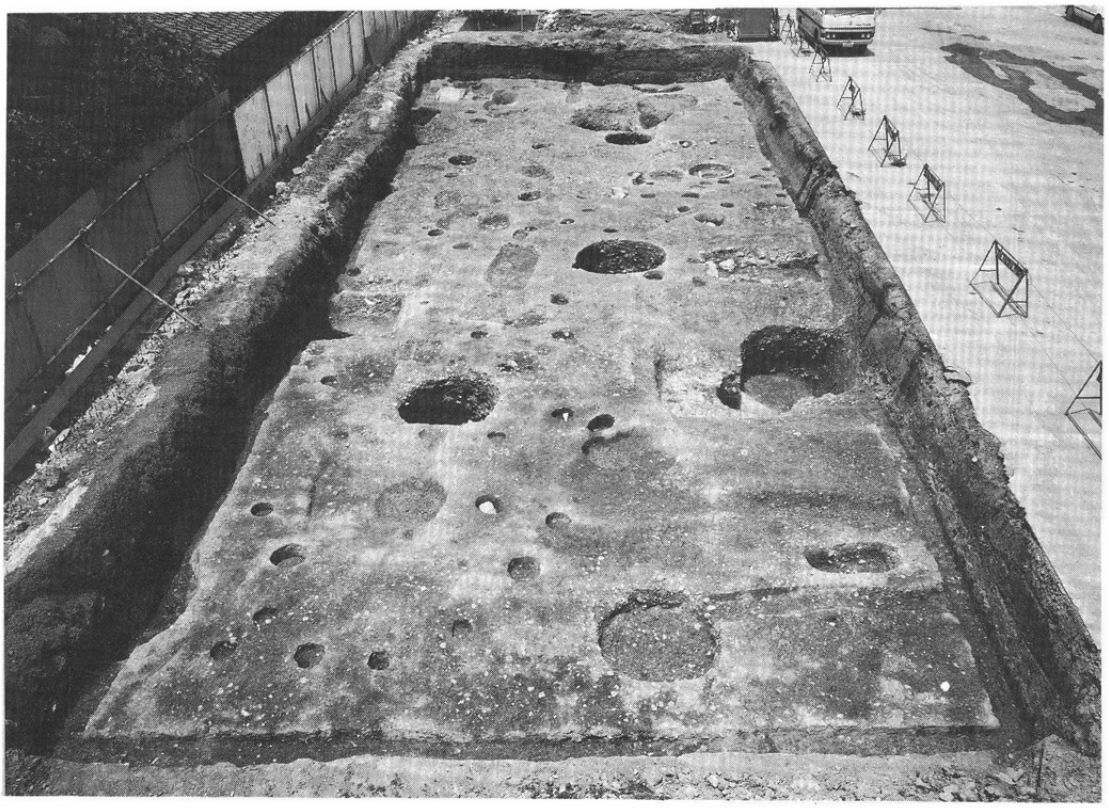
12.　ＳＸ28（北から）

13.　ＳＸ28（北から）

図版26　平城京左京三条六坊十二坪　第176次

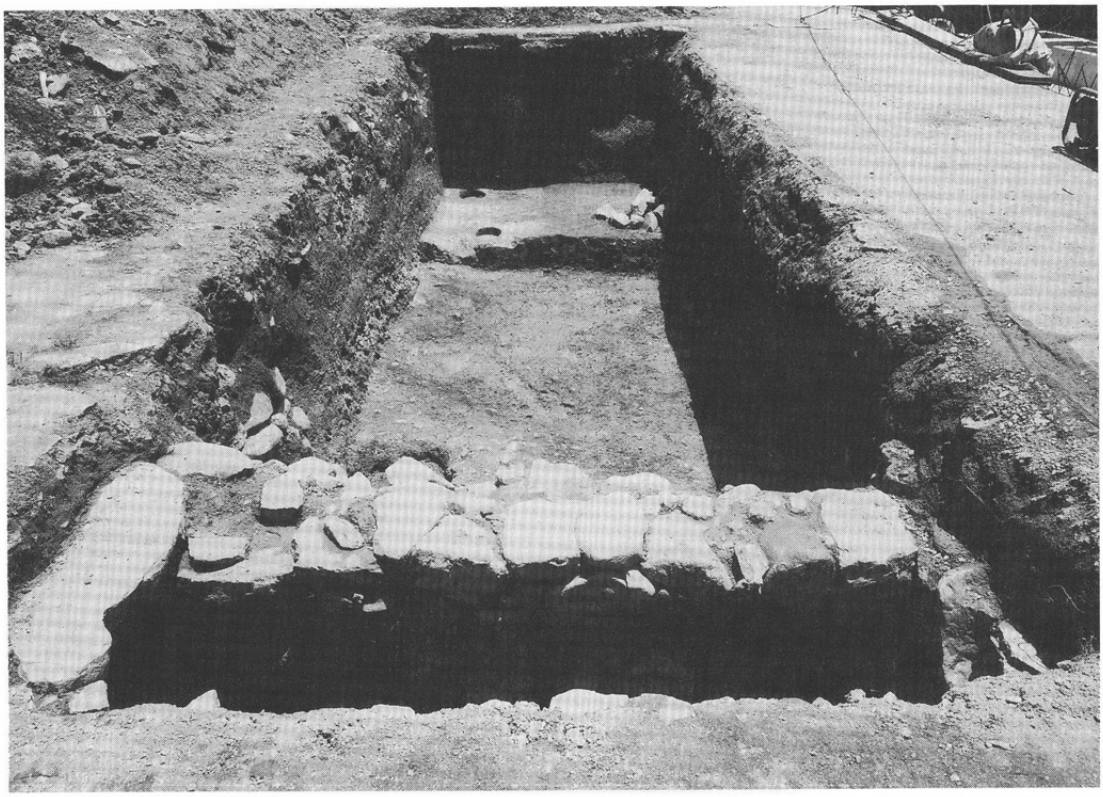


1.　発掘区全景（西から）



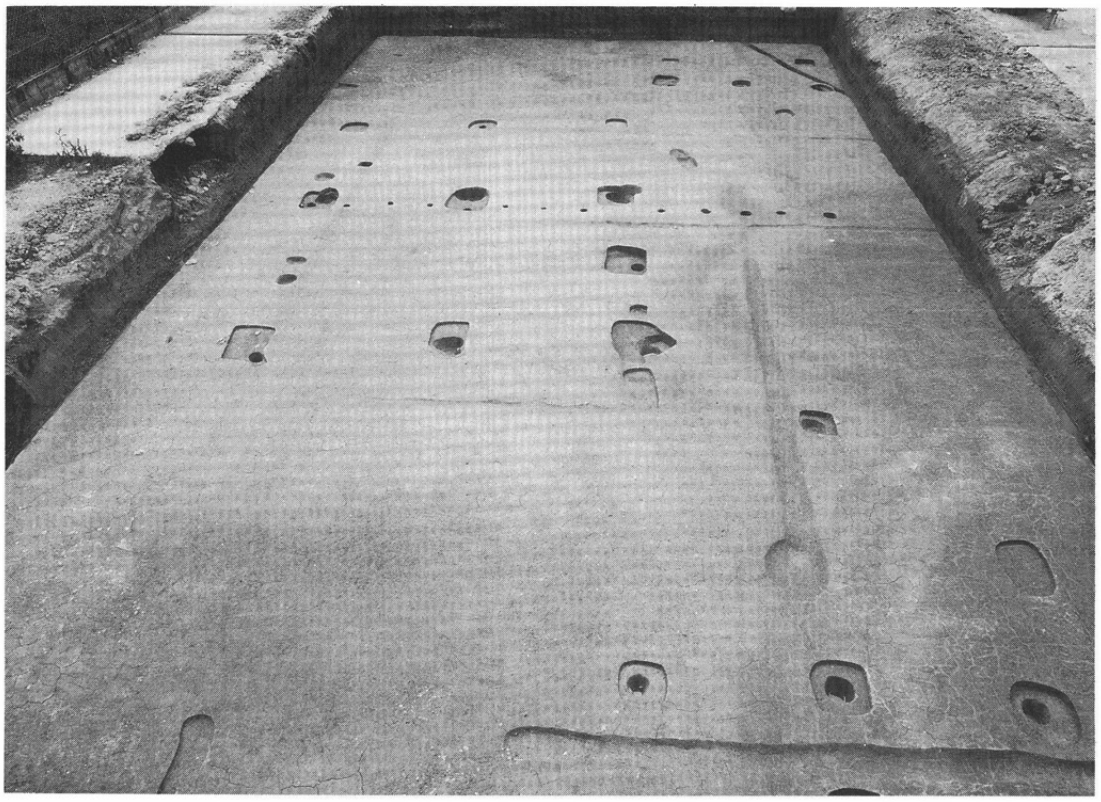
2.　発掘区全景（東から）

1.　暗渠ＳＤ01（南から）



2.　発掘区全景（西から）

図版28　平城京左京六条四坊十三坪　第179次



1.　発掘区全景（東から）

2.　発掘区全景（西から）